

福岡市埋蔵文化財調査報告書第478集

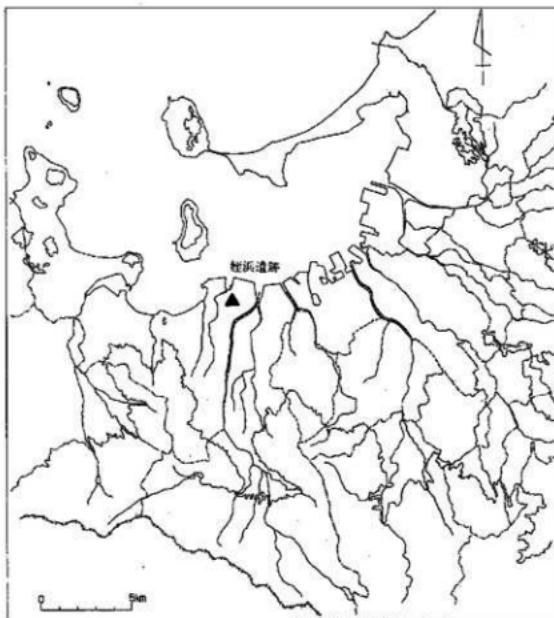
姪浜遺跡2

1996

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第478集

めい の はま
姪浜遺跡 2



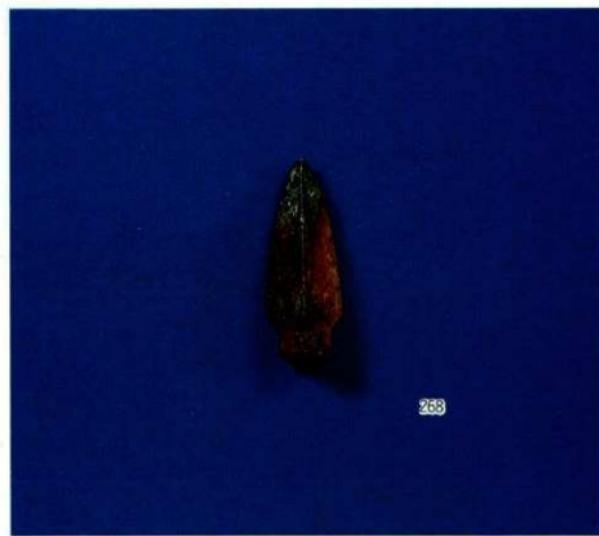
遺跡番号 M NH
調査番号 9252

1996

福岡市教育委員会



1 貝・骨角製品



2 漢式三角錠



3 製塙土器



4 無文土器

序 文

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところであります。

本報告による姪浜遺跡群からは弥生時代以降の遺構・遺物が見つかっており、貴重な成果をあげることが出来ました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対し、心からの謝意を表します。

平成 8 年 3 月 29 日

福岡市教育委員会
教育長 尾 花 刚

例　　言

- 本書は西区姪浜2・3丁目地内における都市計画道路小田部姪浜線道路改良事業に伴い、福岡市教育委員会が平成5年(1993年)2月1日から実施した、姪浜遺跡群第3次調査の発掘調査報告書である。
- 遺構の実測は長家伸、榎本義嗣が行った。
- 遺物の実測は長家、榎本、平川敬治、下川航也、大庭友子、また弥生時代の土器・石器の一部を後藤直、山崎純男が行った。
- 製図は長家、戸畠智恵子が行った。
- 遺構写真は長家、榎本が行い、遺物写真は平川が行った。
- 遺構は全体で通し番号を付け、遺構の性格によって頭に略号を付して表記した。遺構の略号は竪穴住居跡(SC)、井戸(SE)、土坑(SK)、甕棺(K)、溝(SD)、ピット(SP)、不明遺構(SX)である。
- 遺物番号は全体で通し番号とする。
- 本書で用いる方位は磁北であり、真北から6°21'西偏する。
- 本書の執筆・編集は長家が行った。

遺跡調査番号	9252	遺跡略名	MNH-3
調査地地番	西区姪浜2・3丁目地内	分布地図番号	89-0367
工事面積	8750m ²	調査対象面積	2360m ²
調査実施面積	1330m ²	調査期間	平成5年2月1日～平成5年5月20日

本文目次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査体制.....	1
第2章 遺跡の立地と周辺の環境.....	2
第3章 調査報告.....	6
1. 調査概要.....	6
2. 穴住居跡.....	9
3. 土坑.....	29
4. 墓棺.....	41
5. 井戸.....	43
6. 溝.....	44
7. 不明遺構.....	45
8. その他の遺物.....	52
9. 小結.....	63

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	3
第2図 調査区位置図 1 (1/5,000)	4
第3図 調査区位置図 2 (1/800)	5
第4図 試掘位置及び現況地形図 (1/2,500)	6
第5図 遺構配置図 (1/500)	7
第6図 調査区土層図 (1/200)	8
第7図 SC011実測図 (1/40、1/20)	10
第8図 SC011出土遺物実測図 (1/4、1/2)	11
第9図 SC022、023実測図 (1/40)	12
第10図 SC022、023出土遺物実測図 (1/4、1/2)	13
第11図 SC025、028実測図 (1/40)	14
第12図 SC025出土遺物実測図 (1/4、1/2)	15
第13図 SC030、033実測図 (1/40)	16
第14図 SC030出土遺物実測図 (1/4、1/2)	17
第15図 SC033出土遺物実測図 (1/4、1/2)	18
第16図 SC038実測図 (1/40)	19
第17図 SC038出土遺物実測図 (1/4)	20
第18図 SC039、041実測図 (1/40)	21
第19図 SC039、041出土遺物実測図 (1/4)	23
第20図 SC042、086実測図 (1/40)	24
第21図 SC086出土遺物実測図 (1/4)	25
第22図 SC105実測図 (1/40)	26
第23図 SC105出土遺物実測図1 (1/4)	27
第24図 SC105出土遺物実測図2 (1/4、1/2)	28
第25図 SC163実測図 (1/40)	29
第26図 SK032出土遺物実測図 (1/2)	30
第27図 SK032、034、036、040、043実測図 (1/30)	31
第28図 SK092、094、096、097、098配置図及び土層図 (1/40)	33

第29図	SK092、094、096、097、098実測図 (1/30)	34
第30図	SK092、094出土遺物実測図 (1/4、1/3、1/2)	35
第31図	SK096、097出土遺物実測図 (1/4)	36
第32図	SK095出土遺物実測図 (1/4、1/2)	37
第33図	SK098出土遺物実測図 (1/4)	38
第34図	SK156、172実測図 (1/30)	40
第35図	SK156出土遺物実測図 (1/4、1/2)	41
第36図	K121及び出土遺物実測図 (1/20、1/4)	42
第37図	SE020、084、122実測図 (1/80)	43
第38図	SX026、073、079、091、093配置図及び実測図 (1/20、1/80)	44
第39図	SX026出土遺物実測図 (1/4)	45
第40図	SX073出土遺物実測図 (1/4、1/2)	47
第41図	SX079出土遺物実測図1 (1/4)	48
第42図	SX079出土遺物実測図2 (1/3、1/2、1/1)	49
第43図	SX173、174実測図 (1/20、1/80)	50
第44図	SX091、093、173、174出土遺物実測図 (1/4、1/2)	51
第45図	包含層A出土遺物実測図1 (1/4)	53
第46図	包含層A出土遺物実測図2 (1/4)	54
第47図	包含層A出土遺物実測図3 (1/4)	55
第48図	包含層A出土遺物実測図4 (1/4、1/2)	56
第49図	包含層B出土遺物実測図1 (1/4)	58
第50図	包含層B出土遺物実測図2 (1/4、1/2、2/3)	59
第51図	II・III区造構検出面出土遺物実測図 (1/4、1/2)	61
第52図	近世以降の造構出土石器実測図 (1/3、1/2)	62
第53図	トレンチ出土遺物実測図 (1/2)	63
付 図	調査区全体図 (1/200)	

図版目次

巻頭図版	
1 貝・骨角製品	17 SC042 (北から)
2 漢式三角錐	18 SC086 (東から)
3 製塩土器	19 SC105 (北から)
4 無文土器	20 SK092、094、096、097、098 (東から)
1 調査地点より西を望む	21 SK092 (北から)
2 調査地点より北を望む	22 SK092土層 (西から)
3 I区全景 (北から)	23 SK094 (東から)
4 II区全景 (北から)	24 SK096 (北から)
5 III区北半全景 (南西から)	25 SK096土層 (北から)
6 III区南半全景 (北西から)	26 SK098 (西から)
7 SC011 (東から)	27 SK097、098土層 (南から)
8 SC011窓内出土状況 (東から)	28 K121 (西から)
9 SC022 (西から)	29 SE020、021 (西から)
10 SC030 (東から)	30 SE084 (東から)
11 SC030、033 (北から)	31 SE122 (南から)
12 SC038西半 (北から)	32 SX026 (西から)
13 SC038東半 (北から)	33 出土遺物 1
14 SC038遺物出土状況 (東から)	34 出土遺物 2
15 SC039 (北から)	35 出土遺物 3
16 SC041 (北から)	36 出土遺物 4
	37 出土遺物 5
	38 出土遺物 6

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

都市化の進行に伴う交通量の増大は国内各都市に共通した問題であり、福岡市においてもその例外ではなく、交通渋滞が市内各地で半ば恒常化している。都市計画道路小田部姪浜線もこの様な交通状態の緩和を目的として昭和53年3月18日都市計画決定され、昭和62年10月1日に事業認可がおりている。

施工区間は国道202号線と通称「よかトピア通り」を約560m延長するものである。本計画用地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姪浜遺跡群に含まれているため、施工に先立ち、平成4年10月13日付け、土木第2066号により土木局道路建設部街路課長から埋蔵文化財課長宛に事前調査依頼が提出された。これを受けて埋蔵文化財課では対象地域のうち現道部分を除く拡幅部分8,750m²について試掘調査を行い、このうち2,360m²で遺構を確認した。この結果を受けて協議を行い、遺構確認部分については施工前に発掘調査を行い記録保存を図ることで合意した。

発掘調査は平成5年2月1日～平成5年5月20日にかけて行った。

発掘調査を行うに当たっては、地元町内をはじめ土木局街路課の方々にはご理解を賜り、ご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

2. 調査体制

事業主体 土木局道路建設部街路課

調査主体 教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学（前任） 荒巻輝勝（現任）

第1係長 飛高憲雄（前任） 横山邦継（現任）

調査庶務 第1係 入江幸男

調査担当 第1係 長家伸 植木義嗣

調査作業 牛尾豊 牛尾與志輔 小柳和行 津田貢 井上ヒテ子 因ヨシ子 倉光アヤ子

小柳和子 高橋茂子 岳美保子 辻節子 鍋山千鶴子 結城千賀子 結城信子

和田裕見子

整理作業 太田次子 戸畠智恵子

なお調査時には磯原先生にご指導をいただいた。また整理作業時には無文土器について後藤直氏、石製品、貝・骨角製品及び製塙土器の認定等について山崎純男氏には様々な御教示を頂いた。

第2章 遺跡の立地と周辺の環境

姪浜遺跡群は地形的に福岡市の西部にあたり、室見川の堆積作用によって形成された早良平野の西端沿岸部に位置する。早良平野は主に室見川の扇状地平野及び三角州平野によって構成され、低段丘が部分的に存在している。また沿岸部には帯状に砂丘が広がり、平野の出口を塞ぐ形となるため、砂丘後背部は湿地となり平野部前面と本体を画している。このような立地から砂丘上の遺跡について内陸部の遺跡に比べて閉塞性が高いものと思われ、これまでの調査事例でも内陸部と異なる様々な遺構・遺物が検出されている。

地域の沿革を概略述べると、姪浜は室見川左岸に位置し、蒙古襲来に備える石築地の築造及び警固役に関わり、その名が文献資料に残されている。現在、元寇防壁は名柄川左岸の小戸地区において確認されているが、名柄川右岸及び室見川左岸地域では確認されていない。室見川右岸では再び確認されているため、この地域では防壁破壊が早い段階に進んだのであろうか。なお今回の調査に伴う事前の試掘調査によても確認されなかった。室町時代には当地に九州探題が置かれている。江戸時代には唐津街道の宿場として栄え、現在の集落の基礎が形作られたようである。現在集落内に残る多くの寺社はこの時期に開かれたものである。また製塩作業も盛んで、1781年には塩浜奉行が置かれていることは調査成果を考えると示唆的である。近代には姪浜炭鉱が開かれ、石炭関係産業の隆盛と共に町も大きく発展した。昭和8年から福岡市に編入され、現在に至っている。現在も集落内は近世・近代の町家が多く残されており、近世町家のたたずまいを現在に伝えている。

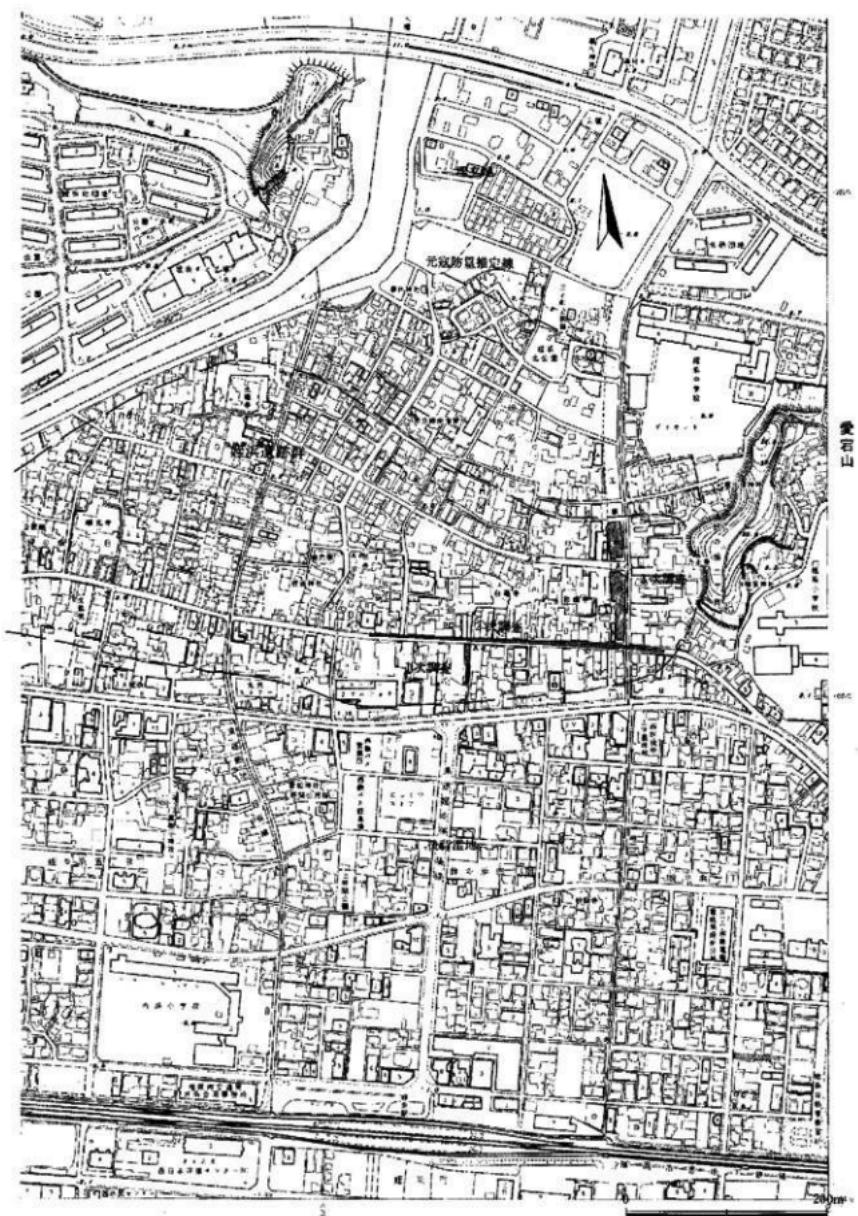
姪浜遺跡群では本報告分を含めて3次に渡り発掘調査が実施されている。第1次調査は旧唐津街道に面した工事中に甕棺が発見され緊急に調査が行われている。この結果弥生時代中期後半に属する甕棺2基が記録されている。この外にも土器・石器が工事中に採集されており、未発見の甕棺群の存在も想定されていた。2次調査は砂丘尾根筋に沿って伸びる旧唐津街道における下水道敷設工事に伴い立会い調査を行っている。ここでは1次調査から続く甕棺群が検出され、数十基に及ぶ甕棺の調査・取り上げが行われた。以上の既調査結果により本遺跡群には弥生時代の生活遺構及び大規模な埋葬遺構が存在することが知られていた。

周囲の遺跡を概観すると、姪浜遺跡の位置する早良平野では博多湾岸に同様の砂丘遺跡が知られている。金屑川右岸には藤崎遺跡が知られている。藤崎遺跡では本格調査が行われる以前から、箱式石棺から弥生前期に位置づけられる甕棺・小壺・箱式石棺からは三角縁二神龍虎鏡・素環頭太刀・方格渦文鏡等の遺構・遺物が知られていた。この後本格的な発掘調査の進展によって三角縁二神二車馬鏡・太刀・刀子を副葬した方形周溝墓群及び甕棺群を確認し、更に埋葬遺構だけでなく古墳時代後期に属する竪穴住居跡・古代～中世の溝・土坑などが検出されている。また藤崎遺跡と対をなすのが隣接する西新町遺跡である。弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴式住居跡を初めとする生活遺構を主体とする。出土遺物には半島産の瓦質土器・陶質土器を始めとして大型板状鉄製品・ノミ状鉄器など国内に類例の少ない遺物が出土している。搬入品が目立って多く、海を媒介として国内外各地との盛んな交流を行った様子を伺うことができる。また姪浜遺跡の南側に隣接した独立丘陵上には箱式石棺から二神二獸鏡・銅鏡等が出土した五島山古墳が知られている。このように博多湾岸に面した地域からは從来から対外的な窓口として様々な搬入品を保持し得たことを伺うことができる。

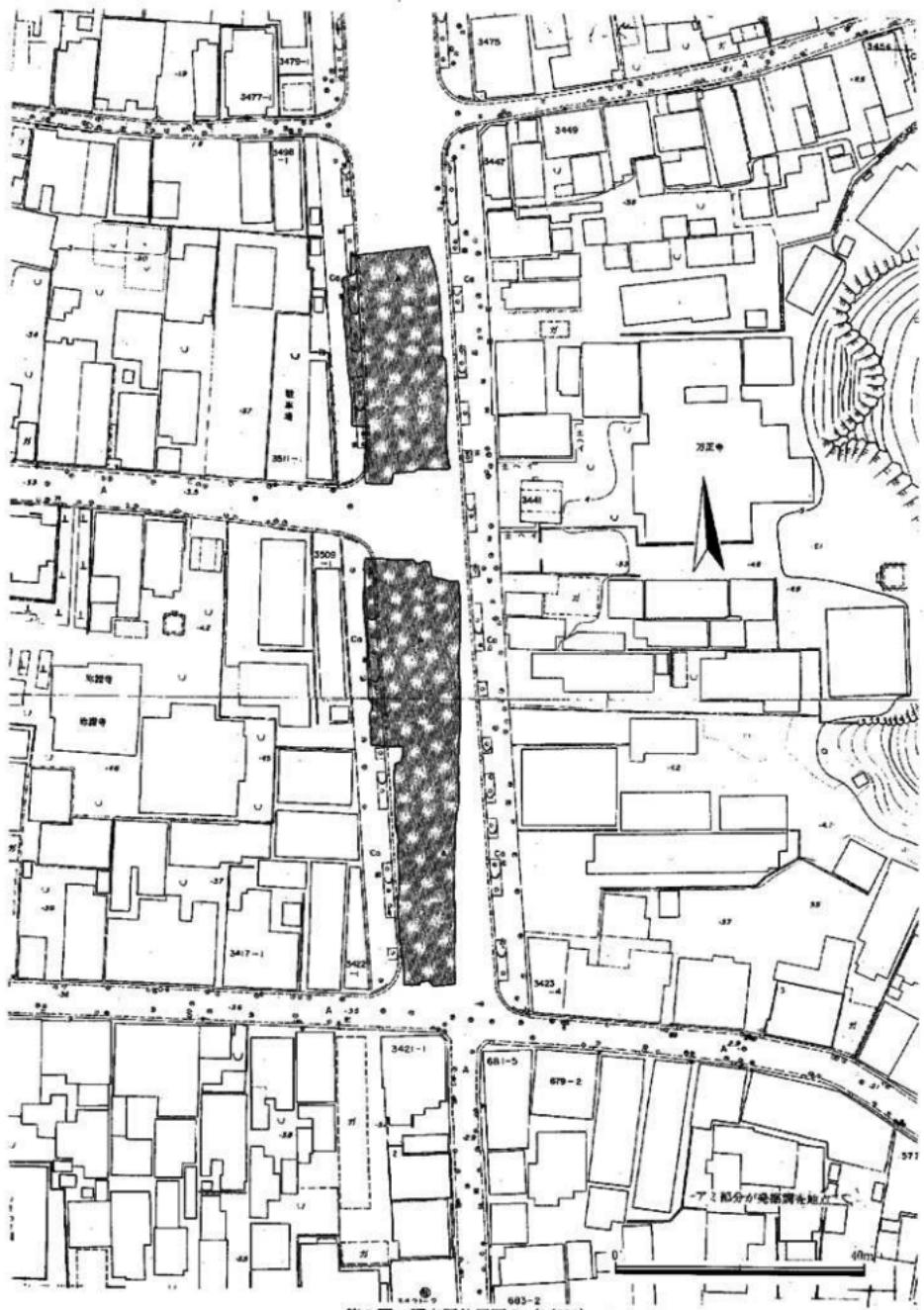


第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

- | | | |
|----------|----------|--------------|
| 1. 稲浜遺跡 | 5. 有田遺跡群 | 9. 四箇遺跡群 |
| 2. 藤崎遺跡 | 6. 須賀遺跡群 | 10. 桐六町ツクシ遺跡 |
| 3. 西新町遺跡 | 7. 古武遺跡群 | 11. 宮の前遺跡 |
| 4. 五島山古墳 | 8. 田村遺跡群 | 12. 羽根ノ遺跡 |



第2図 調査区位図1 (1/5,000)



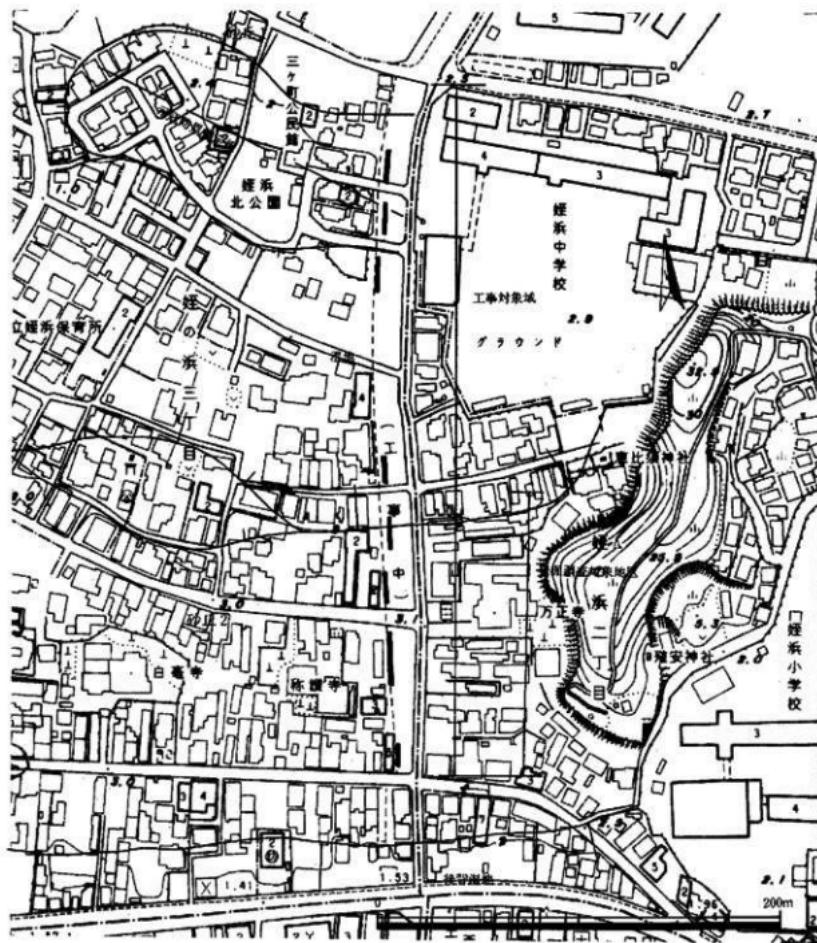
第3図 調査区位置図2 (1/800)

第3章 調査報告

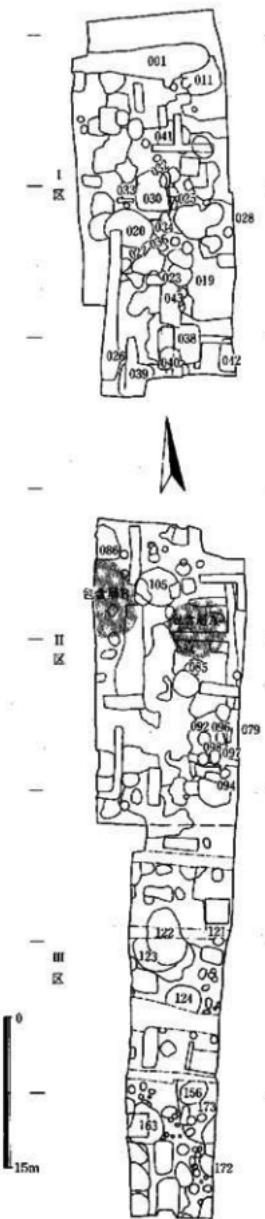
1. 調査概要

試掘調査

試掘調査は工事対象地 8、750m²全体に対して行われた。その結果北側では現姪浜中学校の校舎部分の西隣に海浜前面の砂丘が形成されていた(砂丘1)。この砂丘上では元寇防墓検出の可能性も考えられたが、近世～近代に墓所として利用されており防墓の痕跡は認められなかった。墓所は既に改葬済であるが、「元文2年」「明治2年」等の墓碑が出土し、多量の骨片が土中に含まれていた。中学校の



第4図 試掘位置及び現況地形図 (1/2,500)



運動場に隣接する部分は後背湿地となり造構は認められていない。

対象地の南半に2番目の砂丘が形成されており(砂丘2)、対象地南端部に向かって高くなっている。旧唐津街道辺りが最高所となっている。なおこの後の試掘により最高所より南側は国道202号線に向かって急激に落ち込んでいることが確認された。

2番目の砂丘は近世～現代の掘り込みによって破壊を受けているものの、弥生時代～古墳時代の遺構を検出したためこの部分を発掘調査対象地とした。

発掘調査

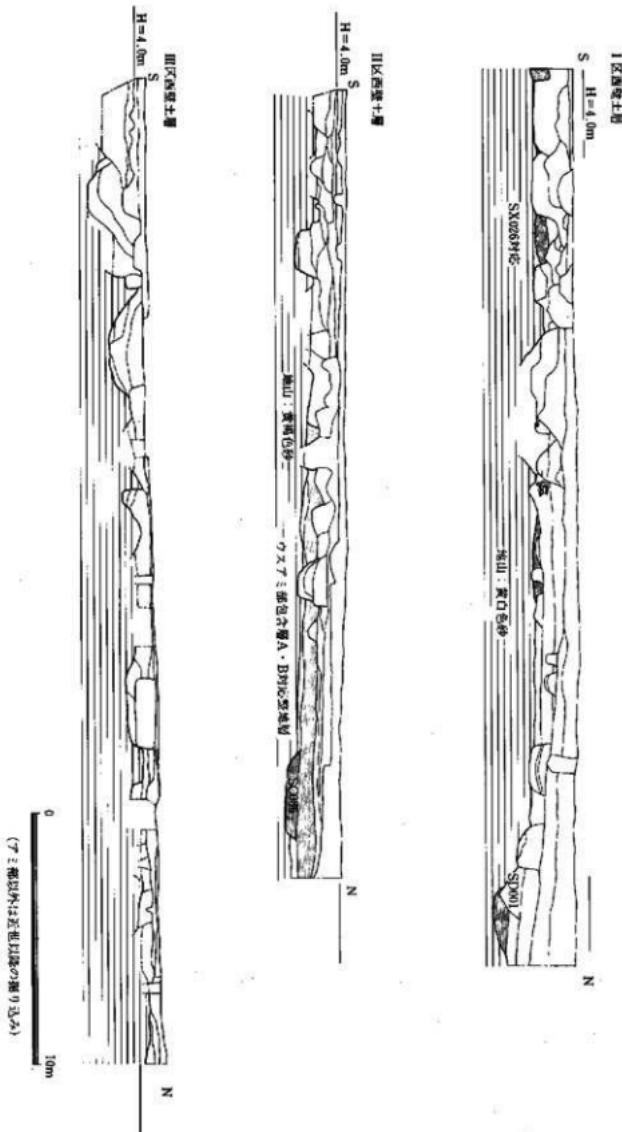
本調査は調査対象地北側より開始した。残土搬出及び家屋への進入路確保のための道路切替え等の関係で調査区を北側からI区、II区、III区と設定して順に調査を行った。I区北端は標高1.7m、III区南端部は標高2.7mを測り、砂丘北側は緩斜面を形成している事が確認された。

調査区は試掘でも認められたように近世～現代にかかる掘り込みにより大きく荒らされており、遺構の多くが破壊を受けたり、輪郭が不明瞭な状態であった。また遺構全体が搅乱に覆われていたものも多く、調査時の不注意により遺構の埋土を搅乱とともに掘削をおこなったり、調査担当者の認識不足による不手際もあり、帰属が不明瞭な遺物や遺構も存在する。

I 区は GL下1.5mで地山の黄白粗砂を検出する。北端に東西に延びる溝(SD001)が有り、これ以北は急激に落ち込んでいる。古墳時代に属する堅穴住居跡を検出しているが、これ以外にも認識しえなかった掘り込み(堅穴住居?)が西側土層等で確認されている。

II区はGL下1.2m～1.8mで黄褐色砂（風成砂）を検出する。北側に整地によると考えられる遺物包含層が形成されている。東西に一つずつ大きな遺物のまとまりがあり、東側を包含層A、西側を包含層Bとして遺物の取り上げを行っている。遺物は弥生時代中期～後期を主体とし、最も多く復元可能なものが多く有るが、土壌化した土が混入し、除去後に古墳時代の住居跡を検出していることなどから、緩斜面の埋め立てによるものと考えられる。埋め立て土（砂）は砂丘最高所の旧府津街道辺りのものと考えられ、2次調査で確認された斎格墓群の存在を考えると、これに伴う上器が大量にまとまって前面の緩斜面に押されて形成された物と考えられる。なお包含

第5回 遺構配置図 (1/500)



第6図 調査区上層図 (1/200)

層Bからは漢式三角縁が出土している。また遺構としては弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡・土坑・ピット等を検出している。なかでも弥生時代中期初頭に属する土坑からは製塩に用いられたと考えられる土器・石器・石器未製品・獸骨・骨・貝製品等の注目すべき遺物がまとめて出土している。

III区はGL下60cm～80cmで黄白色砂を検出する。弥生時代に属すると考えられるものとしては竪穴住居跡・甕棺墓・土坑等がある。III区においても近世以降の井戸・土坑等により遺構の判別が困難となっている。

以上の調査結果から、近世以降の整地・掘り込みにもかかわらず姪浜遺跡群内には弥生時代～古墳時代にかけての遺構・遺物が多く残されている事が確認できた。

2. 竪穴住居跡

SC011 (第7図)

I区北端部で検出する。北側はSD001に切られ、欠失している。東西長3.4m、南北長約3.5mのほぼ正方形を呈する。西壁や南寄りに竈を作り付けている。竈規模は長軸95cm、幅90cmを測る。竈は焼砂により確認できるが、壁体は残存しておらず袖部等も不明である。検出状況から煙道を屋外に出すタイプの竈と考えられる。竈内からは鋳壺、椀、瓶がまとめて出土している。鋳壺は9個体が出土している。殆どが完形品で、南側列が乱れているが3個～4個一組で3列に配して埋置されている。基本的には口を北側に向けて並べているようである。個体数としては一組の単位にはほぼ一致するものであろうか。また椀は完形で2個体が出土している。これら竈内の土器は支脚の上端面でまとめて出土しており、竈廐棄時の祭祀行為によるものと考えられる。竈祭祀に飯納壺が用いられている事は、生業との関係を示すものであり注目される。また竈の北側横面の床面からは須恵器直口壺と坏身がセットで据えられた状態で出土した。この際坏身は蓋として使用されている。また鉄鎌が1点出土している。出土遺物から6世紀後半に位置づけられる。

出土遺物 (第8図)

1～3は須恵器である。1・2は坏身で口径12cm程度で、身の深さは4cmである。返りはやや内傾し、口縁端部は丸みを持つ。3は直口壺で、口径8.5cm、器高6.1cmを測る。2・3は竈北側に接して壺に坏身で蓋をした状態で床面に据えられていた。

4、5土師器椀である。外面は指押え・横ナデ、内面は粗いナデにより整形されており、器壁は厚手である。4は底部外面に粗いヘラ削りを施している。

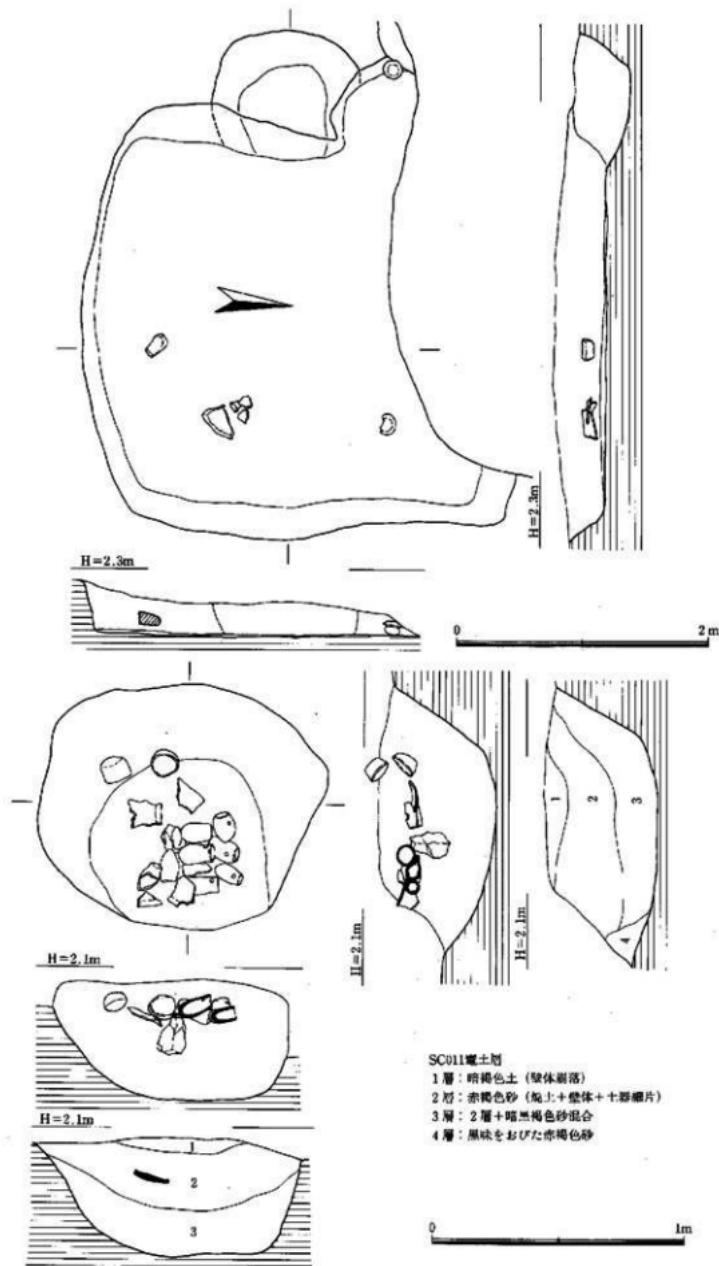
6～14は飯納壺である。口径4.6cm～6.5cm、器高11cm～12.8cmを測り、成形は指押え・ナデによる。穿孔はいずれも外側から内側斜め上方に向かって行われる。器形は大きく2類に分けることができる。I類：胴部最大径が底部のやや上にあり、胴部はやや丸みを帯びながら窄まり口縁部に至るもの(8・9・10・11・12)。I'類：I類より胴部が直線的に伸びるもの(6・7)。II類：胴部最大径が中位にあり、底部は尖り気味の長卵形である。外面は凹凸が激しい。また穿孔が他のものと異なり略長方形を呈する。

15は竈内出土の瓶である。把手・底部は欠けている。桃褐色を呈し、復元口径27.4cm、器高27.6cmを測る。外面はナデ、内面は縱方向のヘラ削りを施す。

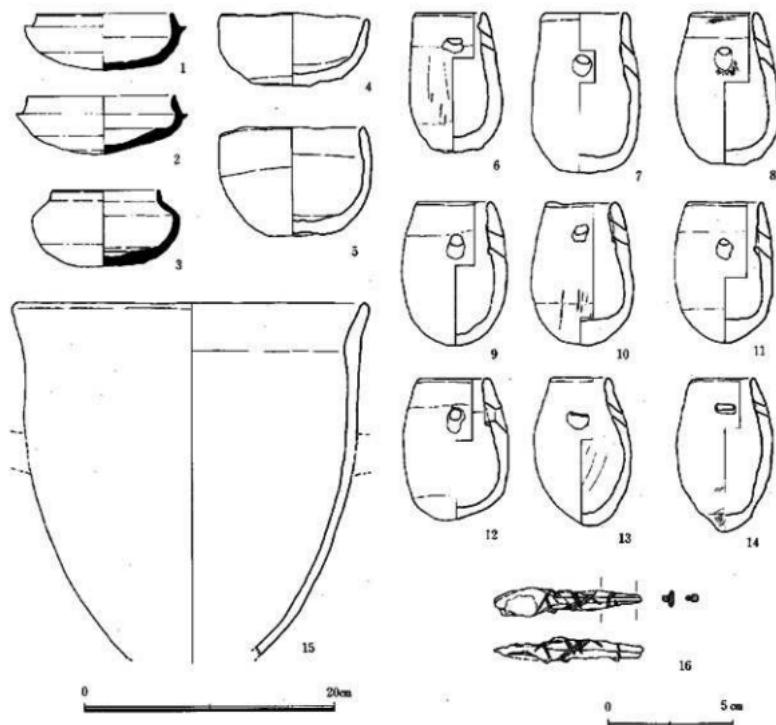
16は有茎の鉄鎌である。刃部は銹化が激しく剝離が進んでいるが柳葉形をなしている。茎部は刃部から続く部分は偏平で、端部側は一辺3mmの方形を呈している。茎部に平行して矢柄部分が残っており、茎部とは植物纖維で繋縛されている。

SC022 (第9図)

I区中央部で検出する。全体が近世以降の土坑・井戸等により削られており、不明瞭な部分が多い。



第7図 SC011実測図 (1/40、1/20)



第8図 SC011出土遺物実測図 (1~15は1/4、16は1/2)

が、淡黒色砂の埋土を除去したところで床面と考えられる平坦面を検出したため、堅穴住居跡と考えた。1辺4.5m~5mの略正方形を呈すると考えられるが主柱穴等の施設は検出していない。遺物には上面の搅乱から混入した近世陶磁器が多く含まれるが、土師器甕・壺・高壺・鉢・ミニチュア、鋳化の著しい用途不明鉄製品が1点出土している。

出土遺物（第10図17）

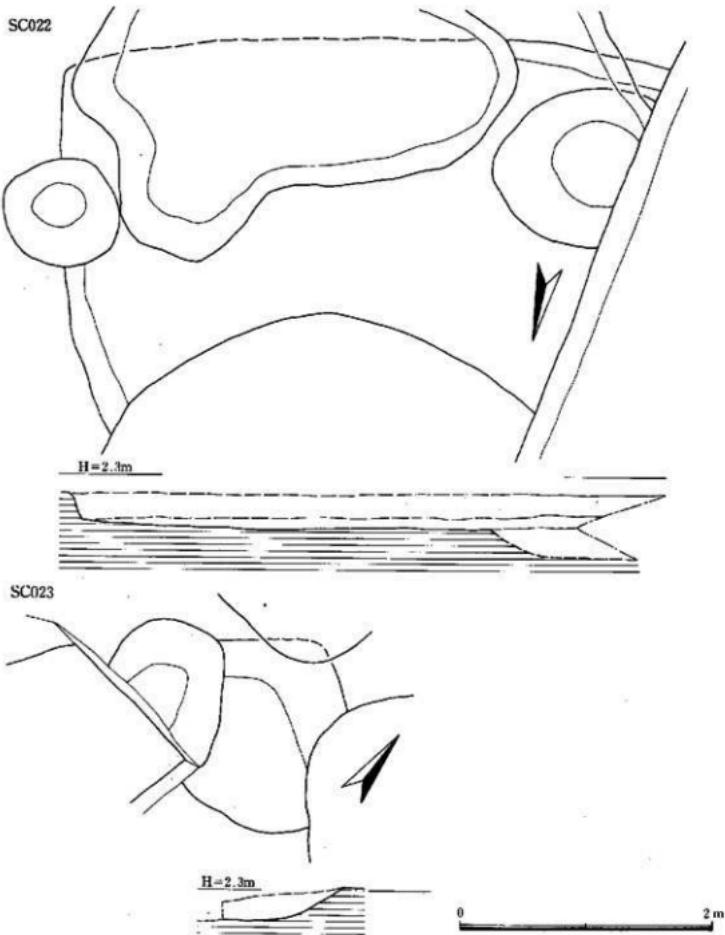
17は口縁部を欠く土師器甕である。外面は上半部に縱方向の刷毛目を施し、下半部は粗い削りによる。内面には下半に指ナデの痕跡が残る。器壁は厚く、成形も粗雑である。

SC023（第9図）

I区SC022の南側で検出する。埋土は淡黒色砂で、近世以降の土坑により大きく欠失しており、辛うじて北側コーナーと考えられる部分のみ残存する。土師器甕・高壺・柄、土錐、石錐が出土している。

出土遺物（第10図18~21）

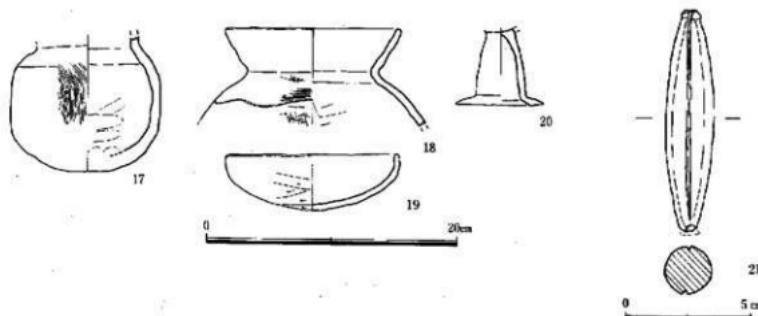
18~20は土師器である。18は甕で復元口径13.2cmを測る。胸部外面には横刷毛、肩部以下には縱刷



第9図 SC022、023実測図 (1/40)

毛を行う。肩部は余り張らず、振幅の小さい波状の沈線が刻まれている。内面は横方向のヘラ削りが施される。口縁部は僅かに内湾しているが、ほぼ直線的に斜めに長く伸びる。19は腕である。口径13cm、器高4.5cmを測る。口縁部は端部付近でやや強く屈曲し真上に立ち上がる。内面～口縁部外面は横ナデ、外面は手持ちの不整方向のヘラ削りを行う。20は高環脚部である。脚根部は余り開かず、径7cmを測る。箇部は中彫らみで、内面は横ナデを施す。

21は滑石製石錐である。全長9cm、重量41gを測る。平面紡錐形を呈し、断面は最大径部分で径2cm



第10図 SC022、023出土遺物実測図 (17~20は1/4, 21は1/2)

の円形をなす。長軸方向に2面に深さ1mm、断面V字形の溝が彫り込まれている。溝形の鋭利さから鉄器による掘り込みが想定できる。両端部には紐緊縛用の突起を削りだしている。また全体が小動物の歯牙痕跡が激しく、成形時の削り跡等は不明瞭となる。

SC025 (第11図)

I区中央部で検出する。周囲を近世以降の土坑で破壊されており四方いずれの壁も消失し、細部は不明瞭であるが、淡黒色砂を除去したところで床面と想定できる平坦面を検出しておらず、豊穴住居跡と考えた。床面に柱穴・焼土等の施設はみられない。土師器甕・小型壺、滑石製品が出上している。

出土遺物 (第12図)

22~24は土師器である。22・23は甕である。22は復元口径11.8cmを測る。口縁部は横ナデにより、余り傾かず直線的に上方に伸びる。口縁端部は丸く納めている。胴部は外面に横方向の刷毛目が残る。23は口縁部は短く外半している。端部は面取りを行い、端面が緩く窪んでいる。胴部は肩が張らず外面に縱刷毛を行う。内面は指押えで成形したのち刷毛目を施す。24は小型壺である。口縁部は緩く内湾しながら長く伸びる。口縁内面にはナデの後粗くジグザグの磨きを行い、外面は粗く縱方向に磨く。胴部は内面を粗く削る。胎土は精良で、色調は内面赤褐色・外面褐色を呈する。

25は滑石製石錘の未製品であろう。半分が欠損しているが、残存長4.1cm、断面略円形を呈する。溝の彫り込みも認められないが、紡錘形の石錘の製作途中に欠損、廃棄されたものであろう。

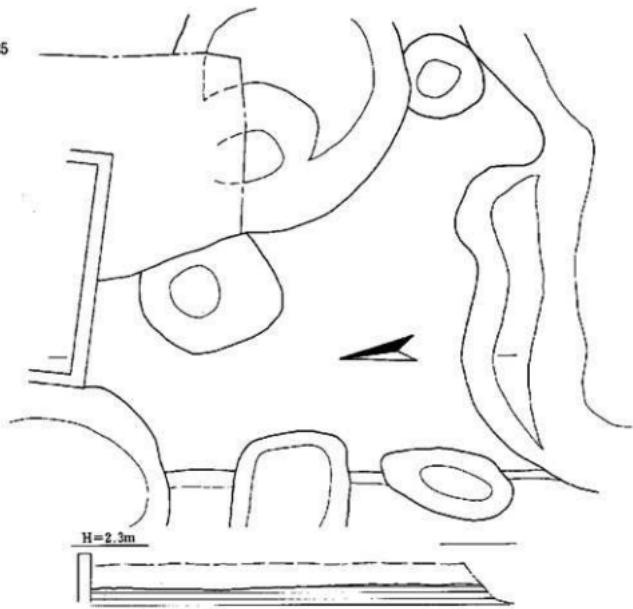
SC028 (第11図)

I区中央東側で検出する。埋土は淡黒色砂で、東半は調査J以外に延びており、南北長5.6m、壁高10cm程を測る。北壁沿いに長さ40cm、厚さ5cmの作業台と考えられる石材を据える。この他には柱穴・火跡等の室内施設は検出していない。遺物は土器細片が僅かに出土しており、甕の体部破片には外面に刷毛目、内面にヘラ削りが施されている。

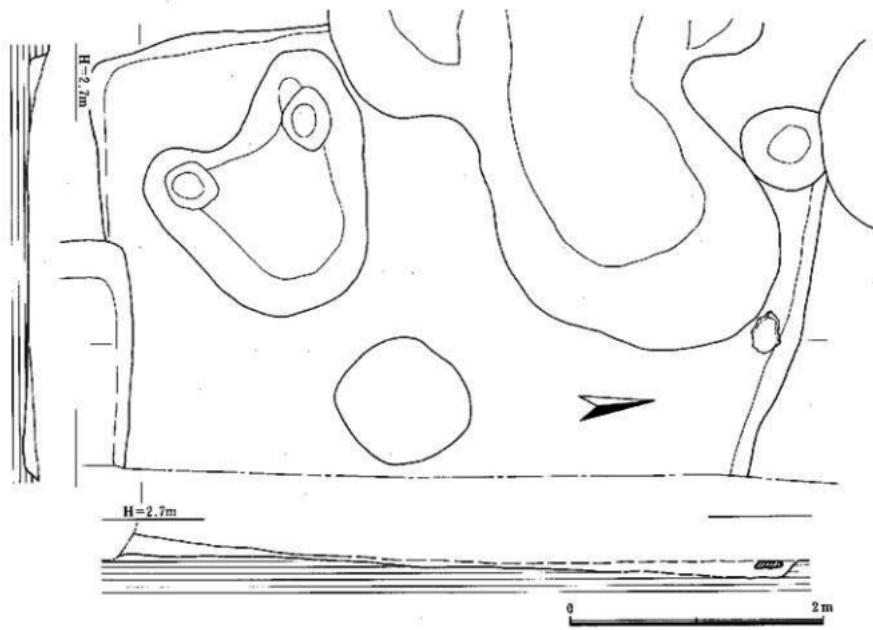
SC030 (第13図)

I区中央部で検出する。北側を長円形の搅乱により破壊されるが、南北長約2.5m、東西長3.3m、壁高40cmを測る。中央に70cm×90cmの浅い窪みを有するが、埋土に焼土等は認められなかった。住居跡埋土は黒褐色砂で、SC033を切って構築されている。主柱等は検出していない。遺物は土師器甕・碗・高杯・蝶皿等パンケース3箱分出土している。鉄器としては鉄鎌1点及び錐状鉄製品が1点出土している。その他砂岩製の円形有孔石錘の未製品が1点出土している。

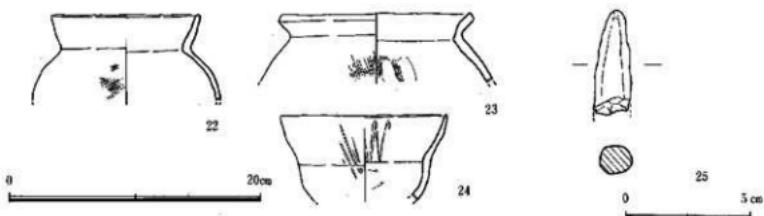
SC025



SC028



第11図 SC025、028実測図 (1/40)



第12図 SC025出土物実測図 (22~24は1/4、25は1/2)

出土遺物 (第14図)

26~35は土師器である。26~28は壺である。26は復元口徑16.6cmを測る。口縁部は傾斜が強く開き気味である。端部は円く納め肥厚が見られない。口縁部には内外面共に刷毛目が残る。胸部は肩が張り長胴となる。外面は上半が縦～斜め方向の刷毛、下半が縦方向の密な刷毛目を施す。内面は口縁部との境には縦方向の指ナデが残るが、境まで斜め上方に削り上げている。また下半は縦方向に削り上げる。27は口縁部を欠く小型の壺である。外面には縦方向の粗い刷毛が施され、内面は横方向に粗くらせん状に削る。器壁が厚く粗雑な印象を与える。外面は2次的に強い火を受けしており、煤が付着し一部がピンク色に変色するとともに、器壁が1/4程大きくなっている。28は口徑11.2cm、器高11.8cmを測る。口縁部はやや外湾気味に伸び、端部は丸く納める。口縁外面は縦刷毛、内面は横刷毛を行う。胸部は内面は口縁部との境まで粗く横方向に削る。また外面は刷毛目調整を行い、全面に煤が付着している。

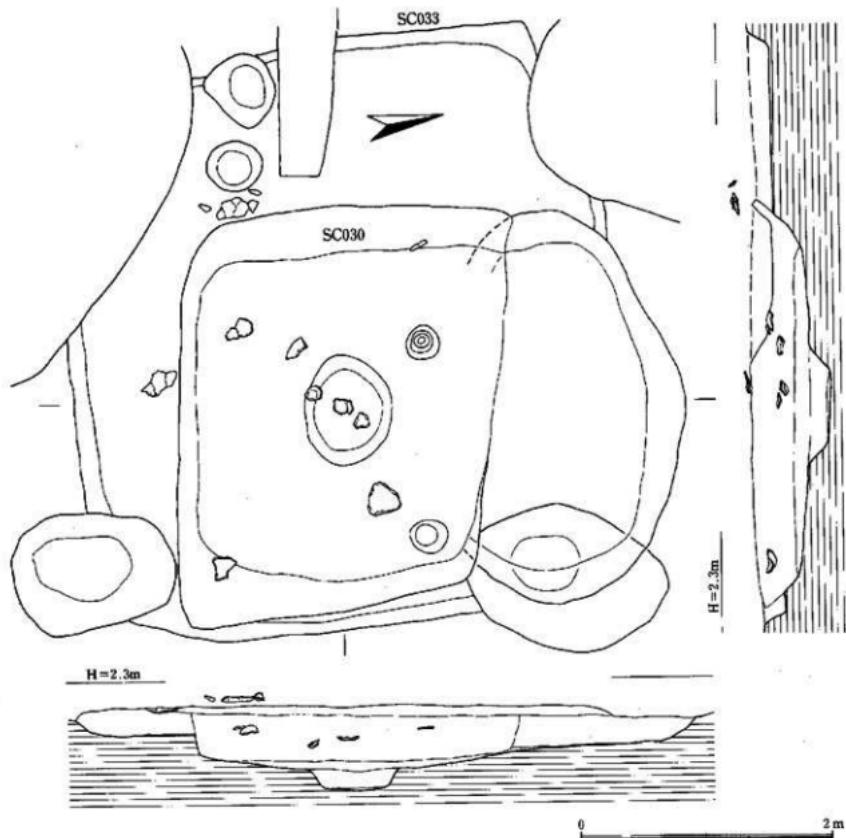
29は口徑12cmを測る小型壺である。口縁部は横方向の刷毛目により、端部は自然に納めている。胸部は内面に横方向の刷毛目が残っている。

30は高环脚裾部である。底径13.8cmを測る。内外面に横方向の刷毛目が残る。

31は口徑32cmを測る大型の椀口縁部である。内外面に横方向の刷毛目を施している。外面の刷毛はやや粗い。32は復元口徑15.2cm、4.8cmを測る。口縁端部はシャープに納めている。胸部下半は不整方向の削りが行われる。

33は上半部分が欠失しており、形態的には蛸壺に似るが、全体に2次焼成を非常に強く受け器壁が赤変している点や内面の調整が蛸壺に見られる縦方向の指ナデではなく横方向のナデにより、器壁も厚手であることから蛸壺と異なる砲弾形の土製品の可能性もある。34・35は飯蛸壺である。いずれも外面ナデにより平滑にし、内面は縦方向の指ナデによって成形している。穿孔は外方から内側上方に向かっておこなっている。34は口徑5.8cmを測る胸部下半1/3程に最大径を持ち、緩く丸みを帯びながら口縁部に向かって窄まっている。35は胸部が直線的に伸び、砲弾形を呈す。33は形態的には35に類似している。

36は残存長5cmの錐状鉄器である。全体に銹化による剥離が進み、先端部を欠失するが先端近くは断面径3mmの略円形を呈す。軸部は中央部が最も大きくなり4mm×5mmの長方形、基部は4mm角の方形である。37は長さ13.8cmの鉄鎌である。刃部は直線的に伸び、基部の折り返しは先端部に向かって右側に折り返す。身幅は基部で2.8cm、先端部で2.1cmである。



第13図 SC030、033実測図 (1/40)

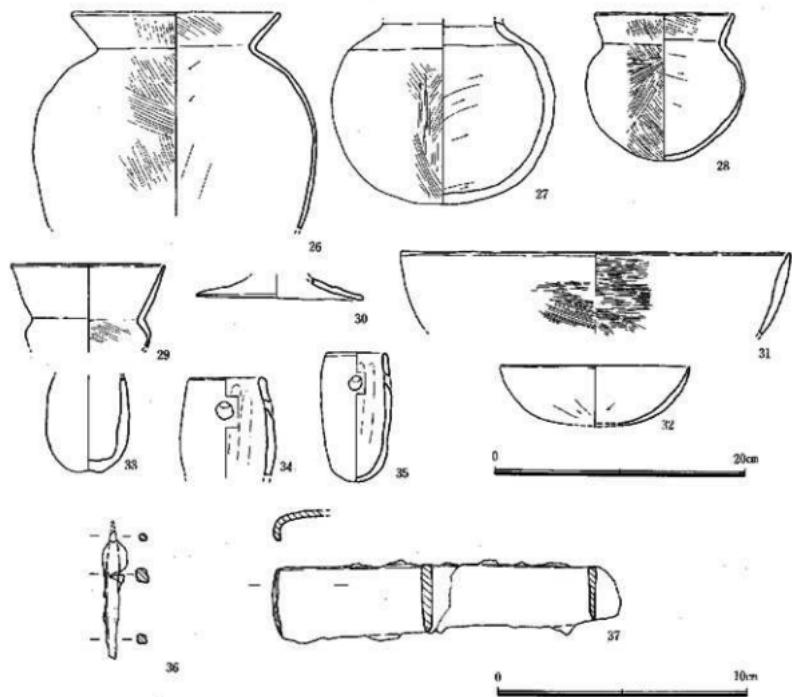
SC033 (第13図)

I区中央に位置し、SC030に中央部を切られている。南北長4.3m、東西長4.6mの略方形を呈し、壁高25cmを測る。主柱穴等の屋内施設は検出していない。埋土は暗褐色砂で、遺物は主に上面から多く出土している。出土遺物には土師器甕、高坏、土錘、手づくね土器及び鉄化により実測不可能な小型の鉄製品が一点ある。

出土遺物 (第15図)

38~42は土師器である。38・39は甕である。38は口縁部小破片で、ほぼ直線的に伸びる。端部は内側に摘まみ上げ、断面嘴状を呈する。39は復元口径14.4cmを測る。口縁端部は磨滅により丸くなっているが、内側に僅かにつまみ上げている。内面は頸部のやや下方まで横方向のヘラ削りを行う。

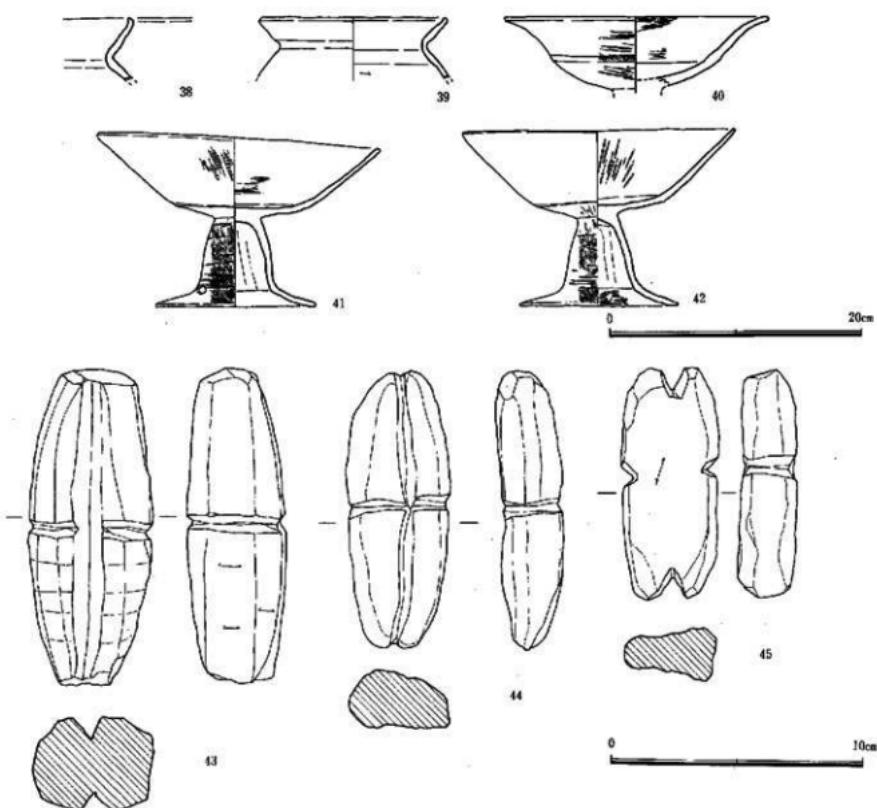
40~42は高坏である。これらは埋土上面からまとめて出土している。40は口径21cmを測り、脚部



第14図 SC030出土遺物実測図 (26~35は1/4、36、37は1/2)

を欠失している。外面綫刷毛の後粗い横磨きを行う。内面には横方向の刷毛目が痕跡的に残る。41は口径22.3cm、器高13.9cmを測り、ほぼ完形に復元できる。坏部は底部が短く、屈曲後は直線的に長く外方に伸びているため身が深くなっている。調整は外面綫刷毛の後横ナデを行い、内面は横刷毛の後横ナデを行う。脚部には屈曲部に2個所に焼成前穿孔がある。外面は綫刷毛を全面に行い粗く磨きを行っている。内面は筒部は指ナデ、脚裾部には横方向の刷毛が施される。42もほぼ完形で、口径21.6cm、器高14cmを測る。形態は41と同じである。磨滅が進んでいるため調整に不明瞭な点があるが坏部内面に縦方向のヘラ磨きが残る。

43~45は滑石製の石錘である。43~45は030・033の切り合い不明な時点での上面出土として取り上げたものであり、ここで報告しておく。43は長さ12.5cm、幅4.6cm、最大厚3.7cm、重量369gを測る。成形は全体に面取りを丁寧に行っている。縦方向に1条、横方向に1条の溝を彫り込む。溝は縦方向のものが断面三角形で深さ7mmを測るしっかりしたものである。横方向は深さ2mm程度で比較的浅い。調整・成形には鉄製利器が使用されており、溝の最下部には刃部の痕跡が残っている。44は長さ11cm、幅4cm、最大厚2.3cm、重量185gを測る。縦方向及び横方向に1条ずつの溝を彫り込む。表面は使用によると考えられる磨滅が進み、成形時の稜線は不明瞭で溝も一部潰れかけている。断面は偏平で片面

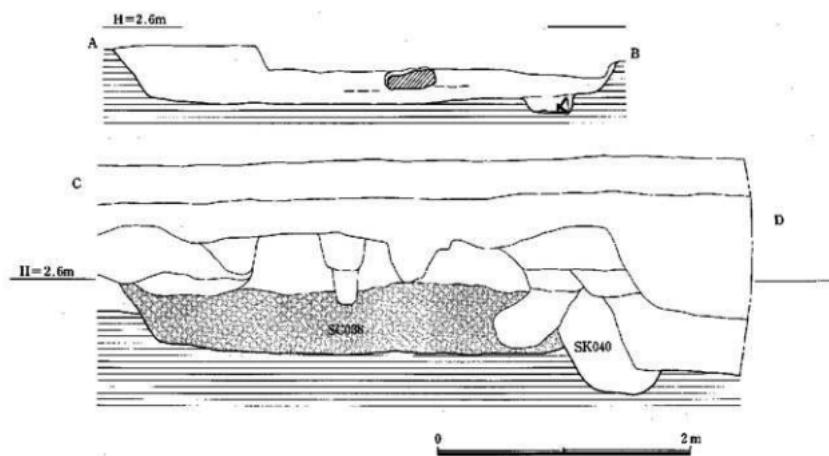
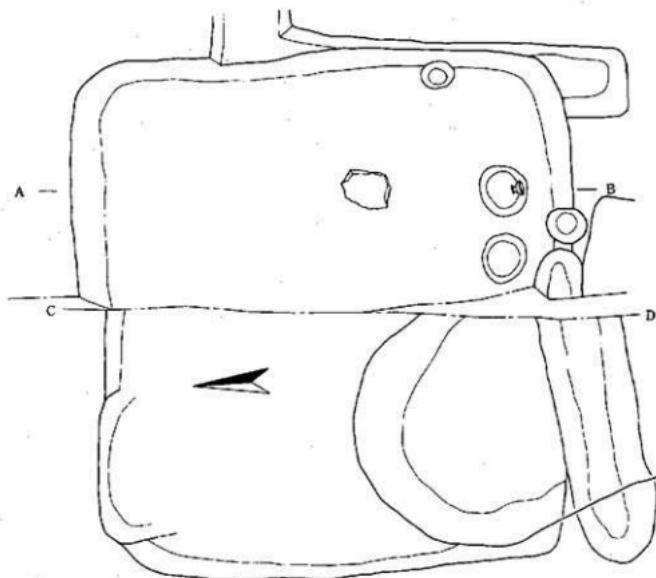


第15図 SC033出土遺物実測図 (38~42は1/4、43~45は1/2)

が平坦となっている。45は長さ9.2cm、幅3.8cm、最大厚2.1cm、重量129gを測る。側面は全周削りにより面取りを行っているが、前面及び背面は成形時の粗い剝離痕跡がそのまま残っている。4方向に縦縛用の刻みを入れ、平坦面に溝は彫り込んでいない。

SC038 (第16図)

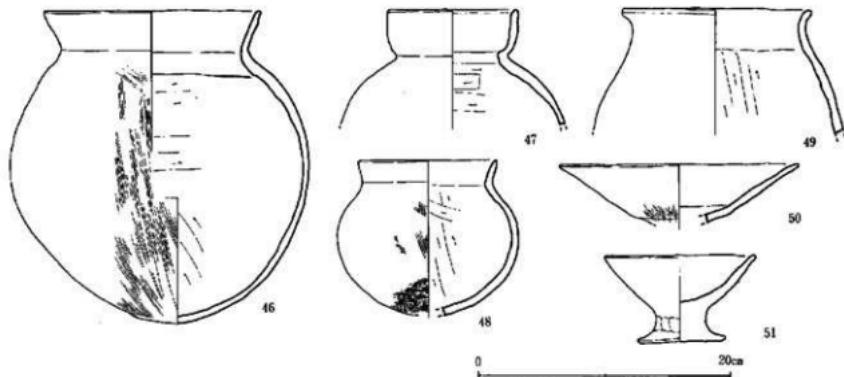
I区南端部で検出する。住居跡中央で調査区を分割していたことと、西側の住居上面が搅乱に覆われていたことにより西側の検出レベルがやや低くなっている。南北長3.9m、東西長4.1mの略方形を呈す。主柱穴は認められないが、中央やや東寄りに作業台と考えられる石材が出土しており、この石材の底面のレベルが床面となるのではないかと考えられる。また床面より検出したピットから小型の高壙が横置して出土した。その他上師器甕・壺・瓶等が出土している。出土遺物より4世紀後半に位置づけられる。



第16図 SC038実測図 (1/40)

出土遺物（第17図）

46~51は土師器である。46~49は甕である。46は口縁部は割合緩やかに屈曲し、直線に近く立ち上



第17図 SC038出土遺物実測図 (1/4)

がる。端部は丸く納め、内面への肥厚は認められない。胴部はなで肩で中位に最大径を有する。外面は上側から下側への縱刷毛を行い、内面は下半が左斜め上方へ削り上げ、上半は頸部屈曲のやや下側まで横方向のヘラ削りを行っている。また外面には肩部から胸部中位やや下側まで煤が付着している。47は復元口径10cmを測る。口縁部は頸部内面に狭い段を有し、真上に立ち上がる。胴部外面は横ナデにより、肩部は一部縱ナデを行っている。内面は横方向のヘラ削りによるが粗いため器壁が肉厚となる。48は口径11cm、器高12.5cmを測る。胴部上半は外面剥落が進み刷毛目がとんでいるが、下半は粗い横刷毛が残っている。内面は縱方向のヘラ削りが主体となり、一部に横の削りが行われている。口縁部は頸部で緩く反転し、短く斜め上方に伸びる。49は作りの粗い甕である。口縁部は緩く屈曲・反転させるのみで、端部は丸く納める。胴部は肩が張らず、下薙れの器形になる甕である。外面は磨滅が進み調整は不明瞭。内面は縱方向に削り上げる。

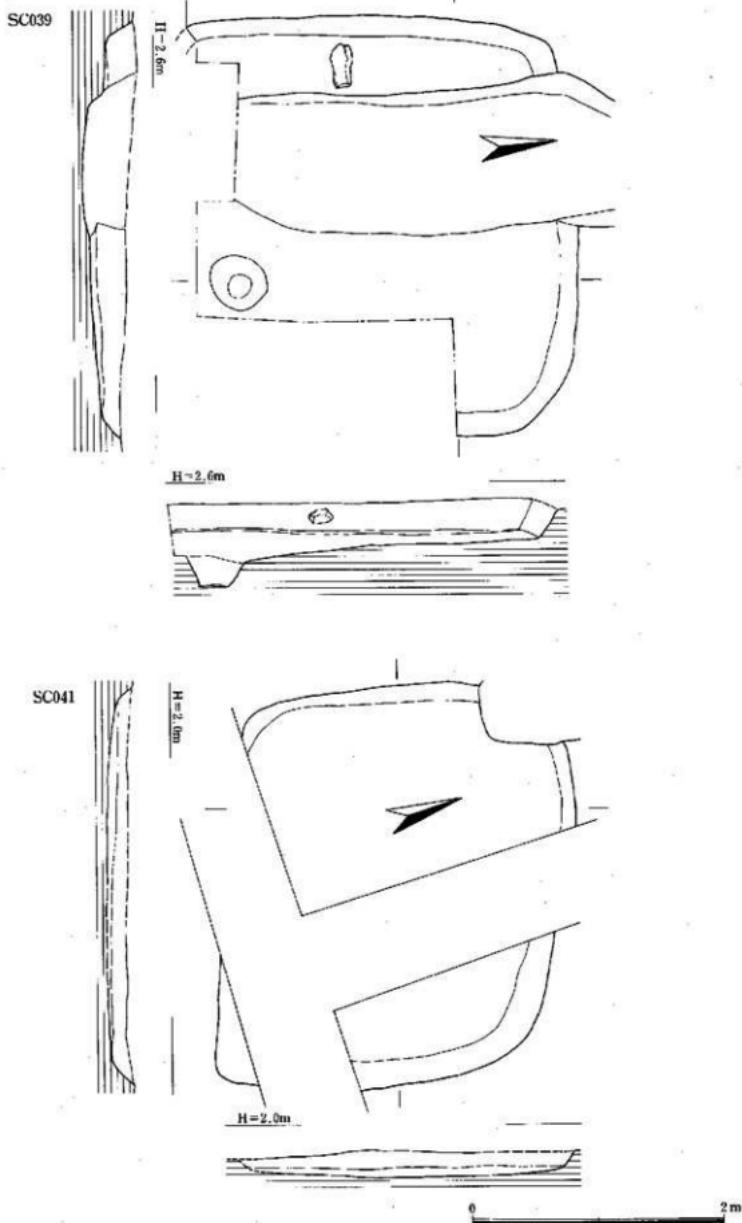
50・51は高環である。50は復元口径18.8cmを測る。外面屈曲部付近に縱刷毛が残り、その外は横ナデによっている。内面は全体が横ナデを行っている。51はピットから出土した完形の小型高環である(16図参照)。口径12cm、器高7.1cmを測る。环部内面は横方向の粗い回転ナデを行い、外面には粗い板ナデが施される。肩部は中実で指押えにより成形している。

SC039 (第18図)

I区南端部で検出する。溝状の擾乱が中央に入り、上面のはば全体に浅い擾乱が入っていたため当初は竪穴住居跡として認定できず、出土土器の大部分を包含層出土としてとりあげている。東西長3.3m、南北長約3.2mの略正方形を測る。埋土は淡黒色砂で、屋内の施設については検出していない。土師器甕・ミニチュア土器が出土している。また住居跡プランが不明瞭な時点で包含層出土として土師器甕を取り上げており、これもSC039に属するものと考えられる。出土遺物から4世紀の中頃に位置づけられる。

出土遺物 (第19図 52~56)

52・53は土師器甕である。52は復元口径16.5cmを測る。口縁部は緩やかに内湾しながら伸び、端部は横ナデを行い内外面に肥厚している。胴部は全体に縱刷毛を施したのちに肩部に幅4cmほどの横



第18図 SC039、041実測図 (1/40)

刷毛を行い、それ以下は非常に粗く横刷毛を行う。内面は頸部やや下まで横方向のヘラ削りを施す。煤の付着で色調は暗褐色を呈す。53は復元口径15cmを測る。口縁部は緩やかに内湾し、端部にはナデによる面取りが行われているが、内外面への肥厚は認められない。胴部外面には縱刷毛のち横刷毛が行われ、肩部には1条の沈線が断続的に廻る。内面には頸部や下方まで横方向のヘラ削りが行われる。

54は鼓形器台の脚裾部である。復元径21.5cmを測る。器面が荒れているため調整は不明瞭であるが外側横ナデ、内面ヘラ削りを行っている。色調淡黄褐色を呈する。

55は脚付き鉢である。低平な脚部が付くと思われるが脚部は欠失している。鉢部は口縁部は外側面共に縱刷毛の後横方向のナデを施す。胴部は外面は全体に縱刷毛を行い、最大径部位以下は下方へのヘラ削りを行っている。また内面は指押えで成形したのち上方に削り上げる。胎土は精良で、赤褐色を呈する。

56は手づくね土器である。内外面に指頭痕が残り、外面はその後ナデしている。

SC041 (第18図)

I区中央部で検出する。全体が近～現代の掘り込みにより荒らされており、遺構検出面より更に30cm下位で検出している。東西長3.2m、南北長2.6mの平面長方形を呈する。埋土は黒色砂で、屋内施設は検出していない。SC038、039、041は擾乱等の影響により、遺構の輪郭が非常に不明瞭とになっている。出土遺物は土師器小破片のみであるが、トレンチ掘削時に靖壺・土錐が出土しており、飯靖壺は小破片を含めると10個体以上の出土となるが完形に復元できるものではなく、一括投棄されたものでは無さそうである。

出土遺物 (第19図 57～65)

57～64は飯靖壺である。調整は基本的にどれも同じである；外面はナデにより、下半1/3以下には指頭痕が残っている。また内面は端部は横方向にナデ、およそ穿孔部以下は縦方向の指ナデを行っている。穿孔は外面下方から内面上方に向かって行われている。なお孔を図示していないものは穿孔部位が遺存していないものである。出土靖壺は欠損品が殆どであるため形状の不明瞭なものもあるが、大きく3類に分けることが出来る(SC011出土遺物の項 靖壺の分類参照)。I類(57～60)：胴部最大径が下位1/3程の所にあるものである。復元口径は6cm～6.4cmでまとまっているが、器高は10cm以下に復元できるもの(57、60)と10cmを越えるもの(58、59)に分けることが出来る。II類(61、64)最大径が中位にあるものである。61は底部が尖り氣味である。64は上半部の形態が不明であるがII類に含まれるものであろう。なお64は底面に1cm×0.7cmの略長方形の焼成前穿孔が行われている。III類(62、63)：口縁部の縮まりが緩く砲弾形を成すものである。最大径は中位よりやや高い位置にある。III類にも1類同様大小の製品が有るようである。

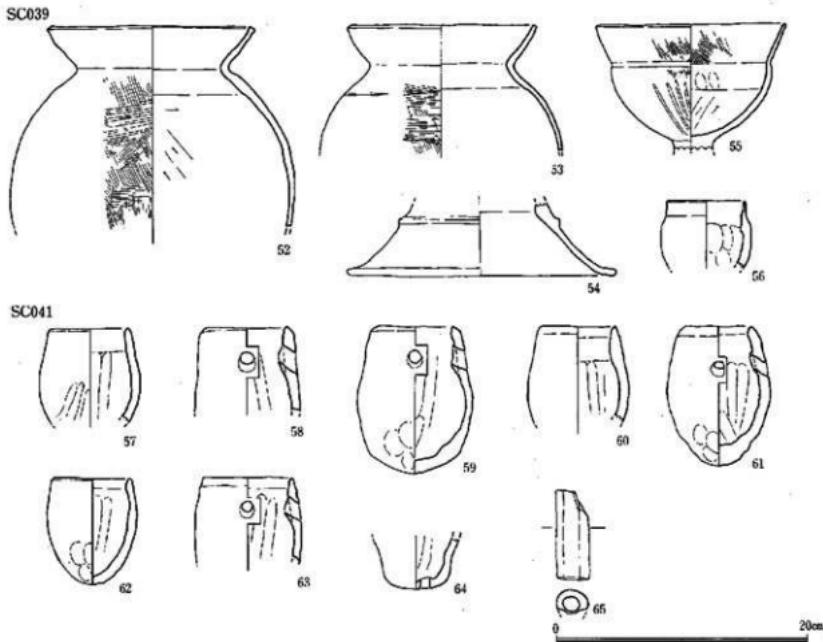
65は円筒形の土錐である。長さ7.1cm、径2.6cm、孔内径1.4cmを測る。破面の観察から棒状品に二重に粘土を巻き付けて成形したものと考えられる。

SC042 (第20図)

I区南端東側で検出する。南北長3.5mを測り、東半分を調査区外に延ばしている。埋土は黒色砂で焼土等は含まれていない。床面上で検出したピット上面で板状の石材を検出している。この他に屋内施設は検出していない。遺物は破片資料が少量であるが、布褶式新段階併行期の甕口縁部破片が出土している。

SC086 (第20図)

II区北端で検出する。上面に整地による土器包含層(包含層Bとして取り上げ)が形成されており



第19図 SC039、041出土遺物実測図 (1/4)

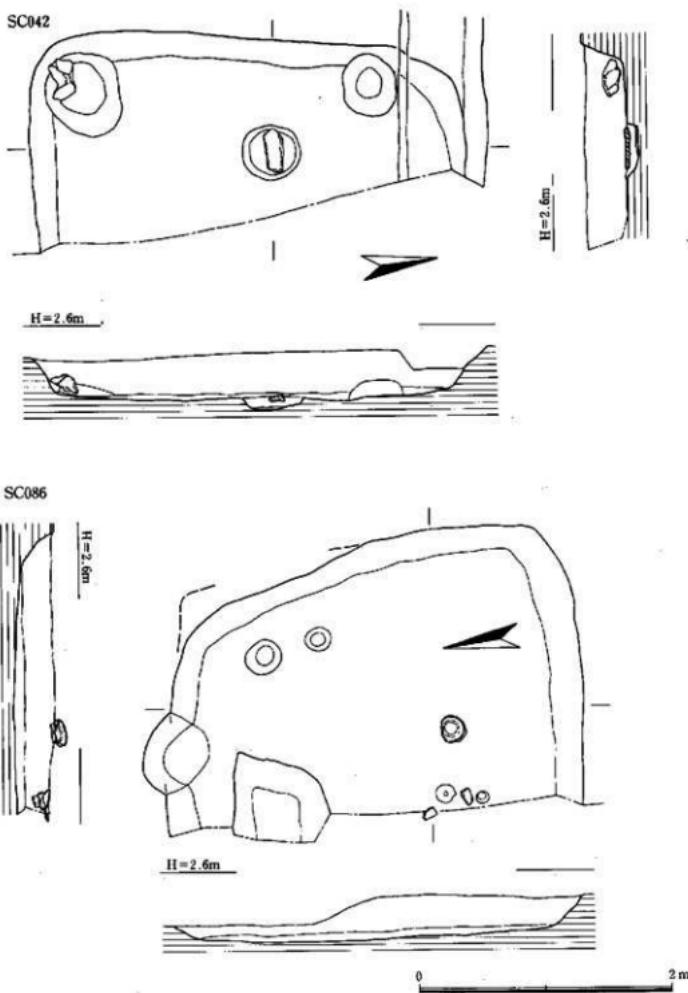
これを除去したところで検出する。北東コーナーをトレンチで削り過ぎやや歪な形になっているが、南北長3.2m、東西長2.2m以上を測る。埋土は黒色砂で焼土等は含まれていない。遺物は土師器壺・高壺・壺・碗・土鉢が多く出土する。また羽口破片が1点出土している。出土遺物から4世紀後半に位置づけられる。

出土遺物（第21図）

66~69は土師器壺である。66は復元口径17.2cmを測る。口縁部は直線的に伸び、端部はナデにより外側に肥厚させる。胴部は外面横刷毛のち頸部直下及び下部に縱刷毛を施す。内面は下半が縱方向に削り上げ、上半は頸部のやや下方まで横方向のヘラ削りを行う。67は復元口径15.4cmを測る。外面には全体に煤が付着している。口縁部はやや内湾し端部は横ナデにより面取りを行う。胴部外面は横刷毛のち縱刷毛を行う。内面は横方向のヘラ削りである。68は口縁部は直線的に伸び端部は内側に肥厚する。口縁部内面には縱刷毛が残る。胴部外面は縱刷毛のちにナデしており刷毛目が痕跡的に残っている。また外面には一部煤が付着。69は口縁部は外反転し、端部は丸く納めている。胴部は肩が張らず長胴となる。外面は上半はナデ、下半は粗い削りを行う。内面は横方向のヘラ削りである。

70、71はいずれも高壺環部である。70は下半1/3程で屈曲しほぼ直線的に外方に伸びている。屈曲部には明瞭な稜線を有する。71は楕円形の環部を有する。内面はナデ、外面は下半にヘラ削りを施す。

72は二重口縁壺の口縁部である。口径18cmを測る。内外面共に刷毛による調整を行う。



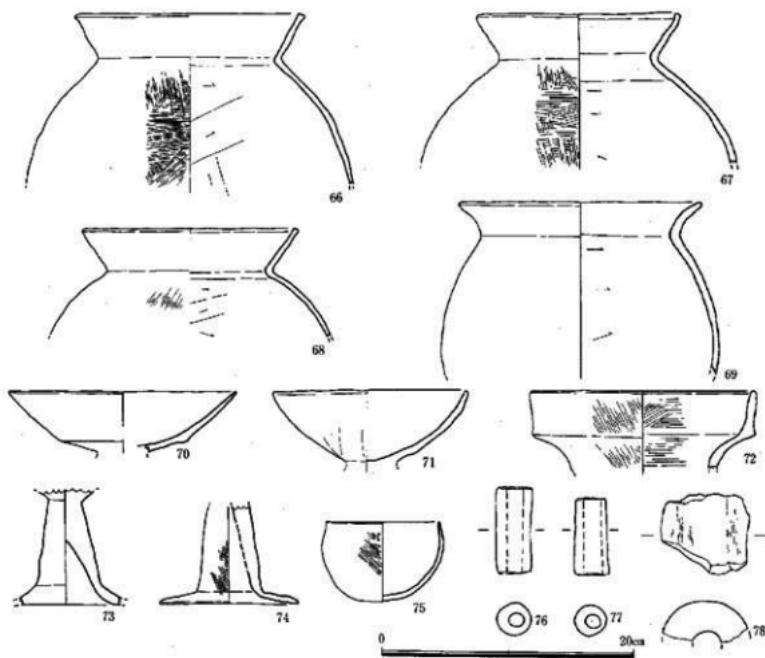
第20図 SC042、086実測図 (1/40)

73、74は高壊脚部である。筒部は僅かに中彫らみとなる。73は脚裾部が立ち上がり氣味で端部を欠く。また74は脚裾部は低平で、筒部に縦刷毛が残る。

75はほぼ完形の椀で口縁端部が僅かに反転直立する。外面は縦刷毛、内面は指ナデによる。

76、77は円筒形の土錐である。76は長さ7.0cm、重量64.1g。77は長さ6.2cm、重量38.2g。

78はフイゴ羽口破片である。破損のため先端部は残っていない。内外径7cm、孔径1.4cmを測る。



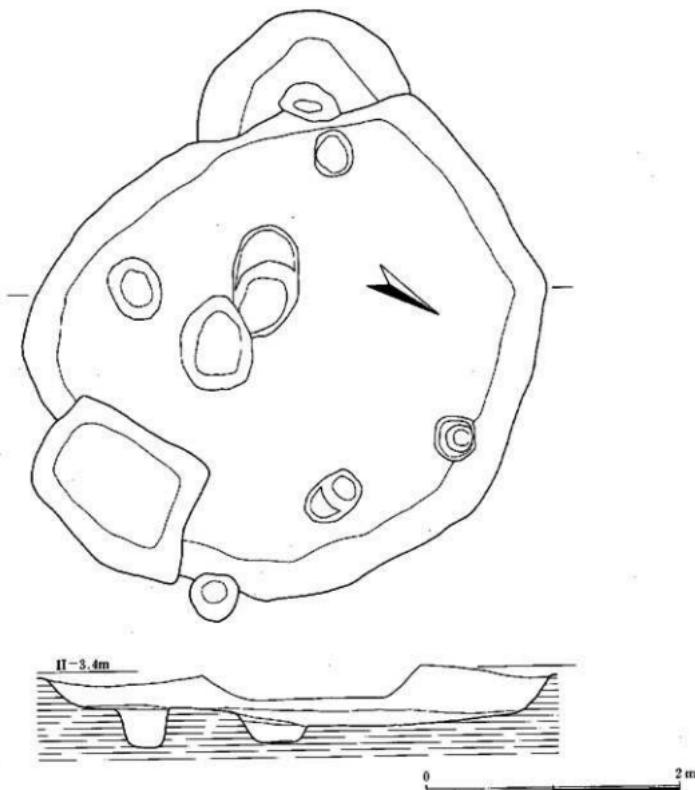
第21図 SC086出土遺物実測図（1/4）

SC105（第22図）

II区北端中央部で検出する。東西長3.9m、南北長3.8mを測る不整形な隅丸長方形の堅穴住居跡である。上面からの擾乱のために各コーナーが不明瞭になっている。埋土は淡黒褐色砂で中央で焼砂を検出している。炭化物を含んでいないのが炉跡であろう。壁際で柱穴と考えられるピットを検出した住居内を全周するものではない。遺物は弥生時代中期後半～末に属する甕・壺・器台・石器・鐵器が出土地している。

出土遺物（第23、24図）

79～84は甕である。79～82は口縁部は「く」字に屈曲し、外面に綾刷毛を行っている。また胴部上半1/3程に最大径を有している。79は口径29.4cm、器高32cmを測る。底面はほぼ平坦で、僅かに中央が窪む。内面はナデにより、口縁部には内面に横刷毛が残る。外面上半に煤が付着する。80は1/3程の残存で、口径29.2cmを測る。器面の剥落が激しく、外面には一部に他の甕と同様の綾刷毛が残る。口縁部はやや外半気味に開き、端部が僅かに外側に肥厚する。81はほぼ完成品で口径28cm、器高31cmを測る。胴部は薄手で口縁部は厚手で端部は丸く納める。内面は強めのナデを行い、一部削り状となる。また外面上半部に煤が付着する。82は内面上側にも粗い刷毛目が残る。外面下半1/3は2次焼成のため薄くピンクに発色し、底部中央及び胴部の一部は剥けて剥落している。83は跳ね上げ口縁を有する。



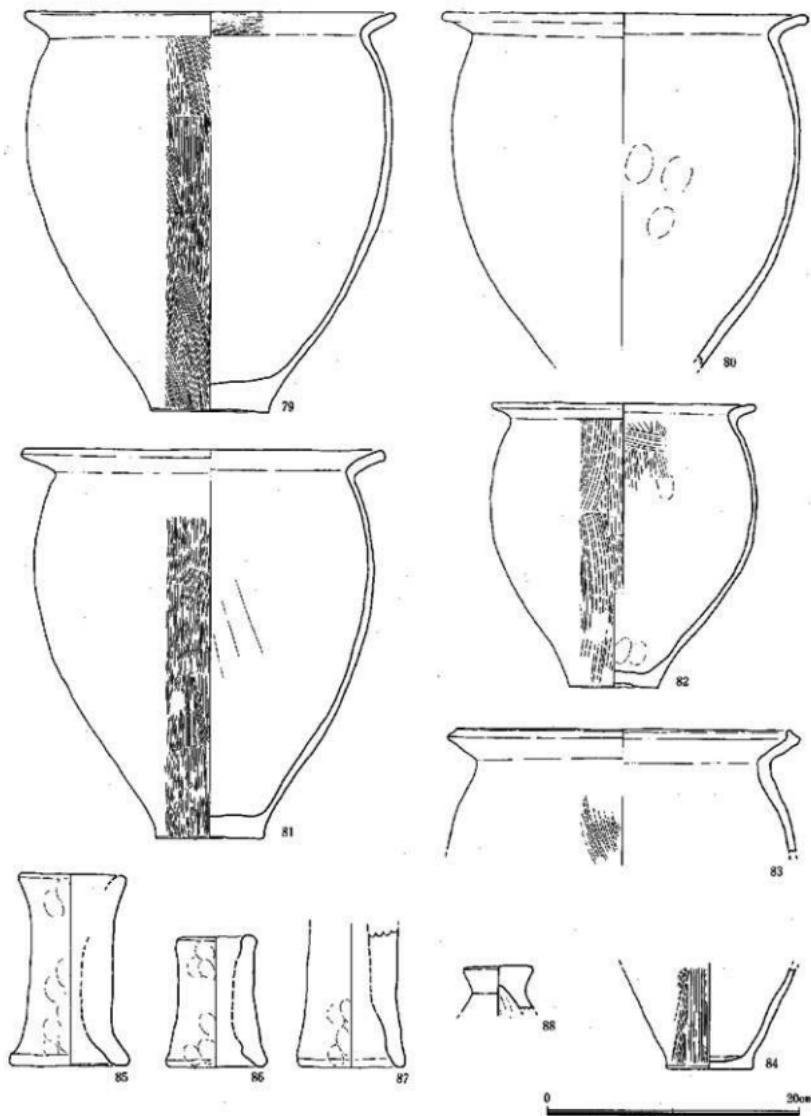
第22図 SC105実測図 (1/40)

口縁部はやや内湾して伸びる。外面は縦刷毛、内面はナデを行う。84は底部破片である。平底で外面には縦刷毛を行い、内面は横方向に強くナデを施す。器壁は6mm程度と薄く仕上げている。

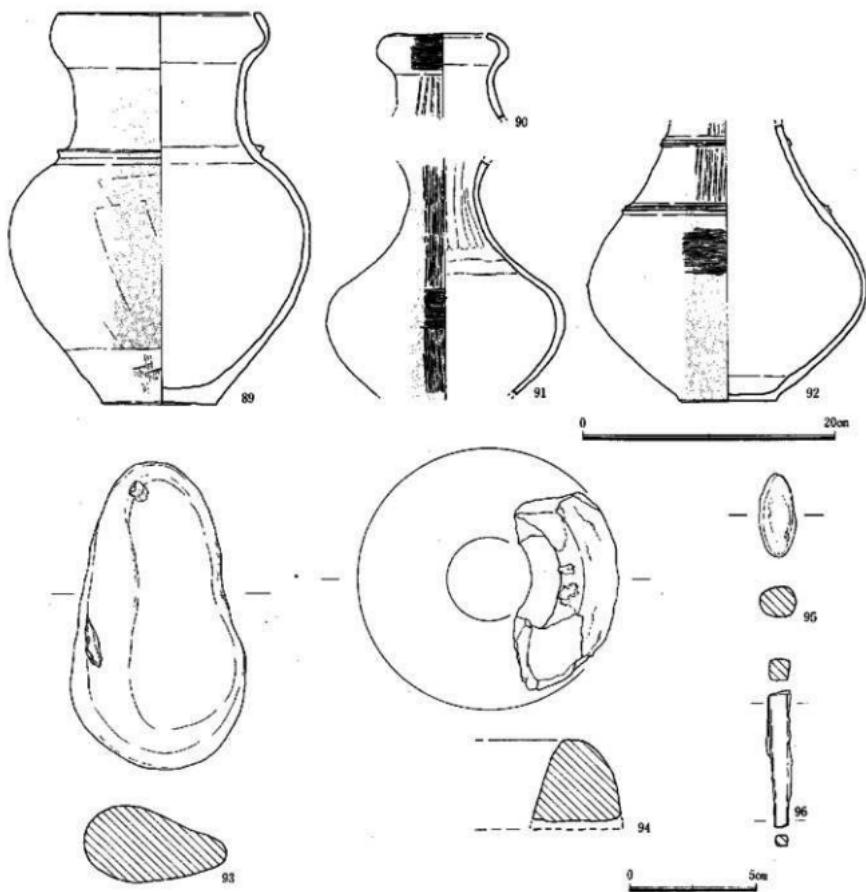
85～87は支脚である。85はほぼ完形品で、内面上半部が剥落している。86も同様に筒部内面が接合部分より剥落している。剥落痕跡及び破損具合から考えて、棒状品に粘土小ブロックを貼り合わせて作成した物であろう。

88は蓋のつまみ部分である。やや歪な円形を呈し、上面径5.4cmを測る。内面にしづら痕が残る。

89～92は袋状口縁を有する丹塗り壺である。89は胴部下半1/5程度迄顔料が塗布されている。内外面には板ナデ痕が残る。また顔料は幅3cm程度の刷毛状の原体で横方向を基調として大胆に塗布されている。顔料の塗布方向に添って刷毛目状の痕跡が残っており、半乾燥状態時に板状工具によって塗布されたと考えられる。90は口縁部は横方向、頸部は縦方向の繊密なヘラ磨きを行う。91は頸部及び胴部下半は縦方向のヘラ磨き、胴部最大径部分は横方向に磨きを行う。また内面は刷毛は横ナデ、頸部



第23図 SC105出土遺物実測図1 (1/4)



第24図 SC105出土遺物実測図2 (89~92は1/4、93~96は1/2)

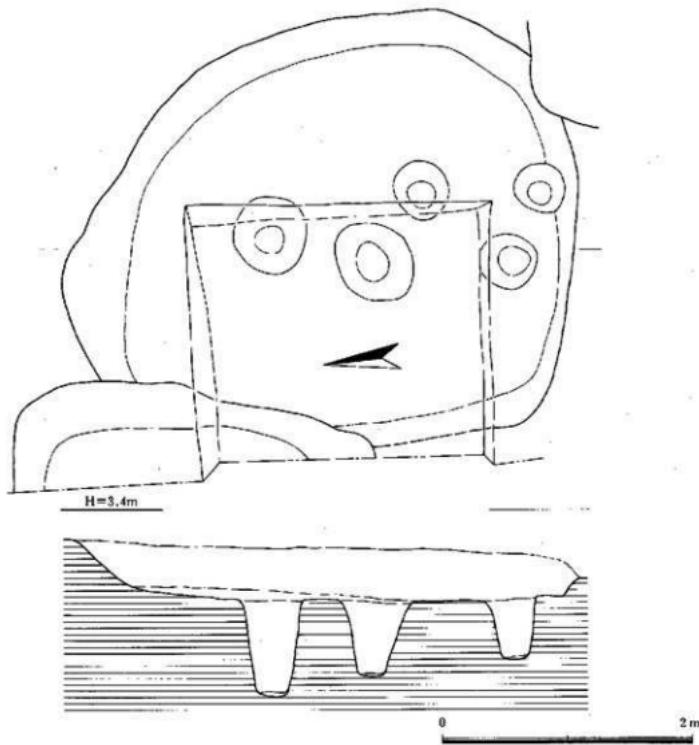
は縦方向のナデを施し、頸部には絞り痕が残る。92は頸部に2条の断面M字形を呈する尖帯を有する。頸部には縦方向の暗文風の磨き、胴部には横方向の密な磨きが施される。

93は偏平な磨石である。94は滑石製円形有孔石製品の上半部である。95は滑石製投弾である。

96は鍛造で断面四角形をなす鉄製品である。部位不明で老部になるものか。

SCI63 (第25図)

III区中央西端で検出する。東西長約3.3m、南北長3.9mを測る不整形な隅丸長方形を呈す。壁は直立せず緩やかに傾斜する。埋土は暗茶褐色砂で、埋土除去後に床面よりピットを検出したが明確な柱



第25図 SC163実測図 (1/40)

穴とは認定し得ない。焼土・(砂)等も検出していない。遺物は図示し得ないが弥生時代中期中頃に位置づけられる甕・壺・器台小破片が出土している。またピットからも同時期の甕等小破片がそれぞれ若干出土している。

3. 土坑

本調査においては弥生時代～古墳時代に属するものほか、近世～近代に属する土坑（レンガ積み地下式土坑を含む）を多く検出しているが、本報告では弥生時代～古墳時代に属すると考えられるものに限って述べていきたい。

SK032 (第27図)

I区中央部に位置し、西半分を擾乱によって失われている。埋土は淡褐色砂でSC033を切り、SC030によって南端部を削平される。南北方向に軸をとる長円形の土坑で、長軸1.6m短軸1.15mを測る。壁は緩やかに傾斜し、底面は丸みを帯びる。出土遺物には土師器細片及び土鏡、石錘がある。また微細な骨片が出土したが取り上げ時に粉砕してしまった。

出土遺物（第26図）

97は滑石製石錐である。均整を欠いた長方形を呈し、断面は偏平となる。磨滅によるものか削りによる面取りの痕跡不明瞭である。溝は十字形に切られている。重量249gを測る。

SK034（第27図）

I区中央部で検出する。埋土は黒褐色砂でSC033を切る。SK032同様南北方向に軸を取り、長軸1.3m、短軸0.9mの長円形を呈する。底面はゆるやかな丸みを帯びている。出土遺物には土師器破片、土錐破片がある。

SK036（第27図）

I区中央部で検出する。SC022及び近世井戸SE020に西側を削り取られる。埋土は褐色砂である。南北方向に軸を取り、長軸1.9m、短軸1.2m以上のやや不整形な長円形を呈する。土師器破片及び鉄釘が出土しているが、遺存鉄釘についてはSE020からの混入と考えられる。

SK040（第27図）

I区南端部で検出する。中央部上半を擾乱により削平され、SC038の南壁を切る溝状の土坑である。長さ2.5m、幅60cm、深さ50cmを測り、長軸方向の壁は明瞭に立ち上がっている。埋土は淡褐色砂で、遺物は小破片が3点と擾乱からの混入と考えられる陶磁器が出土するのみである。

SK043（第27図）

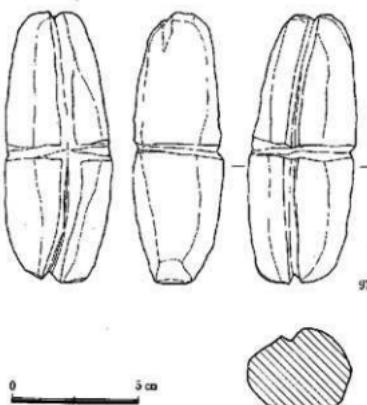
I区南側で検出する。トレンチにより上半分及び西半分を欠失するが、長軸2.2mを測る長円形の土坑になると思われる。埋土は黒褐色砂である。壁は南壁が二段に落ち込んでおり、最底面は径70cmを測る円形を呈し、緩やかに丸みを帯びている。出土遺物は土器細片が2点で時期不詳であるが、埋土から古墳時代に属するものであろう。

SK092（第28・29図）

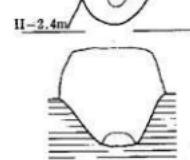
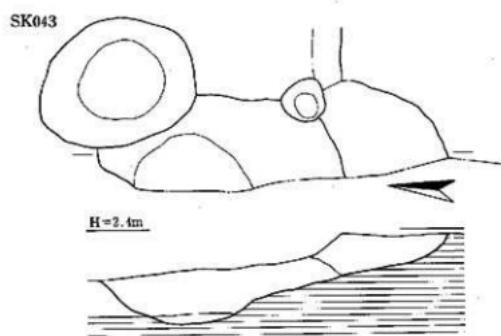
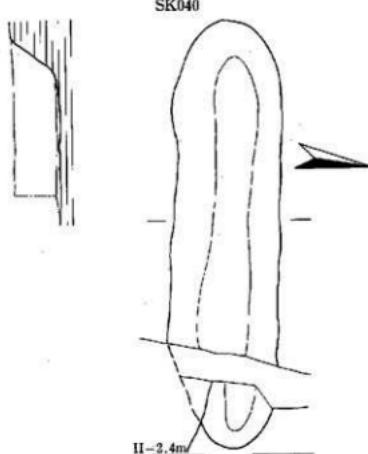
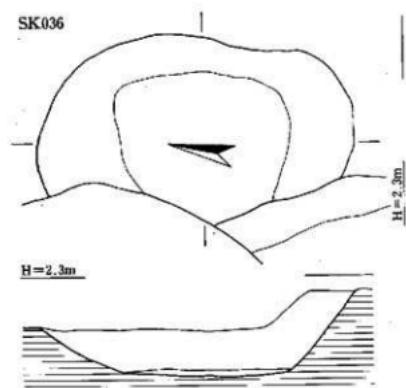
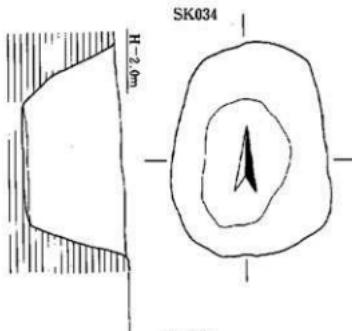
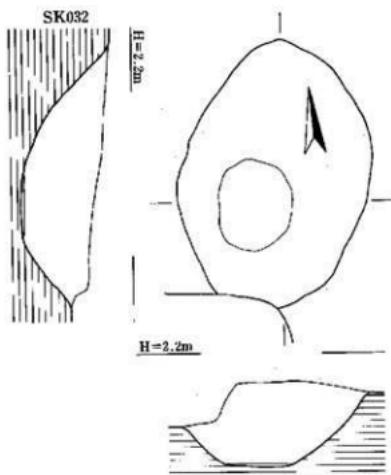
II区中央部の東側で検出する。掘り方は径1.3mのほぼ正円形を呈し、断面形は底面に狭い平坦面を有する略半円形である。埋土は1層：炭化物を多く含み、湿りけを有する黒褐色砂、2層：1層より暗くなる、3層：淡黒褐色砂を含む暗黄褐色砂である。出土遺物は少量であるが弥生時代中期に属する小型の甌が出土している。

周囲には同様の埋土を持つSK094・096・097・098が有り、これらから製塙に使用したと考えられる日常容器・石器未製品・貝製品・骨製品・獸骨等の主に牛産に関わる注目すべき遺物が数多く出土している。また遺構の配置・遺物の接合関係・埋土の類似性等からこれらの土坑は一連の有機的な関係を持って存在していたと考えられる。これらの遺構については埋土の水洗作業を行う必要があったが、調査時の認識不足により、一部についてしか水洗作業を行っていない。

またこれら一連の土坑群上面には上層の赤褐色土によって汚染されたと考えられる暗赤褐色砂が厚さ20cmでレンズ状に堆積しており、ここからも土器・貝・獸骨が出土している。



第26図 SK032出土遺物実測図(1/2)



0 1 m

第27図 SK032、034、036、040、043実測図 (1/30)

(SX079参照)

出土遺物（第30図 98）

98は逆L字状の口縁部を有する小型の甕若しくは鉢である。外面は口縁部直下は横ナデを行い、それ以下には縱刷毛を施す。

SK094（第28・29図）

SK092より4m南東方向に位置する。径90cmの略円形を呈し、断面は底面に丸みを帯びる略半球形をなす。埋土はSK092の1層に対応する黒褐色砂である。溝状の土坑であるSK097と切り合っているが、埋土の判別が困難で関係は不明である。あるいは一連の遺構であろうか。遺物としては弥生時代中期初頭に位置づけられる甕が出土している。なおこの甕（110）はSK097と1:1の割合で接合関係にありSK097の項で説明している。この他多種類の石器失敗品・剥片も出土しているが、製品の出土ではなく廃棄された種類も豊富であり、ここで様々な石器の製作が行われていたことを伺うことが出来る。この他瘦小破片が出土。

出土遺物（第30図 99～106）

99、100は甕口縁部である。いずれも口縁部逆L字状をなしている。100は口縁端部に刻みを施す。101は甕底部である。上げ底で外面には縱刷毛が行われる。内面には煤が付着し器壁内面にも3mm程浸透している。2次焼成による破損品であろうか。

102は頁岩製柱状片刃石斧失敗品である。後主面には既に磨きが行われ平滑となる。刃部には敲打が行われた後一部磨きをかけている。前主面基部から欠損しておりこの為廃棄されたものであろう。前主面及び左側面には自然面が残る。103も柱状片刃石斧失敗品である。粗い敲打の後磨きにより成形している。後主面については既に平滑となる。前主面に敲打を加えることにより側面が大きく剝離している。104は頁岩製の石劍失敗品である。擦り切り技法により母材から切り取られている。身には既に擦り切り後の研磨が入っている。刃部は敲打により粗く整えられているが、この敲打際に身が大きく剝離している。層状に剝離する頁岩の性質から母岩からの切り取りに有効な方法として擦り切り技法が採用されたものであろう。105は中央に円孔を有する滑石製石鍤である。長軸方向には表裏両面に溝を切るが、短軸方向は表面～裏面まで裏面には溝を刻んでいない。裏面は平坦である。溝内を含め全面に長軸方向の研磨痕が残っているが、溝に紐擦れ痕はなく未使用と考えられる。また全面に火を受けており煤が付着し裏面が弾け剝落している。このために使用前に廃棄されたものであろう。現存重量524g。106は頁岩製石戈失敗品である。製作途中に折損・剝離したものであろう。刃部が弓なりに湾曲しており、石戈として不自然な点もあるが形態的には文に最も近いものである。

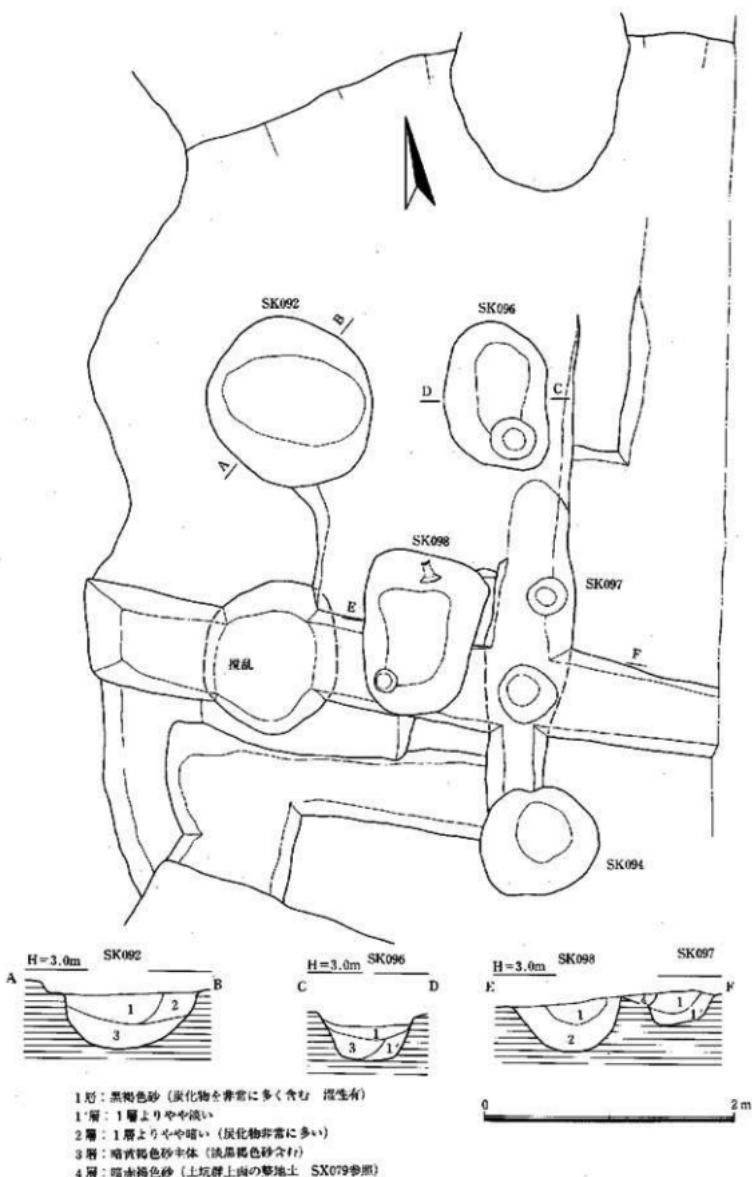
SK096（第28・29図）

SK097を介してSK094の反対側に位置する。検出面ではSK094、SK097、SK098と切り合ひなく一基の土坑として掘り下げを行った（SK095で取り上げ）。特にSK096、097は掘り下げが進み2基に分離する底面近くまで切り合い関係の有無が不明のまま掘り下げた。遺構としての土坑間の関係は不明である。弥生時代中期初頭に位置づけられる。

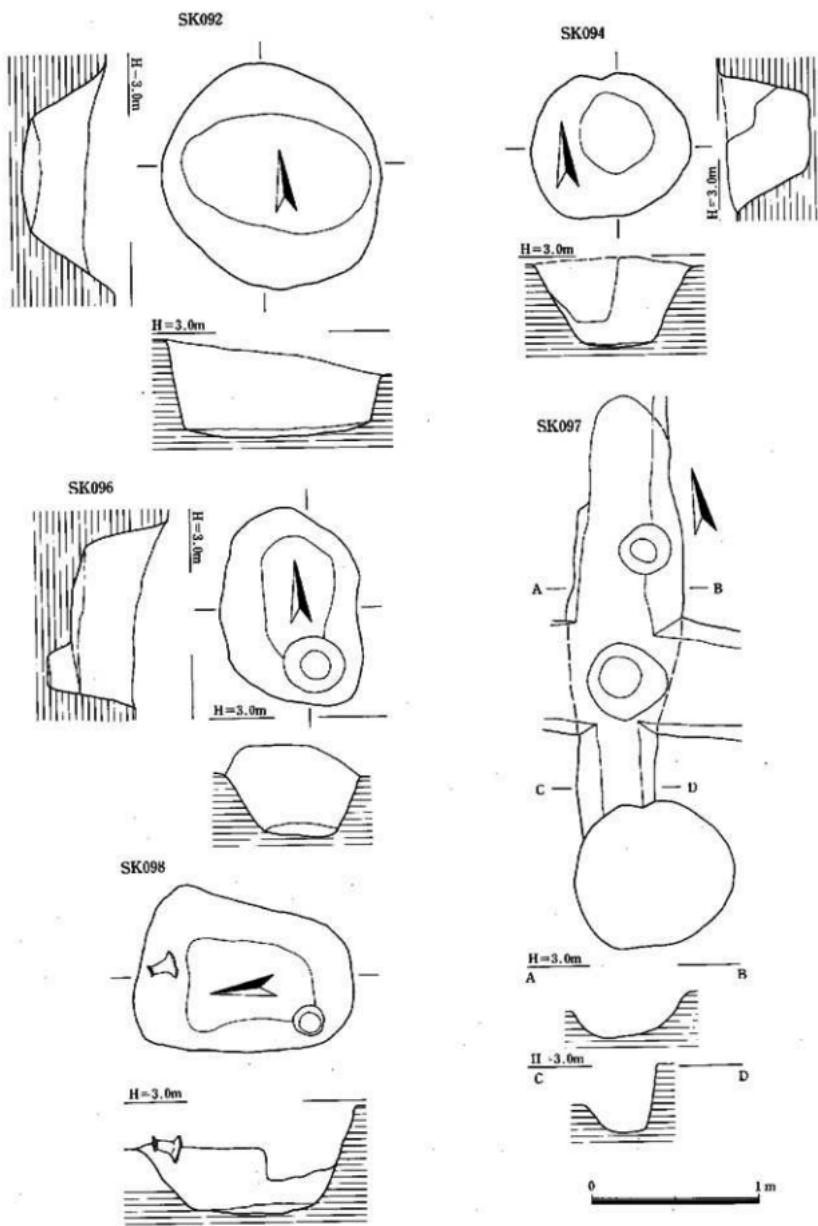
SK096は東西長0.8m、南北長1.1mを呈する隅丸長方形の土坑で、埋土は基本的にSK092と同様である。底面は緩い弧を描き、南側に深さ15cm程のピット状の掘り込みを有する。中期初頭に位置づけられる甕・壺が出土している。なおSK096、097、098上層の遺物（SK095で取り上げた遺物）についてもここで図示しておく。

出土遺物（第31図 107、108 第32図）

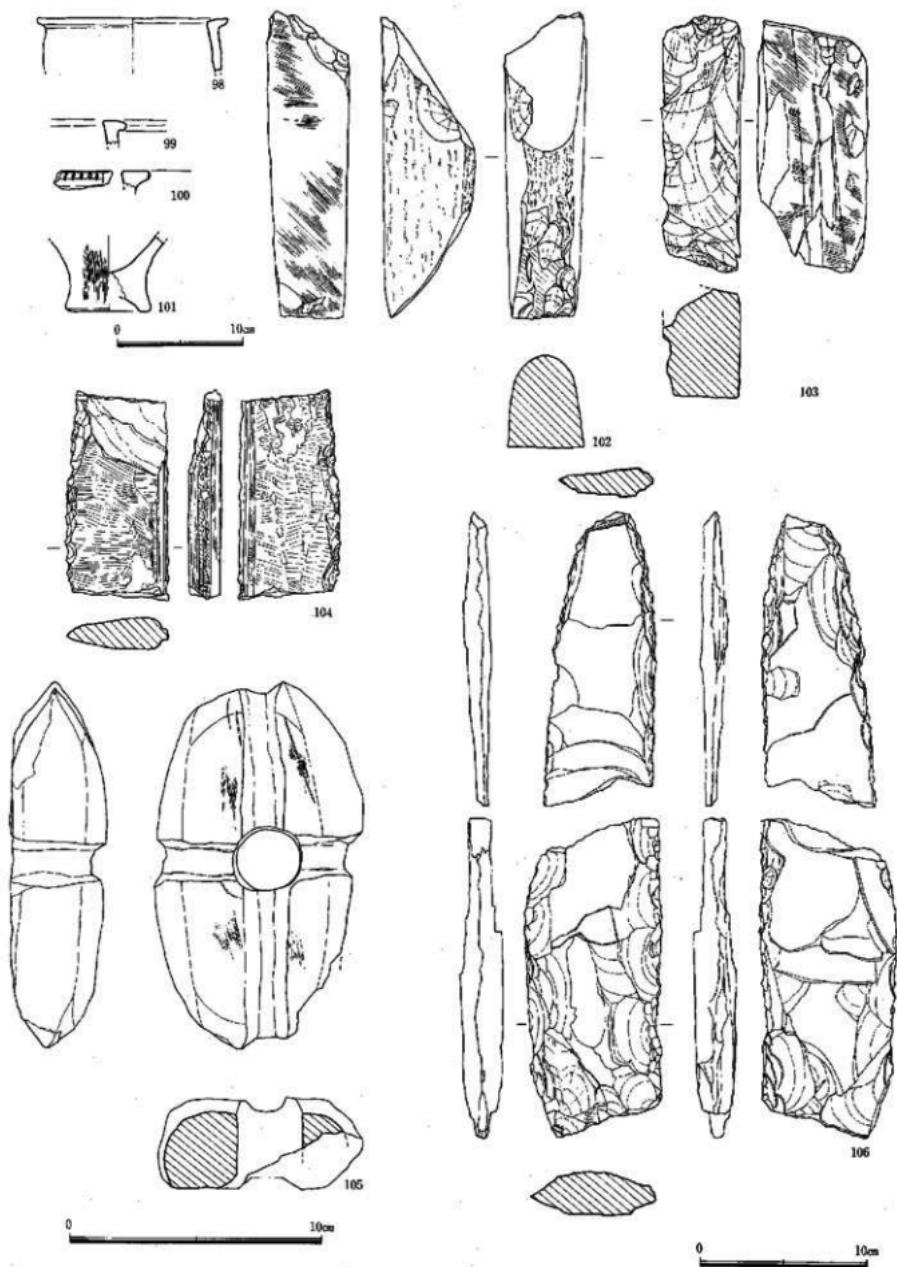
107、108はSK096出土の甕である。いずれも張り出しの短い断面逆L字状口縁部を有する。107は



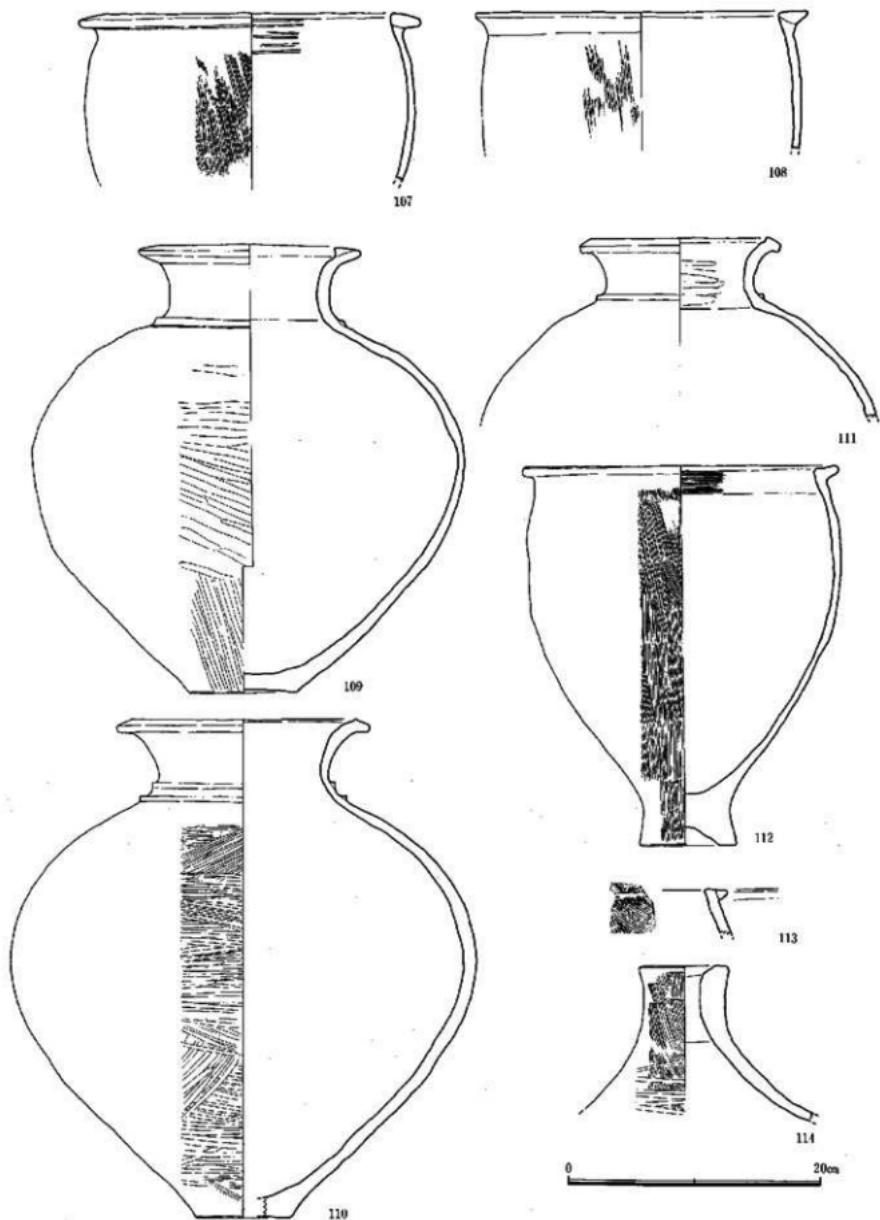
第28図 SK092、094、096、097、098配図図及び土層図 (1/40)



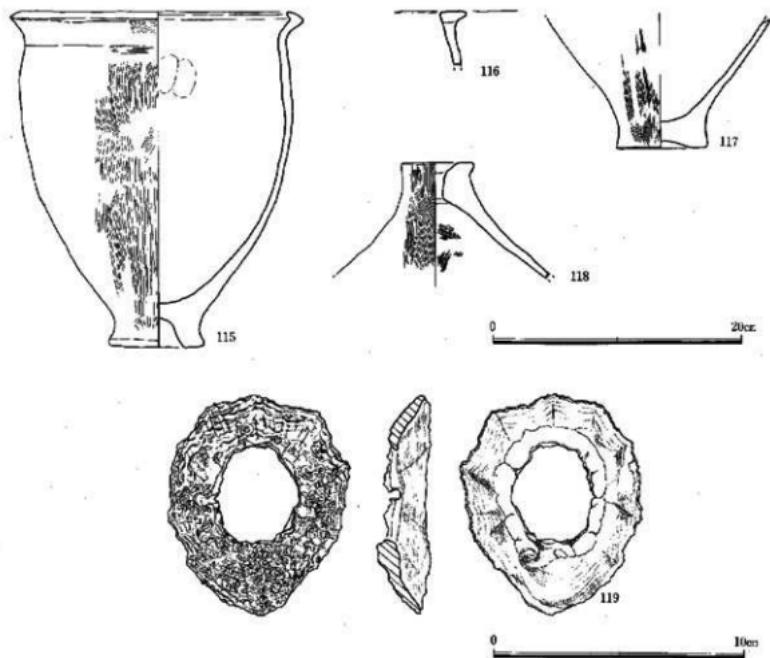
第29図 SK092、094、096、097、098実測図 (1/30)



第30図 SK092、094出土遺物実測図 (98~101は1/4、106は1/3、102~105は1/2)



第31図 SK096、097出土遺物実測図 (1/4)



第32図 SK095出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

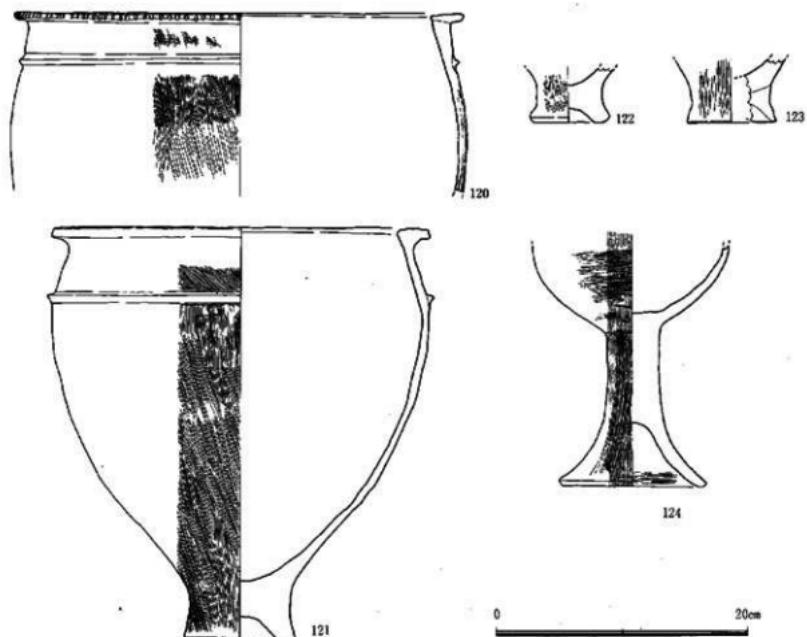
SK092、098出土資料と接合関係にある。口縁部は外傾し、胴部は膨らみを持つ。外面綵刷毛、内面には口縁下に横ミガキが行われる。2次焼成を強く受け、内外面に煤が付着し特に外面口縁部直下には煤が厚い。108は胴部は殆ど張らない。外面には綵刷毛、口縁部は横ナデによる貼り付けが行われる。

第32図に図示したものはSK095で取り上げた遺物である。なお115-119はSK097上面から出土している可能性が高い。115は口縁部は屈曲部上面に粘土貼り付けを行い嘴状の口縁端部をなす。胴部は余り張らず砲弾形となる。また底部は端部が外側に張り出し、高い上げ底となっている。2次焼成を強く受けており、底面を除いて内外面全体が煤状の付着物により黒化する。116は甌口縁部破片である。口縁端部は短く外方に張り出す逆L字状を呈する。外面綵刷毛を行う。117は甌下半部である。底部は低い上げ底を呈する。2次焼成を受け、内底面には煤とともに黄白色の生成物が膜状に付着している。

118は有孔の蓋である。上面端部は外側に張り出し、孔は回転のヘラ削りによって開けられたようである。外面は綵刷毛、内面は粗い刷毛及び板ナデによる。内外面に煤が付着し器面が黒化する。

119は南海産オオツカノハ製貝輪本製品である。中央に $4\text{ cm} \times 3.6\text{ cm}$ の長円形の孔が開けられる。また孔の両側に窪みを有するが、大きいために貝輪としての使用には不適当である。蓋面にはゴカイの棲管が多数付着する。

SK097 (第28・29図)



第33図 SK098出土遺物実測図 (1/4)

長さ2.5m以上、幅50cmを測る溝状の土坑である。SK096の項で述べているように、SK096・SK094との相互の関係については不明である。埋土はSK092同様の黒褐色砂である。完掘後にピットを2基検出している。遺物は弥生時代中期初頭に位置づけられる甕・壺等が出土している。

出土遺物 (第31図 109~114)

109~111は壺である。109はSK094、098出土資料と接合する。口縁部は直立後端部を外反させる。端面内側上面に粘土貼り付けをおこない、断面鋸先状をなす。頸部には断面三角形をなす突帯が1条貼り付けられる。胴部は外面へラミガキ、内面ナデによる。110はSK094出土資料と1:1の割合で接合している。口縁部端面に薄く粘土帶を貼り付け外傾する鋸形口縁部をなす。頸部には2状の三角突帯が巡る。外面はナデのち全体にヘラミガキを行う。外面は器面の剥落・2次焼成の跡は見られない。これに対し内面は頸部直下から全体に強い熱を受けたためか剥落が著しい。内壁は黒ずんでボロボロになっている。111は上半部破片である。口縁部は外傾する鋸形をなし、内面は横方向のヘラミガキを行う。胴部は外面ナデにより、内面には指痕が残る。

112はSK094、095出土資料と接合する甕である。口縁部は張り出しの短い逆L字状を呈し、上端面は内傾している。底部は厚手の上げ底をなし、裾部分はほとんど張り出しをみせない。胴部はやや膨らみを持つ砲弾形を呈し、内面はナデ、外面は継刷毛による調整を行う。113は甕口縁端部破片であ

る。端面外側に断面三角形の粘土帯を貼り付け口縁端部を作りだす。外面は縦刷毛を行い、内面には指頭痕が残る。

114は有孔の蓋である。内外面には薄く煤が付着している。外面は上半は縦刷毛、下半には刷毛目の後横方向のヘラミガキを行っている。内面は横ナデによる。

SK098 (第28・29図)

SK097の西隣で検出する。東西長0.9m、南北長1.3m、検出面からの深さ40cmを測る。平面略隔丸長方形を呈している。埋土はSK092に類似する。高环脚部が北側上面から出土する。その他製塙作業に用いられたと考えられる甕の胸部剥落破片が多量に出土している。剥落破片には白色の物質が付着している。製塙関連作業での生成物であろうか。また周辺の一連の土坑群の埋土から検出される大量の炭化物は製塙作業に起因する可能性も考えられ、これらの土坑が廃棄の場所となるのか、または直接製塙作業に関連する場所であるかは不明である。

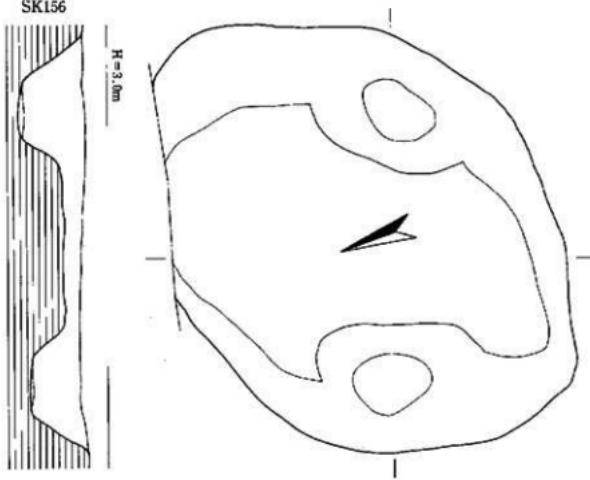
出土遺物 (第33図)

120～123は甕である。120はSK095、096と接合し、接合関係はないもののSK092からも同一個体と考えられる破片が出土している。端部上面に粘土帯を貼り付け逆L字状口縁部をなし、外方端面には刻みを入れる。外面は縦刷毛により調整され、口縁下には断面三角突帯が貼付される。非常に強い2次焼成を受けているため、器壁外面の剥落が著しい。剥落は器壁外側から膜状に薄く剥がれ落ち、器面は暗いピンク色に発色している。これらの剥落は製塙土器に共通して見られるもので、この甕についても製塙作業に用いられたと考えられる。また前述の様に剥落破片は土坑内から多く出土しているが、別個体の出土は無いようである。内面には剥落は及んでいないが、煤が薄く全体に付着している。121は口縁部は逆L字状を呈し、胴部に三角形の突帯を貼付する。剥落は突帯下に最大径を有する腰高の器形である。底部は裾が外方に踏ん張り気味で厚い上げ底を呈する。外面には縦刷毛が施される。2次焼成を受けているが120に見られる器面の剥落は見られない。内面は突帯貼付位置以下が熱を受けたために表面が薄く剥落し、表面に砂粒が多く浮いてきている。122は裾部が外側に踏ん張る上げ底の底部である。123は裾は張り出し気味で、僅かに上げ底となる厚手の底部である。122、123いずれも外面には縦刷毛を施す。

124は黒色磨研の高環である。環部は緩やかに渦曲する楕円形を呈する。口縁端部を失すため不明瞭な点があるが僅かに内湾気味に口縁端部を納めるものと考えられる。外面には横方向の細かい研磨を行う。熱を受けており研磨痕が認められずナデによる調整のみが観察できる。環部内面の被熱は使用方法を検討する材料となるであろう。内面は灰～黒灰色を呈する。脚部は高く上半2/3迄は中実の柱状で、下部1/3が外方に開いている。外面は縦刷毛の後、丁寧な縦方向の研磨を行う。研磨は鉢部上端から脚据部に至る。脚部内面は研磨が行われず横方向の刷毛目が残る。この様な諸特徴は弥生土器とは異なり、朝鮮無文土器の黒色磨研高環と共通するようである。しかし脚部形態・色調・磨研は無文土器に類似するが、環部まで含めると類似の無文土器は管見の範囲にはない。強いて上げるならば、慶尚南道三千浦市勒島遺跡ⅠA地区8号住居址出土の「脚付鉢」の鉢部～脚上部破片が類似する。^(註1) ただし脚は鉢部との接合部まで中が中空で、鉢部外面を刷毛調整の後磨研し、内面も磨研している。色調は外面は暗茶褐色、内面が淡茶褐色で、胎土に多量の石英粒と極少量の細粒砂岩を混ぜる。勒島Ⅲ式に編年されるが、勒島Ⅰ～Ⅲ式は伴出する少量の弥生土器から、中期前半併行と考えられる。Ⅱ・Ⅲ式の高環には脚が高く裾広がりの下部より上が中実柱状のものもある。以上から朝鮮系無文土器とみなせるかもしれない。

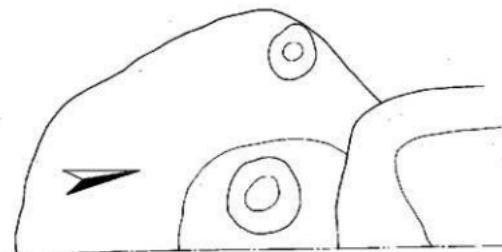
(註1) 埼山大学校博物館「勒島住居址」(埼山大学校博物館調査報告 第13号 1989)

SK156

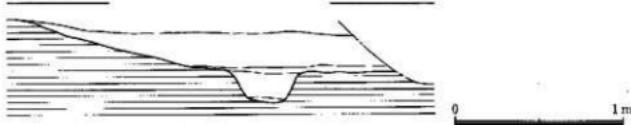


H = 3.0m

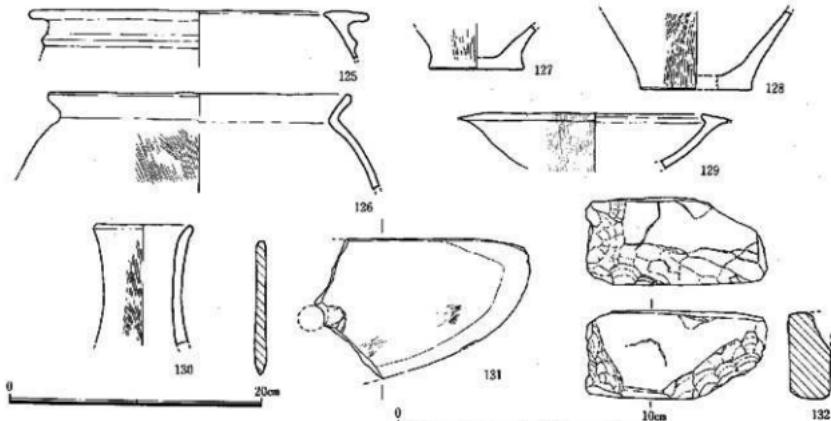
SK172



H = 2.8m



第34図 SK156、172号測図 (1/30)



第35図 SK156出土遺物実測図 (125~130は1/4、131・132は1/2)

SK156 (第34図)

III区中央部で検出する。径2.5mを測る不整円形の土坑である。底面の東西両端に径1m程の窪みを有している。埋土は固く締まった暗褐色砂で、SX173を切って掘削されている。弥生時代中期後半に属する甕・壺・高環・器台・石包丁等が出土している。

出土遺物 (第35図)

125~128は甕片である。125は錐形の口縁部を有し、胴部は上半部が張る。口縁下には断面三角形の突帶を貼付する。胴部は上部1/3程に最大径を有する。126は「く」字状を呈する口縁部を有する。外面は継刷毛、内面はナデを行う。127、128は平底の底部である。外面に継刷毛を施す。

129は錐形口縁を有する高環である。外面には丹塗り磨研を施す。環部内面は横方向の研磨を行い、黒褐色を呈する。

130は器台である。内面はナデ、外面には継刷毛を行う。

131は砂岩製石包丁破損品である。表面に一部剥落が見られる。132は粘板岩製砥石である。直方体の両小口部分を欠損するが、その他4面は全面を砥石として使用している。

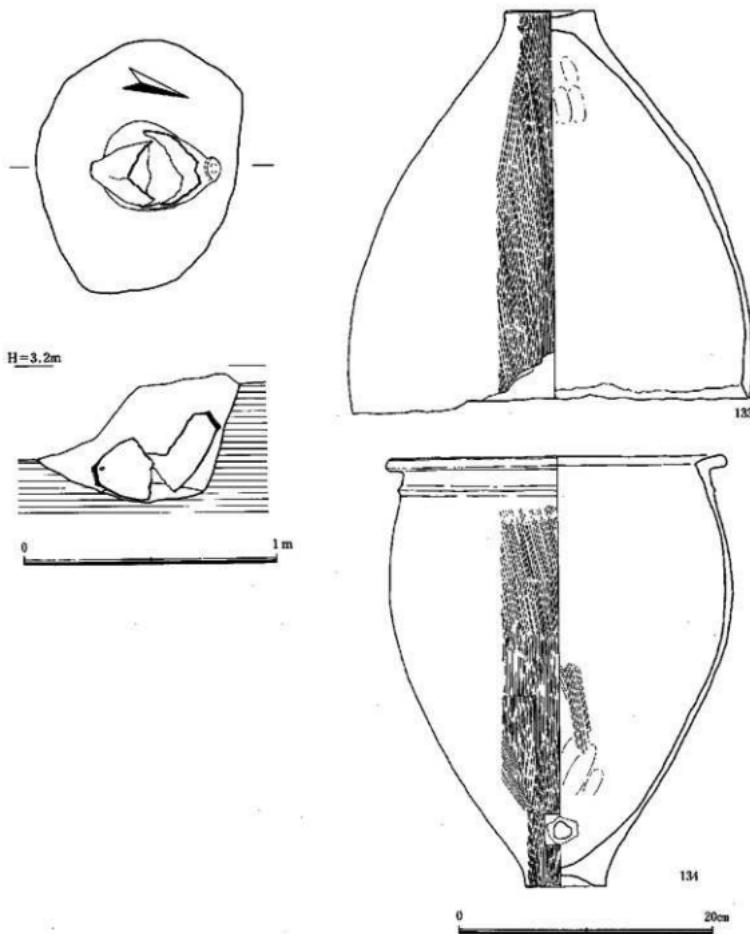
SK172 (第34図)

III区南側の東端で検出する。北側をSK162で削られ東側を調査区外に延ばすが、径約2.5mの不整円形を呈する土坑である。埋土は上層が淡黒色砂、下層が暗黄褐色砂でレンズ状に堆積する。底面中央にピット状の落ち込みを有し、二段に掘り深めている。遺物はパンケース三箱程度出土しており、弥生時代後半に属する甕・壺・器台が出土している。

4. 甕棺

K121 (第36図)

III区中央東側で検出した小型棺である。調査区内で検出した甕棺はこの1基のみである。遺構掘削途中に第三者によって盗掘されかけたため、埋置してあった下甕が原位置を失い、掘り方南側が荒らされてしまったため復元作図を行っている。なお上甕はほぼ原位置を保っている。主軸はN-19°-



第36図 K121及び出土遺物実測図 (1/20、1/4)

Wを向き、埋置角度は約35°程度である。掘り方は東西長約1m、南北長約0.8mの長円形を呈す。上甕は口縁部を打ち欠き、呑み口となる。

出土遺物 (第36図)

上甕 (133) 口縁部を打ち欠いた甕である。外面は縱刷毛を行い、底部は2次的な被熱を受けピンク色を呈する。外面下半1/3には煤が付着する。内面はナデによる。

下甕 (134) 逆L字状の口縁部を有し、1条の断面三角突帯を巡らせる。底部は上げ底で、胸部最下

位に外面からの焼成前穿孔を行う。外面は綿刷毛により、内面にも中位以下に綿刷毛が残る。

5. 井戸

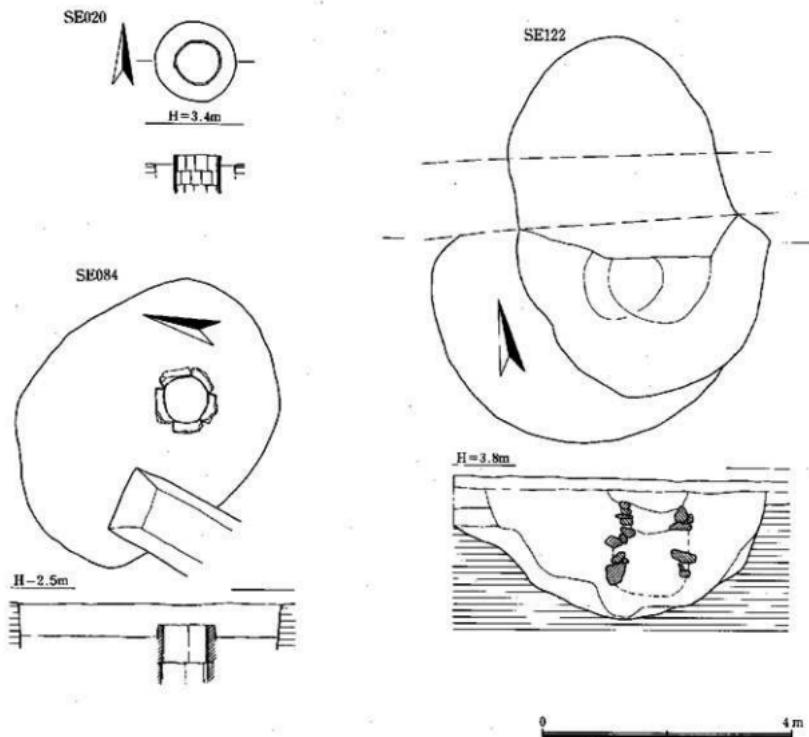
調査区内では多くの井戸を検出しているが、いずれも近世以降に属するものである。これらの井戸には近年に至るまで使用されていたものもあり、井戸数の多さは近世以降の経済発展の歴史を裏付けるものであろう。本調査においては検出した井戸の全てを掘り上げていないため、ここでは形態を明らかにした物について幾つかを報告したい。

SE020 (第37図)

I区中央部で検出する。井筒には「蛭浜石」と言われる砂岩を切り出して利用している。内面は綿やかに弧を描き、5ピースで円弧を作っている。石材は内面・上面・下面是ノミ状工具により丁寧にはつっている。掘り方は径4m様の略円形を呈している。埋土は井筒内が灰白色粗砂、掘り方が焼・炭化物の多く入った黒褐色土である。同様の井戸にはSE019・124等がある。

SE084 (第37図)

II区中央で検出する。井筒が瓦組の井戸である。瓦の接合部には目張りの赤色粘土が貼られている。埋土は井筒内には自然礫、「蛭浜石」の井筒等が投棄されていた。掘り方は径1.3mの円形で埋土は白色



第37図 SE020, 084, 122実測図 (1/80)

粗砂である。掘り方は砂岩で井筒を構築するものに比べて、均整で径も小さい。隣接するSE085が同様の構造である。

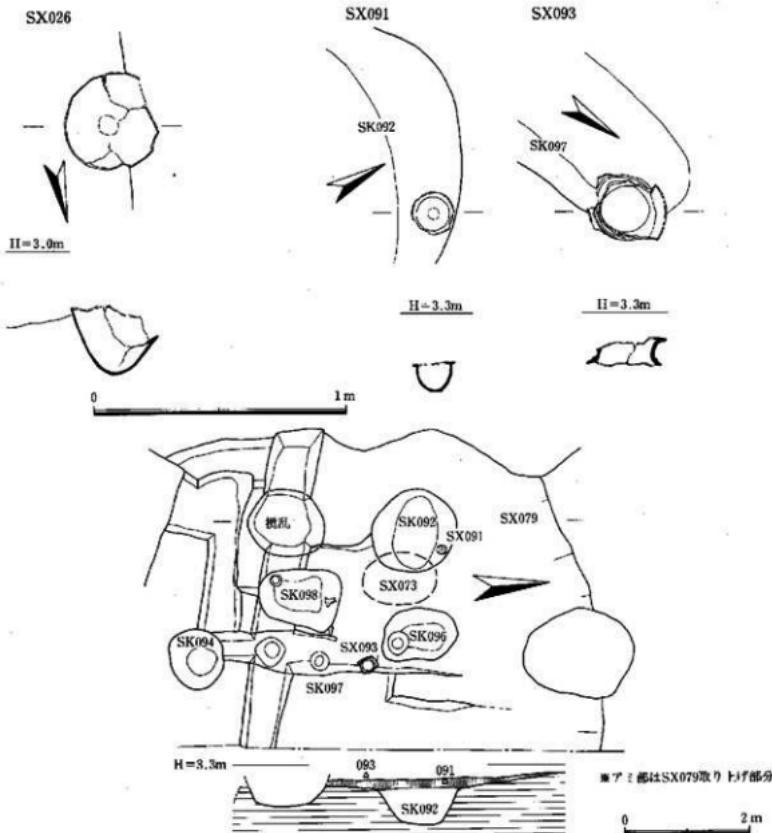
SE122 (第37図)

III区中央部で検出する。掘り方は長径5.7m、短径3.3mを測る長楕円形を呈す。井筒は掘り方の中央やや東寄りに位置する。井筒部は抜き取り・崩壊等の破壊が進んでいるが、人頭大の自然砾を積み上げて構築され、下位の石材ほど大ぶりの石を使用している。SE123も同様の井戸であると考えられる。

6. 溝

SD001 (付図)

調査区内で検出した明確な溝状遺構はこの1条のみである。I区北端で検出する。ほぼ東西方向に延び、幅2m~3.4m・深さ80cmを測る。東に延びるに従って幅広となり、調査区東端で立ち上がる。この溝以北は急激に落ち込み、湿地状態をなすことが試掘調査の結果で確認されており、境界を画する溝として機能したものと考えられる。遺物としては近世以降の陶磁器が出土している。



第38図 SX026、073、079、091、093配置図及び実測図 (1/20, 1/80)

7. 不明遺構

SX026 (第38図)

I区南端部で検出する。二重口縁壺を正置した状態で検出した。周囲は淡黒色砂であったが、擾乱等もあり掘り方は検出できなかった。I区西壁土層でも同様の砂の堆積が検出されており（調査概要の項参照）、豊穴内に据え置かれていたものと考えられる。

出土遺物（第39図）

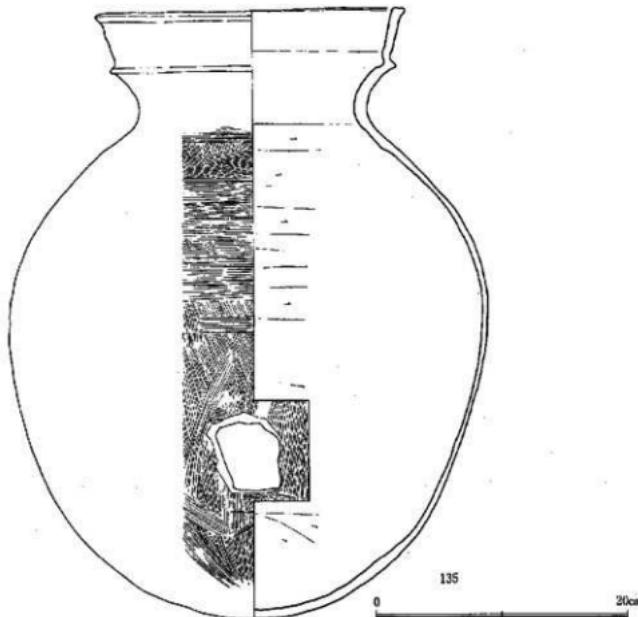
135は二重口縁壺である。口縁部は厚手で、頸部から外反する擬口縁上に粘土帯を貼り付け、直立する口縁部を有する。肩曲部には張り出しの突帯が巡っている。胴部は長円形を呈し、胴部下半に内側からの焼成後の穿孔が行われている。外面は継刷毛のうち上半部には横刷毛が施される。また内面には頸部との境まで横方向のヘラ削りが行われている。色調はやや暗い黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成良好である。

SX073 (第38図)

II区中央部で検出する。調査区最上層から切り込む黒色土の擾乱でSK092、SX079を切って掘削されている。調査時には作図を行わず、位置の略測に止めていたが、整理時に近現代の遺物とともに弥生時代中期に属する良好な資料が確認されたためここで報告する。これらの遺物は下位検出の土坑群に伴っていた可能性が高く、関連が注目される。

出土遺物（第40図）

136～142は甕である。136は大型の甕で8割程の残存品である。口縁部はやや内傾気味の断面逆L字



第39図 SX026出土遺物実測図 (1/4)

状を呈する。端面には刻み目が施される。口縁部よりやや下がった位置に断面三角形の突帯が巡る。胴部は最大径を突帯下にとる腰高の器形で外面に縦刷毛が施される。底部は裾を外側に張り出す厚めの上げ底をなす。胴部外面下半1/2以下は被熱のため器壁表面が剥落し、胎土の砂粒が露出する。また内面は下部1/3から底部まで黒化している。内面には剥落は認められない。137は1/2残存品で、内傾の強い逆L字状口縁を有する。突帯の無い胴部は膨らみの少ない泡弾形をしている。底部は踏ん張り気味の高い上げ底をなす。胴部外面には縦刷毛を行い、内面はナデ調整による。2次的に被熱しており、外面に薄く煤が付着し、内面は口縁部下より器壁が黒化する。138は小型の壺である。口縁部は引出しが短い逆L字形をなし、端面に刻みを有する。胴部は非常に強い焼成を受けているため外面は表層が剥落し胎土内の砂粒が浮き上がる。また剥落のない口縁下3cm程度迄には煤が付着している。内面も下半は剥落している。遺存状態は136に類似している。139は口縁上面に粘土帶を貼り付け、逆L字状の口縁部を作る。胴部外面には縦刷毛を施し、内面はナデによる。2次焼成の痕跡は残っていない。140~142は上げ底をなす底部である。いずれも外面には縦刷毛が行われている。

143は器台である。外面に縦刷毛を施す。

144は滑石製石錠である。重量93gを測る。表裏両面に溝状の線刻がなされる。線刻はフリーハンドで、刻みも浅く線が蛇行している。下部の一部を欠損する。

SX079 (第38図)

II区中央部で検出する。SK092、094、096~098の土坑群上面に暗赤褐色砂がレンズ状に堆積しており、この砂層出土遺物をSX079として遺物を取り上げている。ここから弥生時代中期初頭~中頃の甕・壺・器台・支脚等がパンケース3箱程度出土した。土坑の一部を切り込んでおり、須恵器及び近世陶器等も出土していることから形成は近世以降によるものと考えられるが、土坑群の上面に位置し、注目すべき遺物も出土しているためここに図示する。

出土遺物 (第41、42図)

145~148は甕口縁部破片である。145は内傾する逆L字状口縁部を有する。外面に縦刷毛を施し、内面にはナデを行う。146はほぼ水平な逆L字状口縁を有す。内外面に2次焼成により器壁が暗赤褐色に発色している。外面上部は縦刷毛のち横ナデを行う。147は内傾する口縁部に胴部は緩く膨らむ。外面に縦刷毛、内面に板状工具によるナデ調整を行う。148も口縁部は逆L字状をなす。145、146、148は胴部は殆ど張り出さない。149~151は底部破片である。149、150は裾部分が踏ん張り気味の高い上げ底を呈す。外面に縦刷毛を行う。151は底部端が外方に肥厚し、平底をなす。2次焼成により外面は暗いピンク色を呈する。

152、153は壺口縁部である。152は粘土帶の貼付による断面鋸形の口縁部を有し、端部に刻みを施す。頸部外面には縦刷毛のち暗文風の研磨を行う。153は小型の壺である。端部を外側に引き出して丸く納める。頸部には貼り付けによる突帯を有する。内面には横方向のヘラミガキが残る。

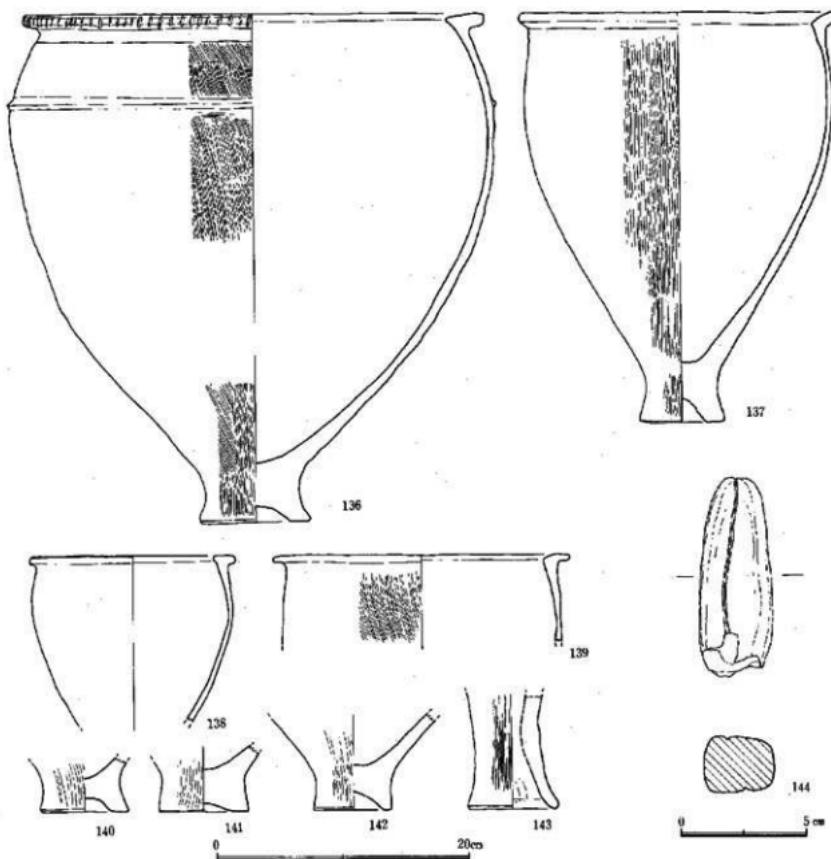
154は大型の鉢である。口縁端部の張り出し部分を打ち欠いている。口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け、口縁部と突帯との間に横刷毛のち暗文風の縦方向のヘラミガキを行う。突帯以下は上半部は横方向・下半部は縦方向のヘラミガキが行われ、下半部は前段階の縦刷毛が残っている。内面は上端部に横刷毛が残るが、全体をナデている。

155は器台である。中空部分は両側から作りだしており、中心部で孔が狭くなっている。

156は支脚である。中実円形棒状で底部はやや外側に張り出している。上端部は中央が一字状に窪んでいる。外面全体に指頭痕が残る。

157は頁岩製石剣失敗品である。両側刃部に擦り切り技法による切断のための溝が残っている。また

両側辺部には敲打が行われ、この後研磨により刀部を作りだしたものと考えられる。また基部には敲打により関が作りだされている。本調査区内では擦り切り技法による頁岩製石剣失敗品が3例出土している(104、157、283)。これらによって製作の工程を辿ると、先ず擦り切り技法による母材からの切り取りの後側辺部・基部等の敲打により成形し(157)、研磨により整形を進め(104)、鏽等を研ぎだす(283)となるようである。頁岩の剥落しやすい石質からも成形における研磨の比重が非常に高くなっている。また失敗・投棄されたものは敲打時の剥落・欠損によるものであろう。158は珪岩製柱状片刃石斧失敗品である。後正面となる部位には既に斜方向の研磨が行われているが、反対面は剥離のみであり、製作中の剥離と考えられる。打撃方向は図面上部からである。159は凝灰岩製たたき石である。一方の長側辺及び両小口部を使用している。裏面中央部には敲打痕が残る。160は玄武岩製蛤刃磨製石斧である。重量1090gを測る。刃部のみ研磨しており黒色を呈する。上端部～側面は敲打のみで止



第40図 SX073出土遺物実測図 (136~143は1/4、144は1/2)

めている。刃部はV字形をなし、鋭利に仕上げている。

161は貝製の玉である。径1.5cmの球形をなし、重量5.79gを測る。色調は白色～黄白色を呈し、淡茶褐色の年輪が螺旋状に巡り文様化している。中軸に直線的な穿孔を施すが、両端部はやや広がる。僅かに剥離によると考えられる傷が残るが、全体に丁寧に研磨されている。玉の大きさから考えてゴホウラの唇部を利用したものと考えられる。

SX091 (第38図)

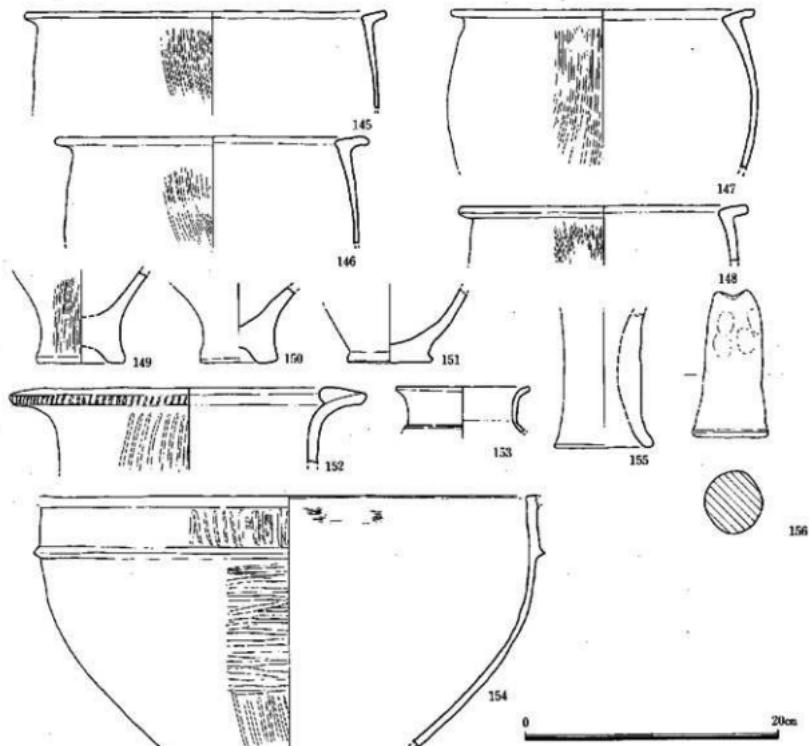
II区中央部で検出する。SX079除去中にSK092の上面で、完形の小型壺が正置して検出された。掘り方は不明であるが、SX093と共に住居等の遺構に伴う可能性が高い。土坑群の廃棄後に形成されたものであろう。

出土遺物 (第44図 162)

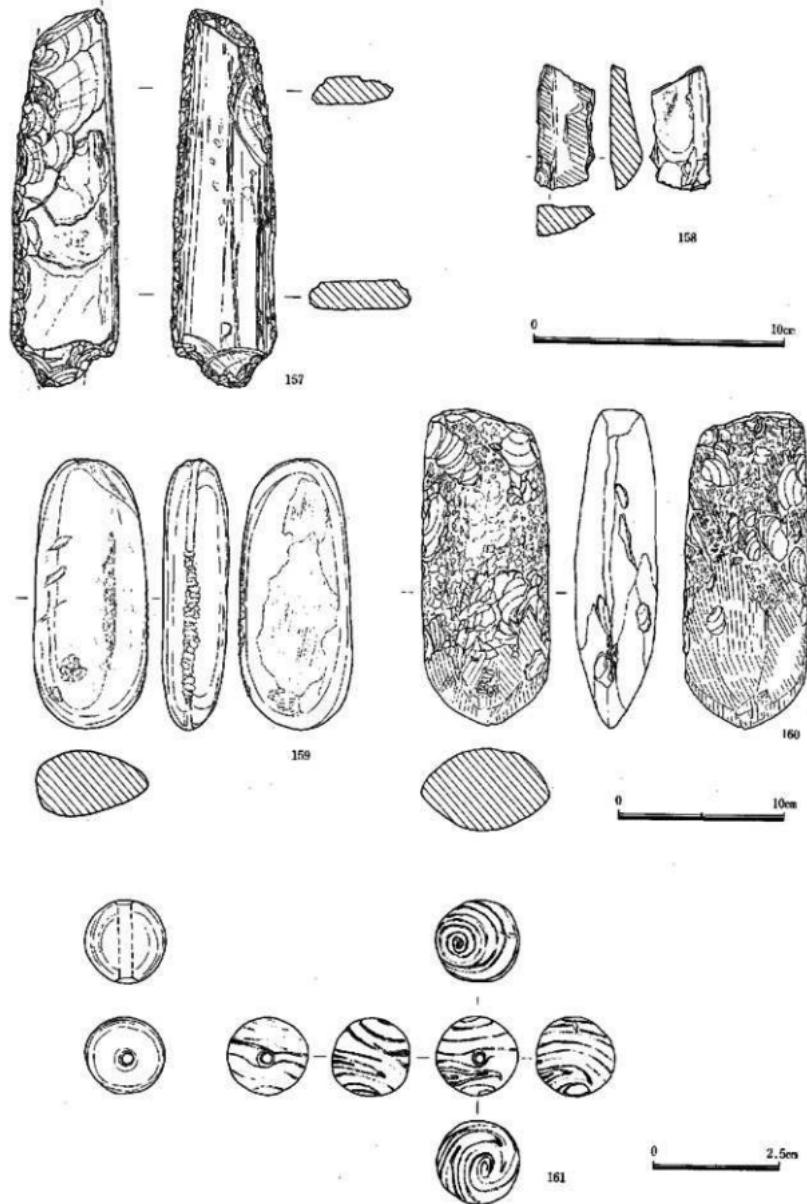
ほぼ完形の小型の壺である。逆L字形状口縁をなす。胴部には縦刷毛を行い上半部が剥落している。

SX093 (第38図)

II区中央部で検出する。SK097上面のやや浮いたレベルで壺の頸部以上が正置して出土した。検出時は完存しており人為的なものと判断できる。やや汚れた暗黄褐色砂中からの出土で、掘り方は不明で



第41図 SX079出土遺物実測図1 (1/4)



第42図 SX079出土遺物実測図2 (159・160は1/3、157・158は1/2、161は1/1)

ある。

出土遺物 (第44図 163)

錫形口縁を有する壺である。口縁端部外面には刻み目が施される。頸部には断面三角形の突帯が貼付され、直立する口頸部には横ナデの後、暗文状の研磨が行われる。

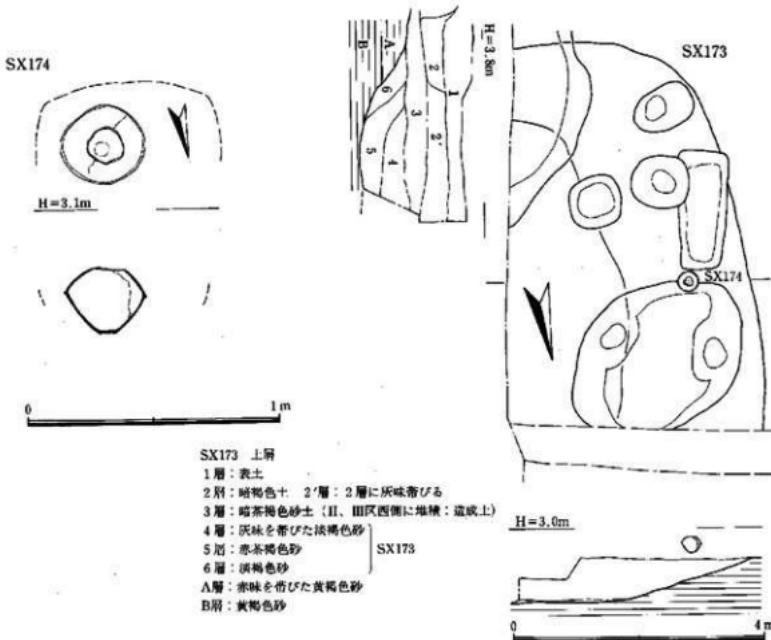
SX173 (第43図)

III区中央東端で当初の検出面を更に20cm程下げるところまで検出する。壁が緩やかに立ち上がる不整形な窪み状の落ち込みである。SK156に切られている。弥生時代中期後半に属する壺・壺・器台、鉄斧が出土している。

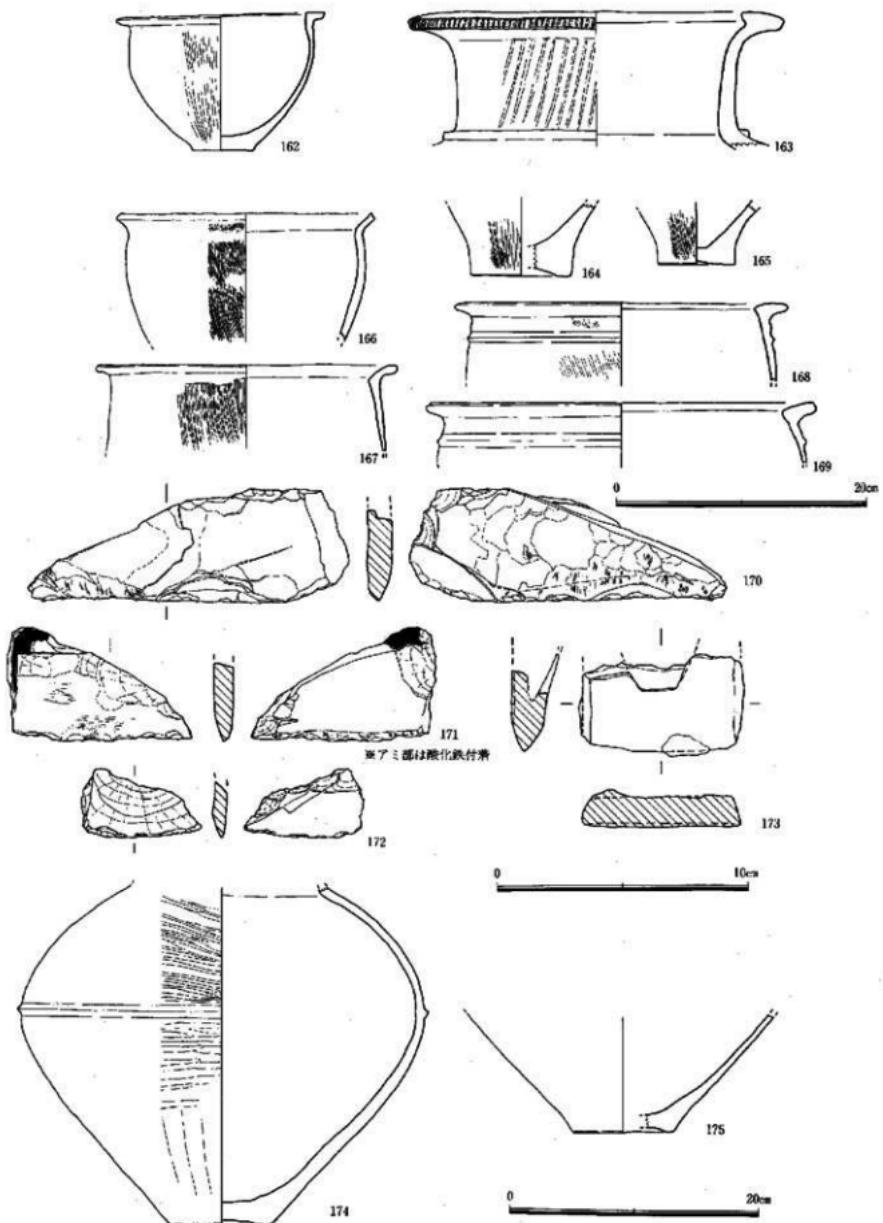
出土遺物 (第44図 164~173)

164、165は底部破片である。共に外底面中央がやや盛んだ上げ底を呈する。外面には明瞭な縦刷毛が残る。166~169は口縁部~上半部破片である。166は口縁部が緩く如意形に屈曲し、端部は横ナデにより面取りを行っている。外面縦刷毛、内面横ナデを施す。167~169は逆L字状の口縁を有するものである。167は上端面の内傾が強く、端部は肥厚気味に丸く納めている。168は口縁部下に小さな断面三角形の突帯を貼付する。外面には縦刷毛を行う。169は端部上面は内傾している。また外面端部には線状に窪んでいる。口縁下に突帯を巡らしている。

170は頁岩製石鎌失敗品である。刃部がやや内湾している。残存形状より先端部附近であると考えられるが背部が欠損しているため形状は不明瞭である。刃部には剥離痕が認められるが、両面に研磨が認められ、製作途中の破損品と考えられる。171は頁岩製石鎌破片である。表面には欠損部を除いて横



第43図 SX173、174実測図 (1/20, 1/80)



第44図 SX091、093、173、174出土遺物実測図 (162~169 174・175±1/4、171~173±1/2)

方向の研磨が行われる。また裏面は刃部の一部を除いて剥離が認められる。刃部には細かな剥離が残るが、使用時のものか製作時のものかは明らかでない。172も頁岩製の石鎚であろうか。片面は節理面で剥がれ、もう一方は打撃によって剥離されている。刃部に研磨が認められる。

173は刃幅5.9cmを測る鋳造鉄斧である。横断面台形を呈し、一面が凹型をなす。メタル反応L(●)である。錫化のため袋部底部表面が厚さ1~2mmで剥がれかけている。鋳造品では一般的にこのような膜状の剥落は起こりにくいものと考えられる。金属学的な分析作業は行っていないが、脱炭工程を経た製品の可能性が高いと考えられる。製品としては炭素量の高い鉄の表層を脱炭処理することにより脆さを克服しようとしたものであり、このため性質の異なる部位に錫が進行して表層の錫化剥落が起きるのではないかだろうか。

SX174 (第43図)

III区SX173の上面で壺の胴部を正置された状態で検出する。掘り込み等は不明である。また壺内から甕の底部、砾石、貝殻等が出土している。

出土遺物 (第44図 174、175)

174は据えられていた壺である。頸部以下の完存品である。胴部の上部1/3程に最大径を有し、断面三角形の突帯を貼付する。頸部から胴部下半1/3迄は横方向、それ以下は縦方向のヘラミガキを行う。底部はゆるやかな上げ底である。175は174内から出土した底部破片である。形態は174と同じで、外面は器面の剥落が見られる。

8. その他の遺物

包含層A・B

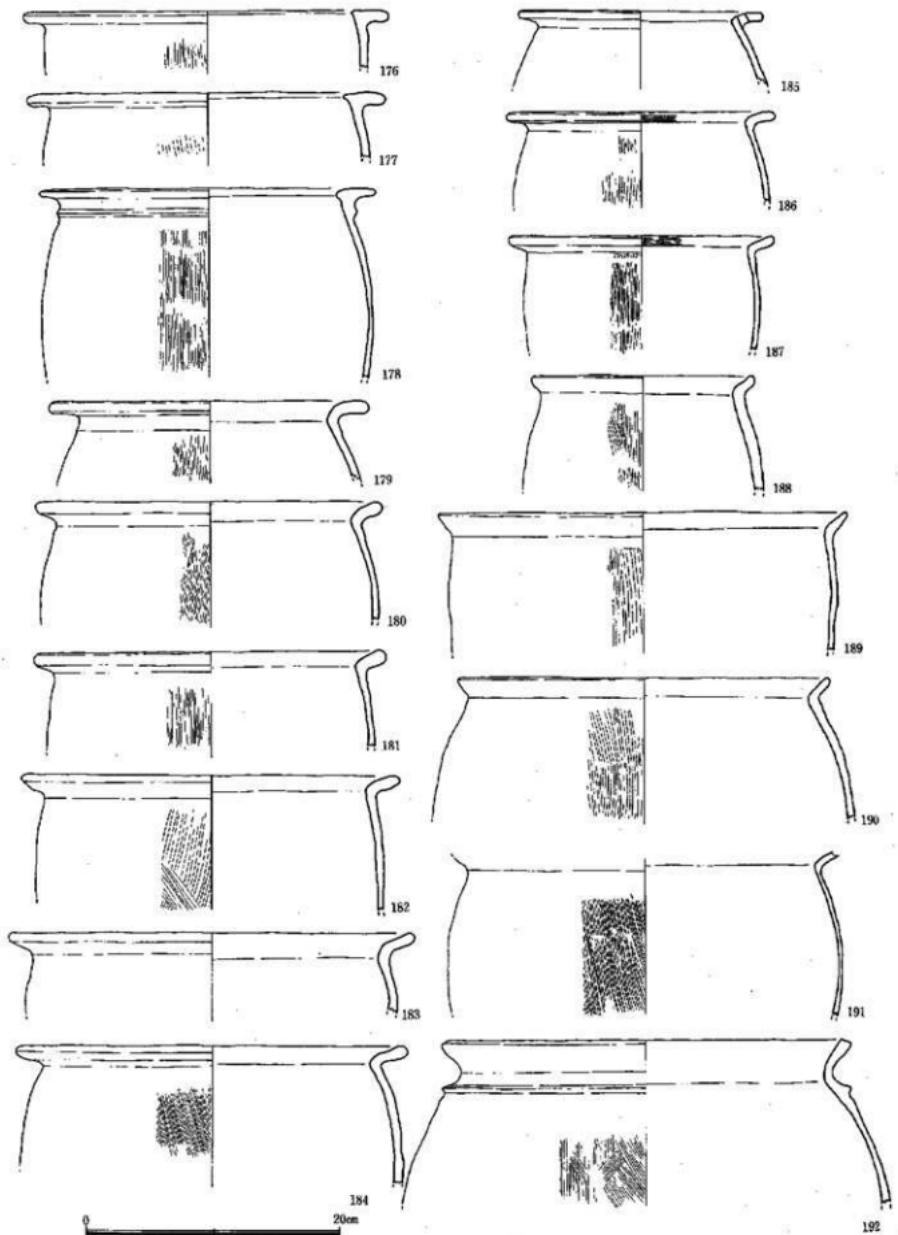
II区南側の緩斜面上に形成された整地層から多量のまとまった遺物が出土している。東側のまとまりを包含層A、西側のまとまりを包含層Bとして遺物の取り上げを行う。

包含層Aは厚さ30cm程度の暗褐色土層から弥生中期の土器を主体としてパンケース60箱程の遺物が出土した。土器の包含される層は土壤化しており、近世遺構の埋土に同じである。また近世陶磁同一土層から出土しており、形成時期は集落として発展を見せる近世以降であると考えられる。出土遺物は弥生時代中期の甕・壺が主体を占め、丹塗り祭祀土器も多く出土している。遺物は破片だけでなく、復元可能なものも多い。この様に時期が比較的まとまっており、遺物の散逸もある程度抑えられていることから、この整地層は砂丘最高所であり甕棺墓群が形成されている旧唐津街道付近の土砂によつて行われた可能性が高いと考えられる。更に丹塗り土器は甕棺墓に伴う祭祀土坑に本来投棄されたものであろう。

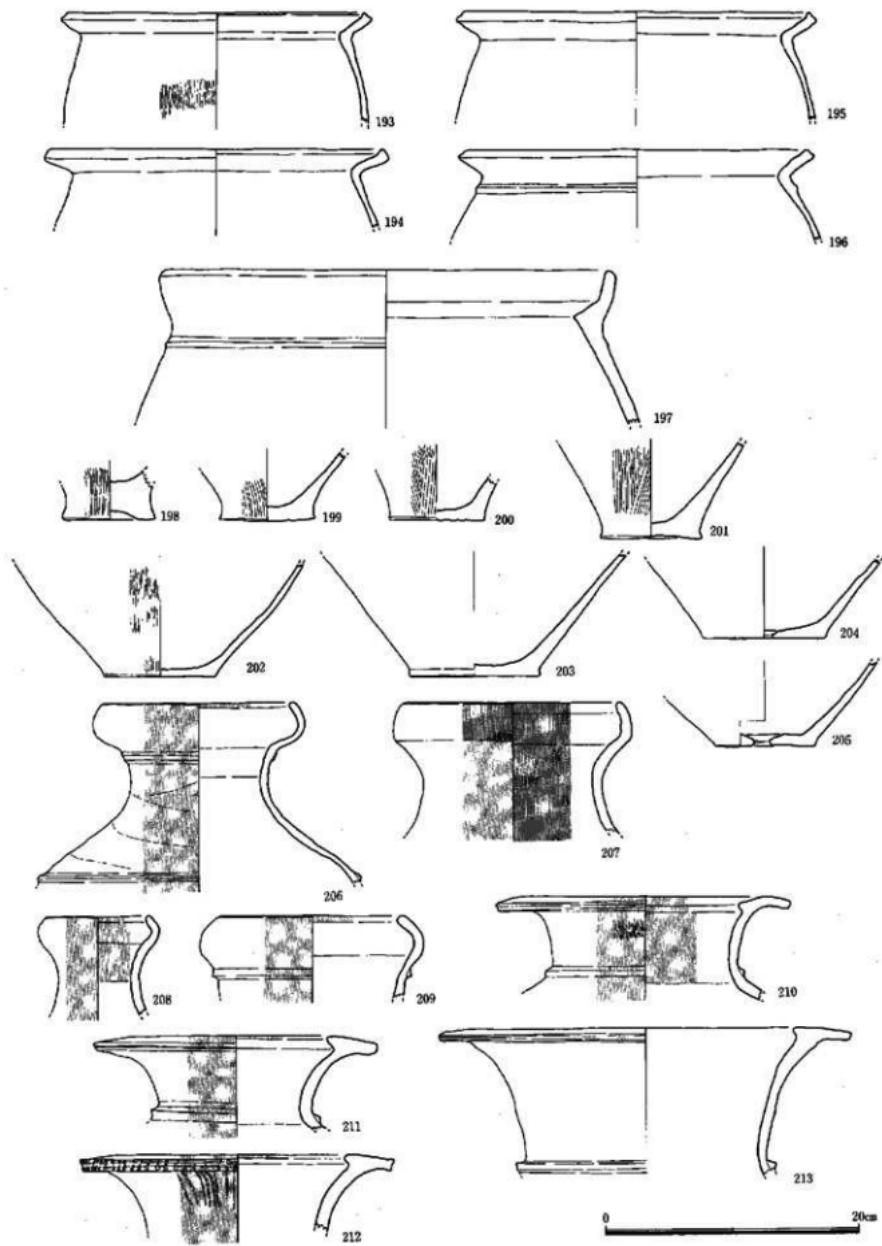
また包含層Bは包含層Aと同一レベルで検出した褐色砂層中に形成されている。弥生時代中期~後期の土器を主体としてパンケース25箱程度出土している。その他の時期の遺物は須恵器甕破片1点及び近世陶磁器が少量出土しているのみである。また包含層Aと異なり日常土器が主体を占め、祭祀土器は僅少である。除去後に占墳時代の竪穴住居跡SC086を検出しておらず、包含層A同様形成要因は再堆積によるものと考えられる。なお包含層Bからは漢式三角縁が出土している。出土土器は中期後半が主体をなしており、鐵もこの時期に含まれる可能性が高い。

出土遺物 (第45図~50図)

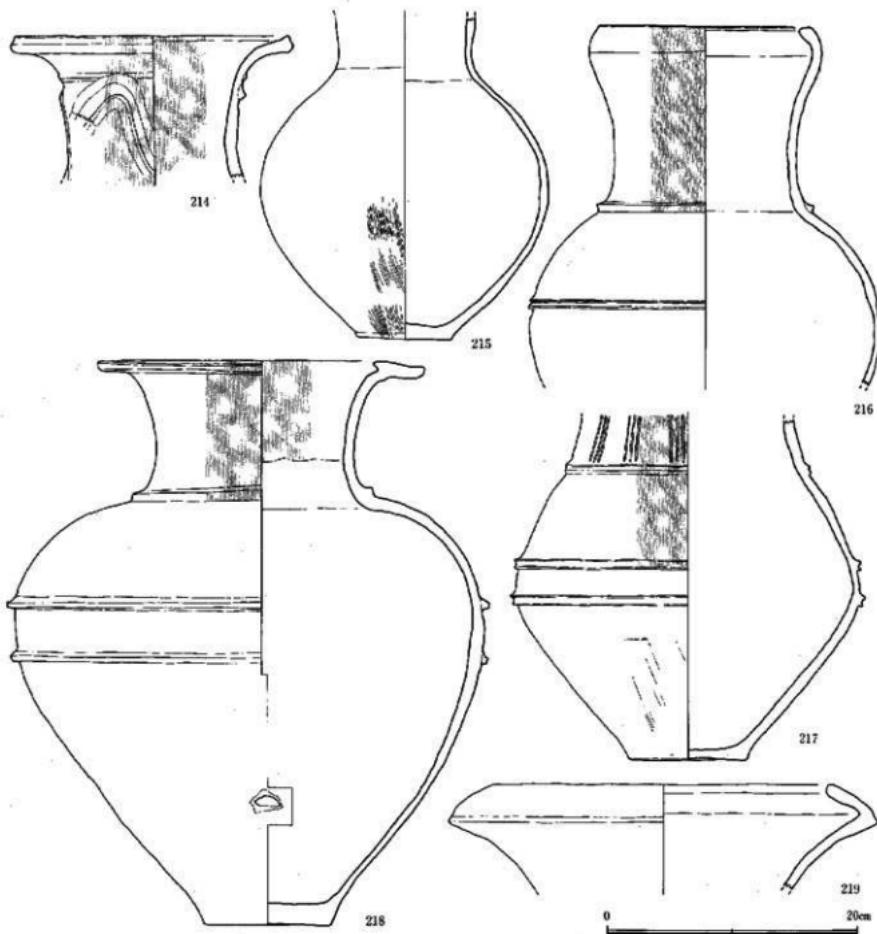
176~235は包含層A出土遺物である。176~201は甕である。176~192は口縁端部逆L字状及び「く」字状を呈する。193~196は所謂跳ね上げ口縁を有する。口縁端部外面は横ナデにより面取りを行い、緩く窪んでいる。また端部を上方に引き出し断面嘴状を呈している。197は内湾する口縁部内面屈曲部に粘土帯を貼付し、横ナデにより断面がシャープな三角形の張り出しを有する。また頸部外面には突



第45図 包含層A出土遺物実測図1 (1/4)



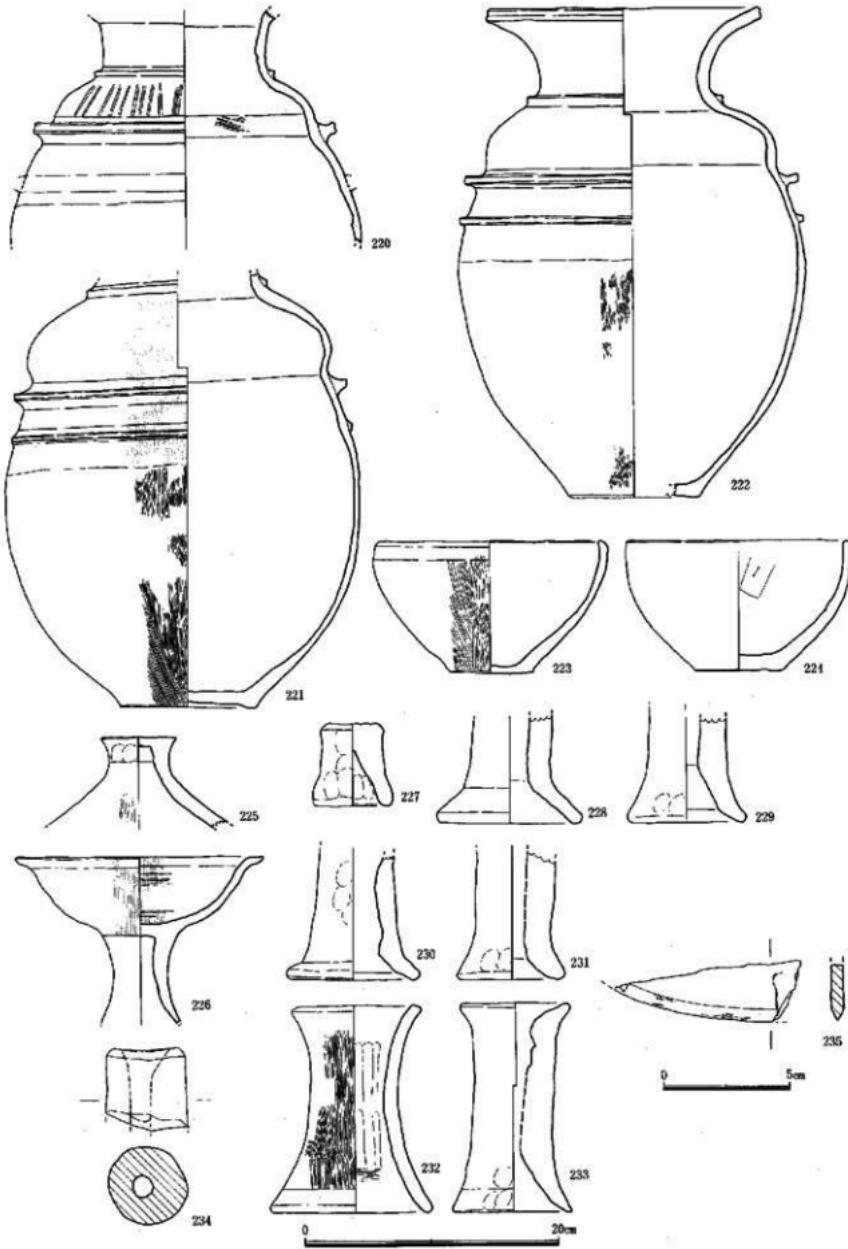
第46図 包含層A出土遺物実測図 2 (1/4)



第47図 包含層A出七遺物実測図3 (1/4)

帶が痕跡的に巡っている。198~201は上げ底~平底の底部破片である。外面縦刷毛を行う、201には内面にも縦刷毛が残る。

202~218は壺である。202~205はいずれも平底である。204、205は焼成後に底部中央に外面から内面への打撃による穿孔を行っている。206~209は袋状口縁を呈する。206は外面に丹塗りを施す。顔料の塗布は刷毛状工具により横方向に行われている。207は口縁部屈曲部~内面には焼成時に炭素吸着により黒色磨研と同様の状態となり表面が均質に黒色化する。また外面口縁屈曲部以下は赤色顔料が残る。210~213・218は動形口縁をなす。210~212・217は丹塗り土器である。210は内面頸部まで顔料の



第48図 包含層A出土遺物実測図4 (220~234は1/4、235は1/2)

塗布が見られる。頸部外面は縦刷毛による。211・212は外面～口縁内面端部に顔料を塗布する。212は口縁端部外面に刻みを施し、頸部には暗文状の縱方向の研磨が行われる。218は8割程の復元資料である。頸部以上の内外面に丹塗りが行われる。胴部は肩が張り、頸部に三角形の突帯1条、胴部に2条の断面コ字状突帯を巡らせる。胴部下半に内面からの焼成後穿孔を行う。214は外面に丹塗りを行い、口縁端部には粘土帯を貼り付け跳ね上げ口縁状に作る。口頸部には粘土紐貼付による擬波状文様がある。また口頸部から口縁部への屈曲部に断面三角形の突帯を巡らす。胎土は黄白色を呈し在地のものとは胎土が異なり、撤入品と考えられる。215は長頸の壺。216は頸部直下まで刷毛状工具で赤色顔料を塗布する。11頸部は長く、11縁部は袋状を呈する。頸部に三角形、副部にM字形の突帯を巡らせる。217は口頸部まで赤色顔料を塗布する。胴部及び頸部に3条のM字形突帯を貼付する。口頸部に3本1組の縱方向の沈線を刻む。219は内傾度の強い複合口縁壺である。

220～222は弧形土器である。いずれも赤色顔料の塗布が認められる。また胴部には2条の断面コ字状突帯、頸部に1条の三角突帯を巡らせてある。220は端部を欠損するが口縁部逆L字状を呈するものである。頸部以下に暗文条の研磨が施される。221は口頸部以上を欠失する。胴部下半には縦刷毛が残る。222は広口の口縁部を有する。胴部下半に縦刷毛が残る。

223、224は体である。口縁部は内湾気味に納まる。223には縦刷毛が残る。

225は蓋である。外面上には刷毛目を施す。

226は丹塗りの高杯である。杯部内面は横方向に研く。外面～脚部内面は器面の剥落が著しい。

227～231は支脚である。227は上面は中空とならず杯を反転したような形状を呈す。228～231は裾部が広がり中空となる。

232、233は器台である。232には外面に縦刷毛、内面に指ナデの痕跡が残る。

234は羽口の先端部であろうか。非常に強い熱を受けているが、先端部はガラス化していない。

235は頁岩製石包丁破損品である。刃部は丁寧に研磨しているが、その他には研磨は見られない。

236～268は包含層B出土遺物である。236～243は甌である。口縁部形態は逆L字状を呈するものと、「く」字状に屈曲するものがある。比較的大型の241～243は頸部若しくは頸部や下方に断面三角形の突帯を巡らせる。244～246は跳ね上げ口縁の甌である。口縁端部を嘴状に上方に引き出す。外側端面は横ナデによる面取りを行ひ綾い窪みが残る。248～251は小型の甌である。「く」字状に屈曲する口縁部を有し、胴部は中位が張り出す。外面縦刷毛による。

252、253は鉢である。252は口縁部は反転し外方に屈曲して言ひます。253は口縁端部内面に粘土紐を貼付し、内面に受け口状に短く張り出す口縁部を有する。外面は縦刷毛による。

254、255は赤色顔料を塗布した袋状口縁甌である。口縁部直下に断面三角形の突帯を貼付する。256は動彫形口縁を有する広口の甌である。口縁端部状面に粘土帶を貼付している。

257、258は支脚である。いずれも内面が接合痕から大きく剥落している。

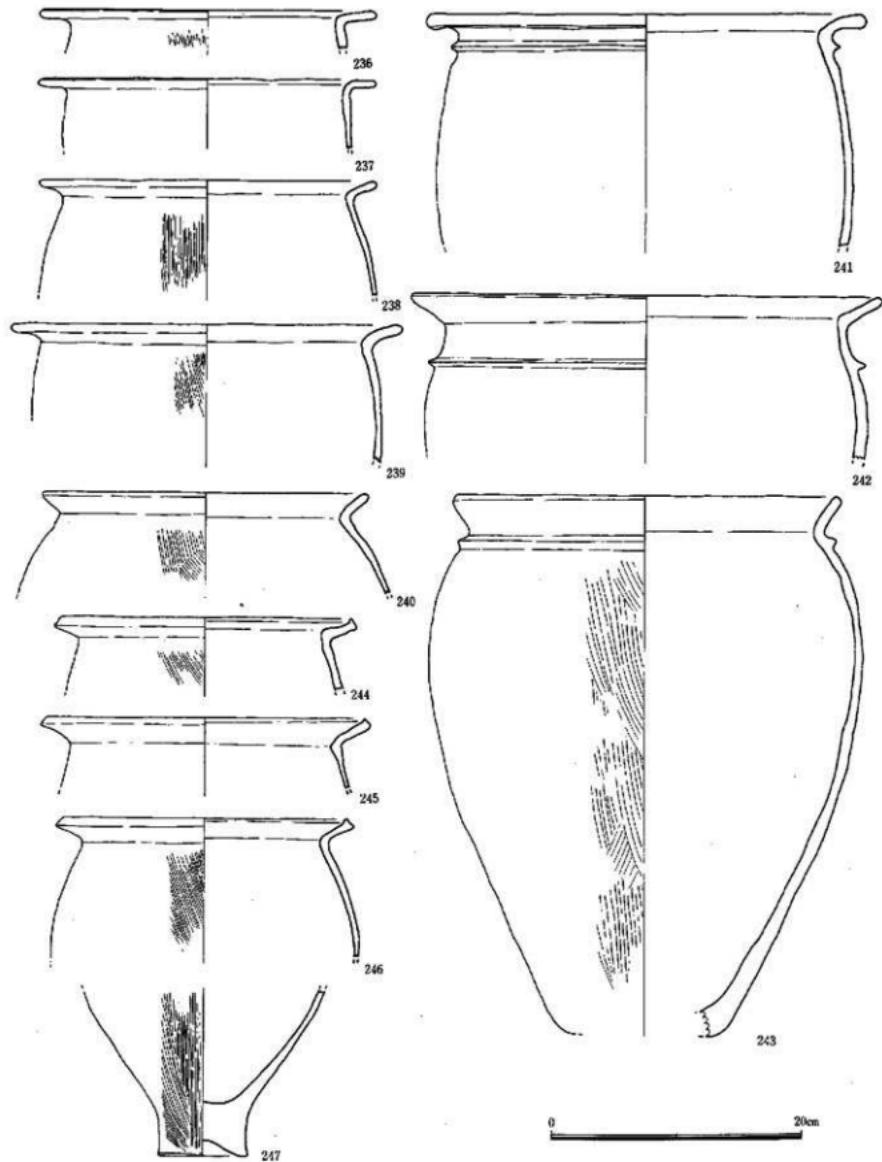
259は緩く湾曲する板状の把手である。外面にはタキが残り、内面は指ナデによる。上端面は面取りを行い、下面は丸みをもって納める。淡黄褐色を呈し、雲母を多く含む。

260は鉤状の把手を有する土製品である。杓子状の形態をなすものであろうか。

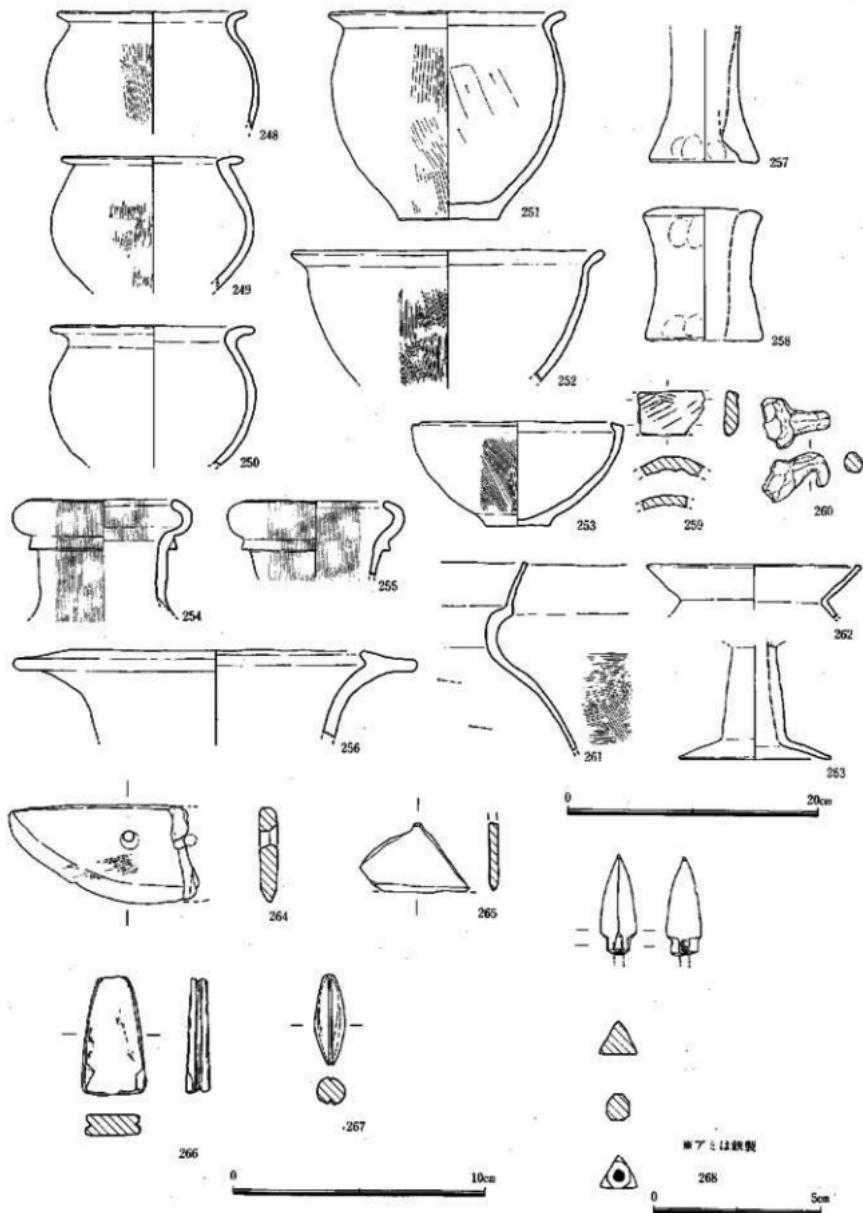
261～263はSC086上面付近で出土したものである。一部住居埋土まで掘削したのである。

264は粘板岩製石包丁欠損品である。孔間は心々で2.4cmを測る。265は刃部破片である。石包丁であろう。266、267は滑石製石錐である。266は平面鉄鑄形を呈し、側面に周回する溝を彫り込む。重量21.4g。267は紡錘形を呈す。長軸方向に周回する溝を有する。重量6.3g。

268は青銅製漢式三角錐である。錐身部は三角錐をなし、これに断面正んだ六角形の茎部が統く。軸



第49図 包含層B出土遺物実測図1 (1/4)



第50図 包含層B出土遺物実測図2 (248~263は1/4、264~267は1/2、268は2/3)

部は鉄製で基部端から折損している。三角錐の出土は市内2例目である。

II区・III区検出面

II区南半部中心に検出時に近世陶磁器と共に弥生時代中期を主体とした土器、石器、鉄器が出土している。これ以外の時期に属する遺物は僅少である。II区南側は近世以降の土坑が主体を占めており、これに混入した遺物を取り上げていると考えられるが整地等の影響から時期的にもある程度まとまっていると考えられるため図示しておきたい。

出土遺物（第51図）

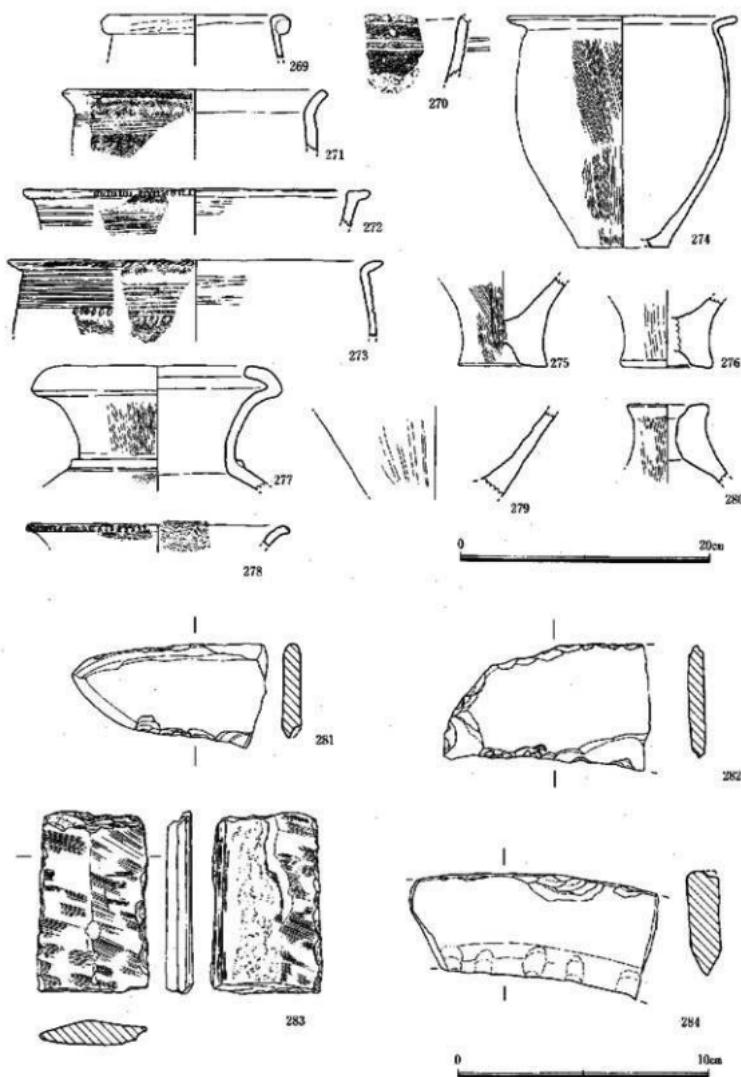
269～279、281、282はII区出土、その外はIII区出土である。

269は無文土器甕である。断面円形の粘土紐を貼り付けて口縁部を成形している。内外面共に強ナデ調整による。色調は内面淡黒色、外面黒色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。270～273は西部瀬戸内地域からの搬入品である。いずれも小破片の甕である。270は粘土帯貼り付けにより成形した口縁端部を欠失する。口縁下に2条の沈線を巡らせる。内面上端部から3cm程は横方向のミガキを行う。271は口縁部は外方に緩く屈曲させる。屈曲部下に鋭利な断面三角形の沈線を巡らせる。沈線ははみ出した粘土から、2方向からヘラ状工具で削るようにして作りだしたものと考えられる。内面の屈曲部にはナデによる稜線が残る。口縁部は上面端部に粘土帯を貼付して逆L字形を作る。外側端面には刻みを施す。口縁部上面～内面には丁寧な横方向のヘラミガキが行われ、また外面には口縁部直下に現存で3条、最下部の痕跡を含めると最低4条の沈線が巡る。273は口縁部は折り曲げにより逆L字形を作り、外面端部には斜方向の刻み目がいる。口縁部上面～内面には丁寧な横ミガキが行われ、また外面には綿刷毛の後、口縁屈曲位置から8条の沈線が刻まれ、更に沈線直下には刺突による列点文が施される。これらの甕は西部瀬戸内地域での土器編年では前期末～中期初頭に位置づけられる資料である。275、276は上げ底の底部である。非常に強い熱を受けており、破面は暗いピンク～紫色に変色する。残存部分では器面の剥落は見られない。278は外方に聞く口縁端部である。端面は僅かに垂下して、外面には刻みを有す。また口縁条面には2条の粗い波状文を施す。胎土は灰白色を呈し石英微砂粒を含む。搬入品である。280は有孔の蓋である。外面には綿刷毛を行い煤が薄く付着する。また内面は板ナデによる。281、282、284はいずれも凝灰岩製の石錐で281、282は未製品若しくは失敗品である。284は刃部敲打痕が残るが全面丁寧に研磨しており、使用時の欠損の可能性も考えられる。283は真岩製石剣失敗品である。刃部片側には擦り切りの痕跡が残る。また両刃部には敲打が行われ、身部には横方向の研磨が行われる。身部片面には鏽が磨き出される。

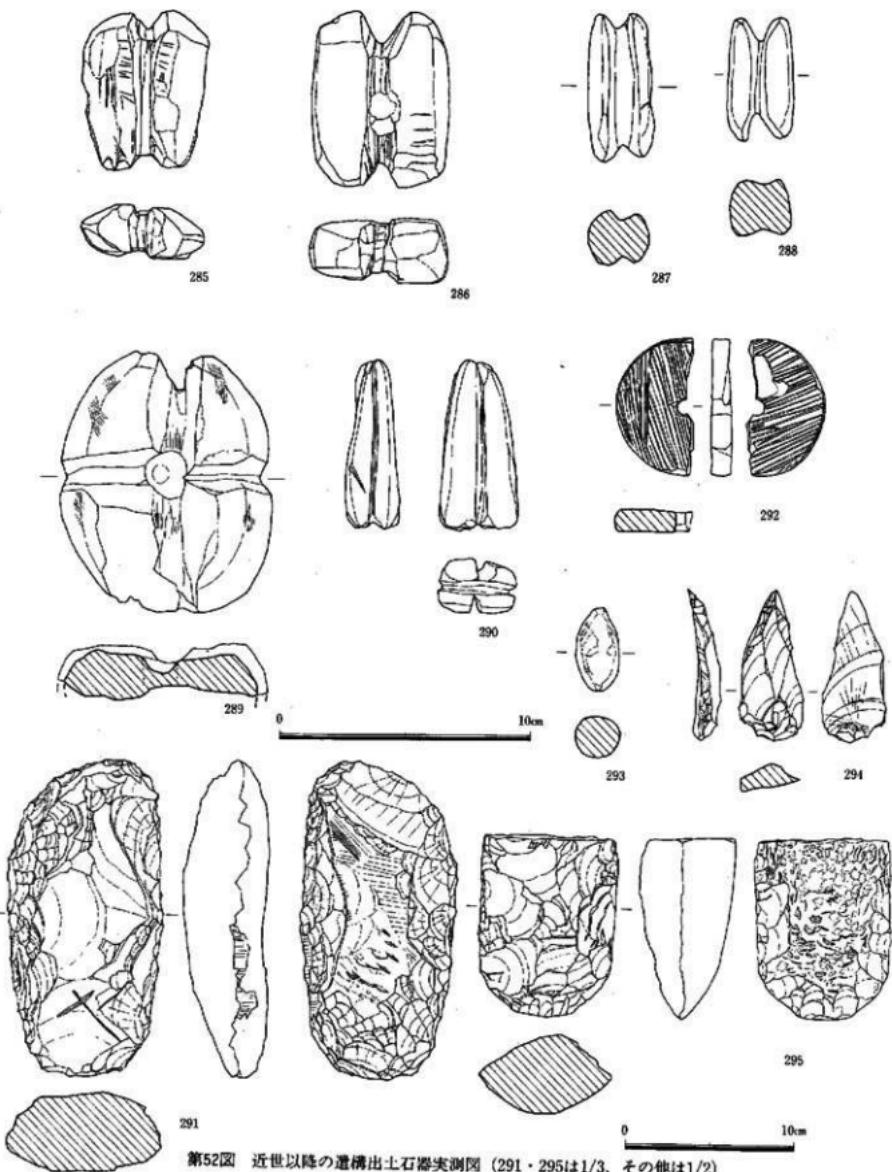
トレンチ及びその他の遺構出土遺物（第52、53図）

第52図は近世以降の遺構から出土した石製品、第53図はトレンチ出土の石製品及び骨角製品である。混入資料で時期不明であるが注目すべき遺物も多いためここに図示する。

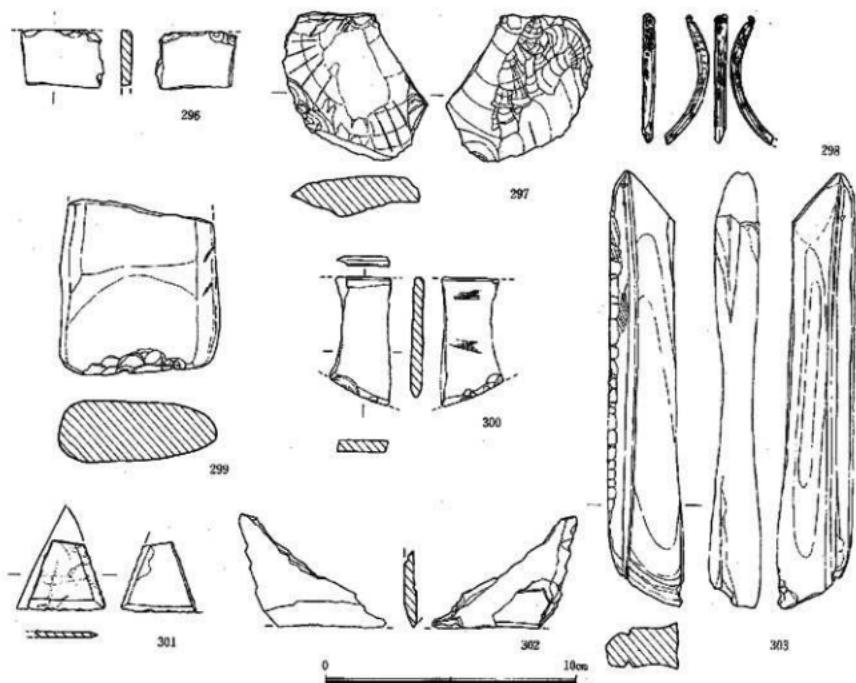
285～290は有溝の滑石製石錐である。289以外はほぼ完存品である。重量は285は82.7g、286は160.3g、287は43.5g、288は46.8g、290は65.8gを測る。289は裏面半分が欠損する。105と同形製品になるとされるが、中央部の穿孔が途中で止まっており、孔が貫通していない。また破面以外の表面は火を受けて煤が付着している。製作途中で放棄されたものか、製作時に欠損したものは不明である。291は玄武岩製石斧未製品である。裏面には身部に研磨を開始しているが、表面は剥離段階である。292は滑石製筋車である。側面及び裏面には溝状の刻みが施され、研磨に至っていない。293は滑石製投弾。294はサヌカイト製の石器である。バティナが古く旧石器時代の遺物と考えられる。尖頭状を呈するナイフ形石器とも考えられるが背のプランティングが剥片剥取し段階のもので、加工を加えていないことからナイフ形石器としては認定できない。先端部に細かな剥離が見られることや尖頭状を呈



第51図 II・III区遺構検出面出土遺物実測図 (269~280は1/4、281~284は1/2)



第52図 近世以降の遺構出土石器実測図 (291・295は1/3、その他は1/2)



第53図 トレンチ出土遺物実測図 (1/2)

することから尖頭状石器としておく。表面に見られる剥離痕は石核か剝取する段階で見られる剥離である。また基部には研磨痕がみられる。サヌカイトを縦剥ぎに剥離する技術、打撃方向が一定している事からナイフ形石器を主体とする時期と同等の技術を有すると考えられる。295は玄武岩製石斧未製品である。表面は剥離段階、裏面は敲打段階である。刃部にも研磨は認められない。296は凝灰岩製の石包丁であろうか。297は玄武岩製で縦長剥片の一部に研磨痕が観察される。298は猪牙製の結合式釣り針である。中央部から研磨方向が異なり、丸みを持つ形態から針部であると考えられる。先端部を欠くが片側端部に刻みが入る。紐擦れ痕は認められない。299は砂岩製の砥石である。荒砥であろう。300は頁岩製の石包丁である。背は研磨され刃部にも研磨痕が残る。301は凝灰岩製の磨製石鎌である。平面三角形を呈す。周辺部には研磨が施されるが中央には敲打痕が残る。302は頁岩製の石器刃部である。石鎌であろうか。303は粘板岩製砥石である。全面使用しており、表裏両面に長軸方向に断面V字形の擦り切り技法による溝が刻まれる。また反対側面では擦り切りによる切断が既に行われている。

9. 小結

本調査において旧石器時代～近代にかけての多くの遺構・遺物が検出され、大きな成果を上げることが出来た。ここではこれらの成果を略時代別に列記する事により今後の検討材料としたい。

1、近世以降の掘削による井戸からの出土資料であるが、旧石器時代に属する尖頭状石器(294)が出土した。剥離技術等からナイフ形石器と同等の技術水準を有するものと考えられる。井戸掘削時に古砂面をくり抜きこの際に引き上げられた可能性が高く、新砂丘以下に旧石器時代の遺物が含まれている可能性を提示した。

2、弥生時代に属する遺構には竪穴住居跡・土坑等があり調査区内ではその数は余り多いとは言えないが、整地層・近世以降の遺構等から中期を主体とした大量の上器・石器が出土している。この中には既に調査が一部行われている甕棺群に伴うと考えられる祭祀土器も多数含まれている。以上の結果から本遺跡群中には少なくとも弥生時代中期以降の大規模な生活・埋葬遺構が存在していると考えられる。

これに関連して多くの石製品・未製品・失敗品の出土が注目される。多様な石材を用い、多種の製品が出土しており、未製品・失敗品が多く出土するのが大きな特徴である。土坑からは玄武岩・頁岩等の剥片も出土しており石器製作を行った事実も確認できる。製作工程の復元、石材の搬入元との役割分担・関連等を探る重要な資料である。石器製作には擦り切り技法の使用(104、157、283)等技術的にも注目される。また時期的には幅が広いものの滑石製品の出土も多く、特に石撻は形態のバリエーションに富み漁法・対象物等の影響されていると考えられ、当時の生業を探る資料となろう。生業に関連してSK098の出土の製塩土器も注目される。中型の日常土器を使用しており、器面には製塩作業で認められる剥落・変色が観察でき、土坑内からはこの甕の小剥片が多量に出土している。SK092、094、096、097、098の土坑群は弥生時代中期初頭に属し接合関係から同時期に存在した可能性が高く、これからは製塩土器の他有孔の壺、石器未製品・失敗品、貝輪、無文土器高环等の資料が多数出土している。埋土には炭化物を多量に含んでおり、製塩作業との関連は明確ではないが廃棄坑として様々な遺物が投棄されている。煤の多量に付着した甕(107、108、115他)、内面のみが熱により激しく剥落する壺(110)等関連を想起させる遺物も多い。

遺跡の立地を反映した国内外の搬入品も多く出土している。漢式三角錐(268)、半島系無文土器(124-269)、南海産の貝製腕輪未製品(119)・貝玉(161)、西部瀬戸内からの搬入甕(270~273)等が上げられる、この他にも214、259、278も搬入土器と考えられる。いずれも出土例が僅少な資料である。このような搬入品の多さは調査次数の進む西新町・藤崎に匹敵し、時期的には弥生時代後期~古墳時代初頭を主体とする前二遺跡に先行するものであり、博多湾岸部で交流のあり方を考えさせられる。

3、砂丘北側緩斜面上には古墳時代前期からの竪穴住居跡が11棟検出された。擾乱による破壊を考えると実際は更に増加すると考えられる。弥生時代ほどの遺物量を見ないものの各時期を通じた土器が出土しており、集落としての営みは統一していたようである。ただや弥生時代に見られたような対外的な門戸としての役割は今回の調査では確認できていない。この中でSC011で検出した、電気窯に伴う焼壺の埋納は類例を聞かないものであり、祭祀と生業との関わりを示す良好な事例である。

以上不十分ながら調査成果について簡単に列記したが、立地として背後に広大な湿地をひかえ内陸と隔絶した環境にある博多湾沿岸部に位置する遺跡に通じて見られる、対外的な交流に起因した特異性及び突発的な先進性が色々と示された遺跡であると言えよう。前述の様に博多・西新町・藤崎等の沿岸部の他の遺跡では弥生時代終末期以降に外來の影響が端的に現れるのに比べ、姫浜遺跡では弥生時代前期末~中期初頭以降という早い時期からこのような現象が現れることが本遺跡の大きな特徴であると考えられる。

図 版



1. 調査地点より西を望む



2. 調査地点より北を望む（前方島影は能古島、その後ろは志賀島）



3. I区全景(北から)



4. II区全景(北から)



5. III区北半全景(南西から)



6. III区南半全景(北西から)



7. SC011(東から)



8. SC011室内出土状況(東から)



13. SC038東半(北から)



11. SC030、033(北から)



9. SC022(西から)



14. SC038遺物出土状況(東から)



12. SC038西半(北から)



10. SC030(西から)



15. SC039 (北から)



16. SC041 (北から)



17. SC042 (北から)



18. SC086 (東から)



19. SC105 (北から)



20. SK092, 094, 096, 097, 098 (東から)



21. SK092 (北から)



22. SK092土層 (西から)



23. SK094 (東から)



24. SK096 (北から)



25. SK096土層 (北から)



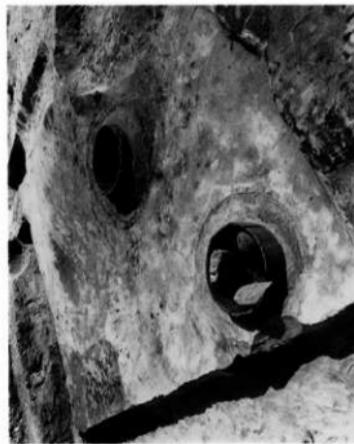
26. SK098 (西から)



27. SK097, 098 土管 (南から)



28. K121 (西から)



29. SE020, 021 (西から)



30. SE084 (東から)



31. SF122 (南から)



32. SX026 (西から)



79



81



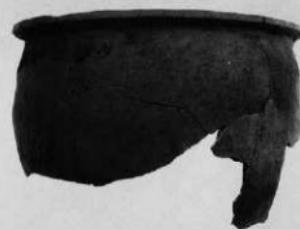
82



89



92



107



108



114



109



110



115



118



121



120



124



133



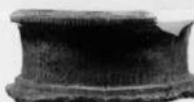
134



135



162



163



174



136



137



214



231



217



216



218



222



271



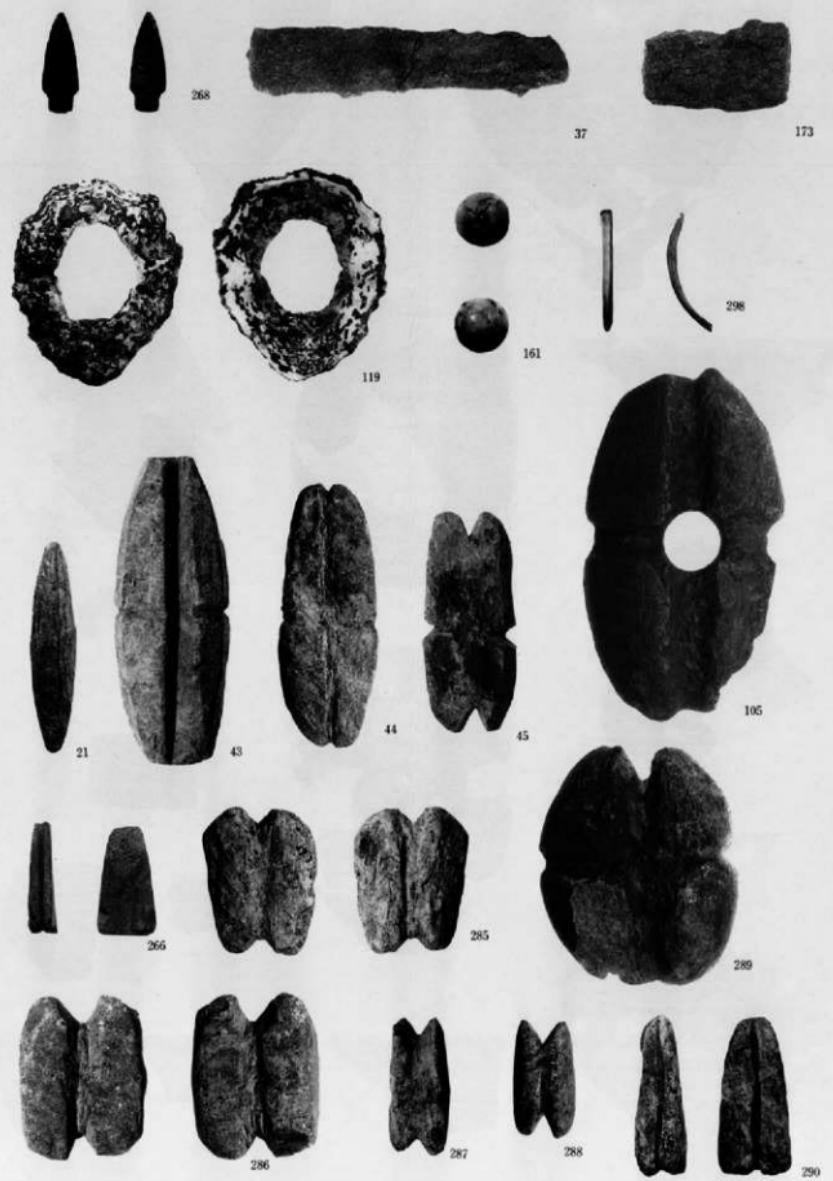
272



270



273







160

291



159



295



170



264



265



171



172



281



282



284

福岡市埋蔵文化財調査報告書第478集

姪浜遺跡2

1996. 3. 29

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 森田印刷

福岡市中央区大手門2丁目1-21

